

彩色人情本

泉鏡花作

一

山の手でも、東京でないと、こんな圖は見られまい。背戸の柿の樹へ顔の赤いお猿と言ふのが、木の實の数はど飛んで集る山家の人たちに話したら、帆柱の頂邊へ天狗が留つたと聞くより、眞個にはしないであらう。

御覽なさい。．．．．．麴町の、トある横町の錢湯の傍の電信柱に、今は小櫻を藍にかへした鎧とも見える、ずツしりとした刺子扮装、おなじく頭巾、手甲を、犇と一縮したのが、眞新しい草鞋のまゝで三人、鷲だと言ふ形で、勢よく、すつくと高く留つて居る。

空は冷たく、青く澄んで、北の方に、あはれ時雨か、凧が吹添つたら、時ならぬ白いものを、ちら／＼と持つて来さうな、周圍は古綿の心の白いやうな、

疊まつた一叢の寒い雲がある。

三羽の鷺は、揃つて其の天に小手を翳して居る。

身體は大地を離れて居るが、人間離れがして居るのでない。言ふまでもなく電信柱の根には三番組の纏を、バラリ馬簾に氣競を含めて、同じ粧の一人、別に取巻いて消防夫が五六人。

別に不思議なことはない。火事は鎌倉河岸あたりと、三番組から駈出したのが、此の邊へ來ると最う煙が散つた。影の残つたのは其の雲ばかりらしい氣がしたので、一人の兄哥が、

「待ちな。」

と聲を掛けると、手代に纏を渡して、いきなり、草鞋の尖をポンと電信の横木を踏んで、横に立つて柱を眞すぐに踏むやうに、すら／＼と突尖へ駈上つた。

纏持の五十吉である。

不^ふ斷^{だん}、默^{だん}然^{まり}坊^{ぼう}で其^その癖^{くせ}氣^きの疾^{はや}いのが、事^{こと}と言^いふと眞^ま先^{さき}に身^か體^{らた}を張^はる。・・・其^その氣^き象^{しやう}も知^しつたり、仕^し事^{ごと}柄^{がら}こやの輕^{かる}いことも分^{わか}つては居^ゐたが、足^{あし}代^{しろ}ぢやなし、廂^{ひさし}でなし、恚^かう電^{でん}信^{しん}柱^{ちゆう}へ飛^と上^{あが}つた、はなれ業^{わざ}を視^みたのは最^は初^{じめ}だつたから、兄^{あに}哥^いたちも、や、やと思^{おも}はず聲^{こゑ}を掛^かけた。が、いづれも血^け氣^{つき}の大^{おほ}若^{わか}である。遣^やつて見^みると、負^まけない氣^きで、續^ついて二^ふ人^{たり}、いやアと掛^{かけ}聲^{こゑ}で上^あつたけれど、何^{なに}、あとの二^ふ人^{たり}は、實^{じつ}は背^せ中^かにつかまり、裾^{すそ}に縋^{すが}つて抱^だきついて居^ゐるばかり。

「焼^や芋^{いも}は何^どうした。」

「湯^ゆ氣^げは立^たつかい。」

「何^どうだ。」

と聲^{こゑ}々^々。焼^や芋^{いも}だの、湯^ゆ氣^げだのと、火^{くわ}事^じを蔑^{ない}にした

のでなし、何^{なん}のと言^いふ意^い氣^き組^{ぐみ}ださうである。

天^{てん}邊^{べん}の鷺^{わし}は勢^{いきほひ}が崩^{くづ}れた。而^{さう}して五^い位^き鷺^きのやうに成^なつた。

最^もう其^{それ}で分^{わか}る。火^{くわ}事^じは消^きえたのである。

一^{ばん}番^{ばん}低^{ひく}いのが、ひよいと地^ちへ飛^とんだ。續^ついて順^{じゆん}に

下りた。

五十吉は黙つて纏を受取つた。

で、恰も戦に負けたやうに、疎らに白んで、其の人数か、見附の方へ引き掛けたが、時に御存じの通り、錢湯の近間には、概ね御ぜん生蕎麥と言ふ、芬と堪らなく匂ふのが、控へて居る。

「なあ、おい。」

「然うよ。俺たちの町内ぢやあな。」

「働かずに蕎麥を食つては、煤拂だつて景氣が悪
いぜ。」

「他町で食つ行け。」

「御免よ。」

「入らつしやあい。」とお定りの小婢の、すき
切れのした眞鍮箔と言ふ金切聲。

「五十公は？」

纏持の兄哥一人、鯨が錨を擔いだ體に、頭巾を堅
く、すた／＼行かうとしたのであるから。「おや、
兄哥。」

五十吉は草鞋を軽く踏んで振返つて、

「のびちやあ不可^{いけ}え。縁^{えん}起^ぎものだ。俺^{おれ}は纏^{まと}を持^もつ
て居^ゐる。心持^{こころもち}を悪^{わる}くしなさんな。」

二

一時、煙とゝもに立騒いだ途上の人も静まつて、見附なる火の見櫓の、大きく地に映つた影も消えた。――西日はあるが、町の色は、暮淡くして白う成る。

舊の見附を見通しの、三河屋の横の大通りを眞直に、向うの細い裏町へ。通りかゝつた……はづれ尋常に、山茶花の薄いやうな、素足をちら／＼と吾妻下駄。片手に買ものゝ手つきの籠と、風呂敷を折つて持添へて、公設市場から歸りらしい。紺と藍の亂立縞、つい通りの襟の掛つた衣類に桔梗お納戸の無地の半襟。紺地に淺葱と藤紫、一粒鹿の子の段々染と、黒縹子を腹合せの晝夜帯を胸深くしゃんとして、大島ではあるまい、が、しなやかさは肩に添つた緋の羽織。

太輪に結つた銀杏返に、目に立つほどの簪もなく、背負上の艶なる包も慎ましい。が、細面のきりりとした、あか抜のした、五か六ぐらゐな中年増、色の白い、中脊なのが、往來の中に、一寸と水際が立つと言ふさへ、時、冬なれば身に沁みさうな、軽く運ぶ足どりも、何となく姿が沈んで、眉に、もの窶れ

の見えるのが、向うむきでスツと通る。

後の方、遙に、纏をかついだ刺子姿が、小さく火の
見下へ顯れたが、見る／＼、見附を抜け、通を切
ると、早く草鞋の音すた／＼と軽く、馬簾を沈めて、
唯手甲、頭巾、身一杯の唯濃い影も、底に火花の散
りさうな、たとへば南天の實を腕に刺青したかと思
勇の血の湧く．．．．五十吉である。其處へ来た。
同じ方向で、女の足は小利に急いでも、屈強な大
跨で、一呼吸に、摺違つて、ト肩が並んだ。

然うすると、並んだばかりで、――別に瞳を
注ぎもしないで、前途を視たまゝで、

「兄さん。」

と、先刻から道づれでもあつたらしく、然も心
易さうに澄して言った。「――」

纏持は、じろりと視たゞけ、頭巾を重く一歩行く。
婦人は其を不人相とも、何とも、聊かも氣にはしな
い容子で、同じく歩行ながら、

「火事は．．．．」

と軽く言つた。

尚ほ黙るのに、矢張り澄して、

「消えましたね。」

と言つた。

纏持は默然で、やゝ背を黒くずつと行く。

婦人は、はじめて、偶と寂しさうな顔をした。が、一寸散斑の櫛を壓へた。手先を其のまゝ、つと右の袂に入れて、筒袖に、しゃんと胸を張らうとしつゝ、其のまゝ袖口を折つて、胸を抱いて伏目に成つた。

爾時である。――最うやがて半町ばかりは踏開いて居た纏持がぐるりと此方へ向直ると、やゝ及腰のやうな形に成つて、すた／＼と引返した。

婦人の、其には、何の氣もなささうに前へ出ると、ハタと合つた。

「火事は消えました。」

纏持は突如言つた。

「然う、可い鹽梅だつたわね。」

と軽く云つて、莞爾するのを、頭巾の中に、含むまで息を籠めて、容態風采を熟と視た。

「御免なさい……御新姐さん……い

や、奥さんか。」

と、それでも、ぶつきら棒なものいひである。

婦人は黙つて又微笑む。

「いや、眞個に御免なさい。私あ思違ひをしたんだ。冷かされる……馬鹿にされるんだと思つてね。」

「まあ。」

と、餘りの思掛けなさに、更に言解かうとするらしく、氣を張つて、つい知らず一步出る。

と一步……退つた。が、纏の蛙股がずかりと婦人の美しい襟へ出るので、兄哥は退りながら、かついだのを繰びきに、ずかりと眞直に地に支いた。

馬簾の煽りに、おくれ毛がはら／＼と、纏を渡る風一陣。

「いえね、氣になすつちやあ弱りますが、思ひも
寄らねえ聲をお掛けなすつたもんだから。」

「然う、悪かつたの。」

「飛んでもねえ、悪いどころぢやありません
や。……と慥う言ふのが、ひよいと、はてな
と氣がついたからなんです。いま、何か言ひなすつ
た時は、へんと思つた。――それもね、立派
に消口を取つて、引揚げる處だと、己が身で威勢が
あるから、冷かされたとも、はぐらかされたとも思
はねえ理合だけれども、現場へ道の三分一も駈着け
ねえうちに、みそ萩で、お前さん、苧殻の送火を濕
すやうに、びしゃ／＼と消了つたんで、御新姐さ
ん。」

と最う一度風俗を見ながら、

「姉さんか――お前さん、御存じはねえだら
うけれども、絲の切れた奴胤と言ふ形で電信柱に引
揃つて、おもしろくもねえ、雲を見て引返す處でね。
組合の印ものを背負つてるだけに、半間さ加減が堪
りません。……寒い時分だし、用があつてお

歩行きなさる、分けても當節の婦の方にや、馬簾が
お邪連に成りさうだから、肩身を狭く通る處を、
「兄さん。」とお呼びなすつた。

此奴が消口を取つた時だと、「おう！」でも、
「やい！」でも構はねえ。……」

と其の、おう！ だの、やい！ だのが、聲の發
奮で耳立つて響いたので、兩側の家から人が出た。

魚屋も、炭屋も出た。……尤も通りがりの
連中は、端から取巻いてゐんで居るのである。

慌てたものは八百屋お七が年増に成つて辻に立つ
たと思つたらう。通魔がするやうに、ツツと舞戻つ
た纏は、横町に木戸を築いて、八夕と放火犯を堰留
めたやうに見えたから。

「親方さんや、もし魚屋の親方さんや。」

と、ものやかな細い聲して、魚定を呼ぶものは、
姓は關口、小兵衛と言ふ、伊勢の桑名から出た指物
屋で、傍ら、ちよぼりと店前へ古道具のがらくたを
並べて居る。……ぼとりと肥つた顔に薄痘痕

のある、眉の薄い、ちよんぼり口で、目のしよぼりとした、頭は霜さへ、ぼしや／＼と消えかゝる、七十近いお爺さん、――鞆の取れためりやすの襦衣の胸を、くなく／＼に開けた上へ、古ぼけた印半纏、小倉の帯をちよんと結んだ、妙な風態、半股引の瘦脛で、腰は曲らないが、婆さまじみた内端な足取、ちよこ／＼と軒へ出た。膝の其の半股引の木屑を拂きながら、鉋を片手に、其處で隣の魚定に言つたのである。

「なあ、貴方、口をきいてあげなされ、なあ、親方さん。」

「やあ、お爺さん。」
と頷を引込めて額で視た。此の魚屋が面白い、近眼の目金を掛けて居る。

金齒で笑つて、

「間違ひぢやあないやうですぜ。」

「おゝ、間違ひではないかいな。そんなら、鳶どのはお出入さきで、あの奥さんに挨拶をして居るかな。」

「然ればね。」

「途中で御祝儀でも出たかいな。」

「とも見えないがね、何かね、風采つきが何だか、

ありや何處かの奥さんかね、お爺さん。」

「はあ。」

と首筋を長く、撫肩で伸上つて、

「一寸、知つとります、委しうもないけどな。」

「消防夫は、親方、天王様横町の、ありや五十公

てんです。」

と、魚屋の小僧が小戻して御注進。

「突掛つてるんぢやねえだらう。」

「えゝ、そんな兄ぢやあねえんですよ。」

其の纏持は、さて、此方で――

「ねえ、お前さん、おう！　でも、やい――

でも、此方あ清く御挨拶をするんだけれど、劍尖が
劍尖だもんだから變に旋毛が曲つたんだ、お恥しい

が、ひがみだね。第一今時、此方人等こんな、やく

ぎに、同町内にしろ、顔馴染もねえ、お前さん方が、

口を利いておくんなさる例がねえ。からツきし見當

はつかねえし、然もお前さん、意氣地なく悄氣てる處だ。．．．それもね、「御苦勞よ。」とか何とか言ひなすつたんだと、チヨツ餘計なお世話だと思ふまでも、ふんなり、へいなり、遣放にも挨拶をして通るんですが、うぬが手で消さねえ火を、（火事は消えたね。）と言ひなすつたもんだから。

「あゝ、悪かつたわね、それが氣に障つたんですか。」

「處がね。」

「いゝえ、でも、兄さん方は、火がゝりをするんだもの。生命がけぢやありませんか。（御苦勞様。）なんか通越し了つてるんだもの。．．．坂を上つた俵屋さんぢやあなし、暢氣に（御苦勞様。）なんか言つてられやしないんだもの。」

「至極．．．」

と仰向いて、ト大な手甲で、拊つ如く膝を擦つた。

「難有え。ー 然うか、（御苦勞。） な

んか大木戸を通越してる、生命がけの仕事ですか。……お前さん、然う思つて居ておくんなさいますかね。」

「え、思つて居ますとも。」

「はじめた……涙が出るほど嬉しいや。」

馬簾も霽に、しつとりと、

「それでなくつてさへ、あつと氣がついて、お詫をしに引返したんだ。成程、焼死んだ亡者ぢやあるめえし、火事の消えねえうちに、煙の方へ尻を向けて、横町をのそ／＼歩行く纏持つてのがあるもんぢやあねえ。（消えましたね。）と聞きなすつたのは、當前だと氣が着いたもんですからね。――承りや、まだ其の上に、生命がけだと思つておくんなさるんだ。堪らねえ。……お顔は屹と忘れません。」

「可厭ねえ。」

「濟ねえけれど。」

「あれさ、堪忍して頂戴よ。」

「何だ。」

「どうしたい。」

と、蕎麥屋を出たのが見附から見通しの、こゝ夕靄を凌いで立つた纏のもとへ、ばら／＼と駈つけた。

「やあ、兄弟、皆揃つて、其の奥さんに一寸、御挨拶を申してくんねえ。――仔細はあとで言は

あ、恚う、」

きり／＼と纏を上げつゝ、

「媽を賣つても一升驕るぜ。」

四

「唯今。」

と、抜裏の露地から、腰障子を開けながら、聲を掛けて、其の、指物屋兼ねたり古道具屋の小兵衛さんの臺所へ入った湯歸りの若い女は、潰島田に横櫛をさして、ほつれ毛も濡々と、色つばい様子が堅氣でない。

「いゝお湯でしたわ。」

すぐに茶の間へ

臺所の掛棹へ手拭を剥いて来た、……此の女の柄にしては借りものらしい、蓋のとれたびしゃんこの石鹼箱を、長火鉢の横手の鼠入らずの上へコツトン。

「すいて居たのよ……思つたよりか。」

「うゝ。」

とばかりで、小兵衛さんの返事のはずまないことは、打ちまけたあとの糠袋のやうで、しかもびしょ／＼と話聲。

煎餅蒲團へ中腰で、いきなり取らうとした女持の煙管を其のまゝにして、密と立つて、誂へたやうに建附の悪い障子の透間から店を覗くと、小兵衛さんが肩も背も丸く成つて、抜衣紋で畏つたのと、袖を斜違に差向ひで、――悪く脇の下を擦つたら忽ち煙突に化けて煤を噴出しさうな、古物の備前徳利が一寸楯に成つて――姿が、何か投入の花かと思える、店前にトンと腰を掛けた婦人の、きりりとした細面を恚う透すと・・・

「あら、梢姉さん。」

と言ふのも――がし／＼軋んで、エ、焦つた、障子を開けるのも諸ともで、

「あら、姉さん。」

と、木屑だらけの古畳へ棲うつくしくひらりと出る。

「まあ。」

と、きれの好い眦を返して、其處に小兵衛の肩越しに、うつかりしたやうに立つた漬島田を優しく視た銀杏返は、相違なく、たつた今つい其處で、纏と

もに、消防夫の群に別れた細君であつた。

二人三人、まだ離れたまゝ、通行人が立つて覗く。……先刻からの人だからで、やゝ氣疲れがしたらしい。顔色も、肩の様子も、一息吻としたやうに、軽く胸に手を置いて、衣紋を壓へて居たのであつたが……。聲とゝもに莞爾して、

「……胸算さん、何うしたのよ。」

と、かけ構ひのない打明けた調子で言つて、ハツと心着いたやうに、瞬をした。

「御免なさいよ……。失禮ね。」

と、今度は徐に微笑んだのである。

「あら、姉さん。」

と、其の胸算と呼ばれたのは、たわいもなく膝を ついて、

「些とも失禮な事なんかありませんわ、こゝは私の内なんですもの。」

しかし、親許にしろ、身うちにしろ、いゝ人の宿

にしる、其の（内） ゆゑに、此方は 「失禮
ね。」 を言つたのである。

「……實は、此の梢が、以前下谷に出て居た時、
同じ何某家の分だとか、七三だとか、丸抱などおし
なべて五人居た朋輩たちに、客がつけたり、自分同
志が戯れたり、互に呼び呼ばれた渾名があつた。一
人は鯉、だが、齒ぎしりをすると言ふ入組んだ譯で
はない、簡単に瘦せたので。……一人がふつ
くりとして目の圓い、女優型の妓で、それが、おば
る。指環の珠に擬へた。一人、褌も帯も、起居に
する／＼と引摺つて、だらしはないが、罪のない、言
ふことも、することも、些とも現代に通じないから、
江戸を遙に溯つて、即ち元禄。更にお雛妓で、めり
けんの狸と言ふのが居た。

中の一人で、曰く胸算用の胸算が、此の小兵衛さ
んの娘か、姪か、其である。

狸も、めりけんと意を言外に含ませて置けば仔細
ない。おぼる、元禄、無論、結構、二と雖も、先づ

もつて差支へぬ。が、ひとり胸算に到つては、こんな場所、一層、其の（内）に於ては、分けて憚るべきを、馴れた口癖でうっかり饒舌つて、所謂梢姉さんは口よりも頬をすぼめて、てれたのであつた。

が、唯人のいゝ小兵衛さんは、二人が別懇な其の容子に、割膝を、ぺた／＼と叩くと、口を大きく開けて、目を細くして、

「は、は。」と驚いたやうな、嬉しいやうな、どツち道、間の抜けた顔色で、

「ま、ま、彼方へ——奥へな、・・・・・・・・・・はて、これはしたり・・・・・・・・・・」

「お世話に成つたの、御鼻肩だのツて、まあ、極
りが悪いぢやありませんか。」

火鉢の前の差向ひから、梢は一寸肩をくねつて、
店の小兵衛を差覗いて、

「小父さん……」

「は、は。」

と仕事場から、又鼻の下を伸して私笑とする。

「お光さんの眞個の叔父さんでおいでなさいませ
さうですねえ。」

「は、は、や最うほんの間に合せのな、ほゝゝ、
血筋にや違ひないのぢやけどな、叔父がひのない處
は續飯とまでは参きまへんて。麩のりで木に竹をつ
いだやうな、まに合せものでな。は、此の夏まで達
者で居りました叔母分の婆々の方がな、私よりは太
と増で、其の娘の相談相手にも成りましたがな。叔
父は叔父でも、此の親身の方は、一向に役に立たず
でござりますよ。」

「でも、どんなにかねえ、恚うやつて逢ひにおいで、光ちゃんも叔父さん、嘸ぞ、嬉しいでせうね。」

「や、も、嬉しいと言うては、はい、意見も叱言も言はれまへんが、男にも女にも、私にや子と云ふてはござりませずな、偶に其の娘の顔を見るのが何より楽しみでござりますよ。ではござりますがな、時々、早や、意見と叱言のたねを蒔くには困ります。情愛もございますが、次手にな、浮氣も少々ございまして……」

叔父さんは、さては胸算の揮名を御存じない。浮氣と見えても、よく身の上を考へて居るのである。今は赤坂で三津代と言ふよし、お光は、一寸前髪で俯向いて、其の化粧した咽喉許を、小さな呼吸でフツと吹いた、呼吸を其のまゝ、スウと吸ひながら、顔を上げて莞爾した。何の禁厭だか些とも分らぬ。

「や、これ。」

と小兵衛さんは、小さな鐵槌を持った手を肩と一所に伸上つて、

「・・・意見、叱言と言ふ口の下から、これ、其の障子を閉めぬかいな。その、吹通しで、あなた――奥さんがお寒がる、おぬしの髪容をも見たが可い。頭の黒いものが覗くぞよ。」

と町の向側を下目で睨んで、鐵槌を又コツ／＼コツ、恰も可し、鼠入らずの手入をして居る。

「もう直きにの、使に行つた嘉助も歸る。」

と、弟子小僧の名を言つた。が、目ませで御馳走を呑込ませて、

「御緩りとお願ひ申して、丁ど幸ひ、おぬしも、とつくり御相談を願ふが可いぞい。」

「あゝ、眞個よ、姉さん、何うぞ。――叔父さん御免なさい。」

とつい立つて、障子を占めようとする處を・・・

「あゝ、一寸・・・私もね、少し小父さんに御相談したいことがあるんですがね。」

「あの叔父さん、姉さんが。」と、眞中に居て

氣早に取次ぐ。

其のお光の聾を、膝頭で挟むやうに、脚に毛のな
い小兵衛さん、柔に早や中腰に立掛けて、

「何か事前に御相談と・・・は、それは/
、」

「まあ、ですが、お仕事のお邪魔ぢやありませんか。」

「いえ、や最う、何のあなた・・・こんな家でも、我が家であつて見ますれば、お取持をいたしますのに、ふやけた煎餅の一枚でも、姪どもよりは、手前の方が在處を存じて居りますので、・・・・疾からお相手と存じましたなれど、老人は御迷惑、と其ゆゑにな、もし、は、は、は、御遠慮を申したでござりますよ。」

といひ、\、梢がさし置いた買もの、手提籠を、
恭しく両手で提げて、

「御免やす。」

と、更つて、つるりと其處へ膝小僧。お光が蒲團

を撥ねて迂つて譲らうとする火鉢の前を、招くやうな手で壓へて、

「も、も、頓と最う。……動かずと其のまゝにな。」

「可厭ですわ……。叔父さん。」

と梢が引手繰るやうに取つた、淺間で、居ながら手は届く……。臺所へ搔遣るには仔細ない。

トしなやかな手で邪険に押遣られながら、手提は摺つて、ごそ／＼と牛蒡と人參の尾をちらりと出す。

襟を扱いて、肩を見て、

「光ちゃん、此方も尻尾を見せたのね。」

「お佛事でござりますかな。」

と小兵衛は、梢の奥さんが、尾を見せたと言ふ人
 參牛莠を、後光の方へ引取つた。が、其處へお光が
 汲んで出した。――婆さんがお迎をうけて以來は
 ー茶漉の取れた事のない燻つた己が湯呑を兩
 手で頂いて、チヨ／＼と嘗めるやうに喫り／＼。

「なあ、お光坊。」と言ふ調子が、お佛事に續
 いたから同宿の坊さんと呼ぶやうで、阿嬌は二人あ
 りながら、古道具店の茶の間は貧乏寺の納所めく。

「御意を見習はつしやるやうにな、毎度私が、
 それ、ぬしに話すわいの。……私にお佛壇を
 誂へて、一具新しう指させて下された奥さんと言ふ
 は、此のお方ぢや。……聞けば、ぬしが世話
 に成つたお姉さんぢや。」

「眞個に、姉さん、いゝ仕事をさして下すつて、
 叔父さんも喜んぢやあ話をしますわ。」

梢は一寸俯いて、

「極が悪くつてよ、光ちゃん、そんな事を言つては。私、眞個は此方様には却つて御迷惑を掛けたんですよ。だつて、お寶の方を先へ切詰めて置いて、其の中で無理に見積をして頂いたんですもの。」

「さ、さ、其の見つもりぢやて。」
とお光の方へ膝を進める。仕事着の印半纏が、尻切の襦袢一枚着たやうで、効性なく寒さうで、

「そりやな、もし、金錢に絲目を着けねば格別、つい通りの寸法で、出来のものでは、下の壇が皆狭くて、思ふやうにお供もの、な。御馳走が進ぜられぬ。早い話が、蕎麥なら蕎麥ぢやて、したぢは別にした處で、蒸籠ごと、ぽんと開戸の中へ供へたい。とお言ひなさるのぢやがな、近い處が、此の盆、七回忌に御相當ぢやつたげな、奥さんがお見送りなさつたお年より、旦那様のお祖母さんが、其の蕎麥が大おすぢやつたとの。」

「本郷のね、叔父さん、彌生町に在らした頃、私も知つて居るお祖母さんよ。」

とお光が言ふと、

「然うか、然うか。おゝ、然うか。」と小兵衛さんにしては奇遇を感じて、奮發むのだけれど、湯呑を、両手で古疊へ置くのだから張合は一向ない。

「お宗旨は日蓮様ぢや。……先づ上壇眞中へお曼陀羅、左右へ七面大明神、北辰妙見宮ぢやな、中壇正面の處へお祖師様、此傍へ鶴の蠟燭立、お燈明臺、お鈴などが乗る。一方へ過去帳、お位牌が二つぢや。奥さんのお志で、旦那様の御兩親御夫婦の戒名が對で一面。お祖父様、お祖母様の戒名が對で一面。――最う一基お拵へなされた其がの、聞かつしやい、――いえ、可うござります。」

「ま。」

と留めようとした梢の袖を、押戻すやうに胸を屈めて、

「姪に聞かせたうござりますでなあ、――聞かつしやい。お光坊……さて其の最う一基の

お位牌は、奥さんの御兩親　ー　さ、お二人と
も御兩親がないのぢやな、お最惜い。　ー
と膝小僧に密と手を置き、

「な、其の奥さんの御兩親の分ぢやがの　ー

お佛壇が出来上つて私がお邸へ持つて出て、お誂の
押入、上の壇へ、首尾よくきちんと先づ嵌ると、

（佛様をお納めするから見て頂戴。おそばを驕りま
す）　とおつしやつてな　ー　朝早かつ

た　ー　旦那様はお留守ぢやつたが　ー　
婦同志は目を見合つた。　ー

「お佛器のお磨も、最うちやんと出来て居てな、
掛軸、御影像、（南無妙）　お祖師　様　（南無

妙）　それ、順に納つた　ー　お位牌が二基
並んだぢや。もう一基、些と其のそれよりは丈も幅

も小形なのをその傍へ置かうとして、彼方此方据直
しては、恚う、手も離さずに見てゝあつた、　ー　

・　奥さんがな、お狭くなるといけません、私ども
のは此方へ。　ー　と袖に取つて、恚うな、其處等を

見ておいでぢやつたがな。小箆笥の上の、鏡臺の一
番深い抽斗へ、スツトこれがおかくれぢや、あ、あ

と思つた。私になあ……」

と小兵衛さん、ぶる／＼と火鉢の板につかまつて、
「奥様がな、（良人には黙つて居て下さいよ。）
と、うつかりらしくお言ひなされたわ。」

「まあ、ほゝゝ。」

と若々しく、梢は、いま言つたやうに笑つたが、
其の肩を細りと、

「叔父さん。そんな事を言ひましたかね、……
・・叔父さんは、主人とは全ツ切。……あゝ、
然う棚の寸法を取りに来て、下すつた時、一度お逢
ひでしたかね。それだつて、其切なんですも
の……馬鹿だわねえ。」

「さ、さ、さ、其のな、お知己でも何でもない御
主人に、此ばかりは一度、申して進ぜたうござりま
すよ。な、お光坊。此をよう聞かつしやい、奥さん
のお志と言ふのは此處ぢや。」

「まあ、大層ですわねえ、いゝ志、お茶番

よ。．．．．酒落なんですもの。．．．．何も、
お蕎麥だつてさ、取分けて供へれば、下が狭くつて
も可いんですから、お位牌を置く處が廣く取れて、
私の親たちも緩りお邪魔が出来るんです。――
お雛様遊びのまゝ事氣が抜けないんですからね。些
とも讚めて頂く事はありやしません。でも感心に、
些とでも取柄と言へば、お祖母さんが欲い／＼と言
つておいでなすつたお佛壇が、お庇様で、あんな値
で出来た事なんですわ。主人の恥を言ふやうですが、
最うね、あなた方の前ぢやあ虚飾も外聞も要りやあ
しない。．．．．金燦爛の塗つたのなんざ手に負
へないんですものね。光ちゃん、つい此の間までね。
お佛壇はあの葛籠のまゝだつたのよ、――引越
の時お前さんがおんぶしてくれたわね。あゝ眞個
に。――

とおもひ當つた顔つきで、

「お佛壇は、餘程此方に御縁があるのね、不思議
のやうです事。」

と言つた。

槇禮之助

――

梢はいま其の細君である

――

が、學校を出て、學士になりたての頃、幾干か内職の収入が殖えた處から、根津の三間ばかりの長屋から、町の名は彌生町と變つても、つい二三町上野寄、一間ながら二階のある家へ引越した四五年ばかり前の事を言ふのである。――抱ぬしも内々大目に見て居た。梢の槇が、にいさんがソレ引越したと、妹分の朋輩が池の端から間道を繰出して、面白半分のお手傳。――近いから、鐵瓶は沸したまゝ、お釜は炊いたまゝで、おいらん端折が持運ぶ。……おぼるが其の指環の手に、目ざまし時計を据ゑながら、掛ものを小脇に抱いたつけ、其の掛ものゝ小尻を取つて、ニがあたり鉢をト編笠で、花ふりかゝる彌生町。――然うかと思ふと、たわいのない評判の元禄が、手柄を見せた……。深川育が信州松本へ仕込みに賣られて、川べりの廓で、霜の山、霧の山、また青い山。山ばかり、山下に毎朝々々しら／＼明に、幾本も幾本も、灰ふきを、磧の石でごし／＼と洗はせられて、遠い、高い、高い、寒い、寒い、心細い其の山を見て泣いたと云ふ、臥薪嘗膽の經歷があるだけ、雪の小腕まくりに、

炭俵を引立て、一寸々々、炭屋さん、此の四貫俵は量が切れて居るぢやあないの……私たちだと思つて馬鹿におしでない。ーーおわびに焚附をまけといで。あゝ、怒鳴つたら息が苦しい、一口頂戴、茶碗でさ、と呷切る。

此の中に、箒を廻して、采配を振つた、姉さんかぶりの梢と言ふは、世話場の立女形の如き尋常なものではない、一文青扈三娘の概があつた。

渠等、労働黨の活躍は、少なからず資本ぬしを怯かして、かゝへ抱から懐柔策の幕のうちが届く。めりけんの狸が、ちよこゝ走りに、豆腐を買ひに行くと頃、掃除が済んだ夕間暮、舊宅から祖母さんの手を曳いて、佛たちの包を片手に、静に出直す梢に添つて、佛具雑器を其のまゝに、千手勸音をがんでおくれと、古葛籠を背負つて、莞爾しながら、手を曳かれて居るからいゝ事に、老人の杖を取つて、故とついで、片側崖の根笹の風、森の灯ちら／＼と、新宅へ路を辿つたのが、胸算用の此の三津代。

七

「其のね、伯父さん、お祖母さんと言へばね。」
と三津代のお光・・・胸算が、湯上りのぽつ
とした目を仰向き氣味に細うしたのは、其の頃の事
を眼前、花も上野に霞むやうに見えた。

「下谷の私たちの家へ入らした事さへあります
わ。」

「ほゝう、お佛壇からお出掛けに成つてぢやの。」
とぼやりとしながら、眞面目に言ふ。

「・・・あら、可厭だ。」 ト引込まれたあ
とを、忽ちお光は吃驚した顔色で、
「お佛壇からお出掛けぢやあ、一寸幽霊ぢやあゝ
りませんか。まあ・・・」

「おゝ、ほんにの、ほゝゝ。」 と女のやうに、
沈んで笑つた。

「ほんにの、ほゝゝぢやあない事よ。――ね
え、姉さん。」

「でもね、光ちゃん。」

と梢こすゑ　「ー　實じつの名お柳りゅう　「ー　は、落着おちついて、

火鉢ひばちに拂はたいた吸殻すびがらに軽かるく火皿ひざらで灰はひを掛かけた　「ー
粗末そまつなる眞鍮張しんちゆうばりの煙管きせるである。」

「私わたしは、幽霊いっれいでも構かまはない、お祖母おばあさんが達たつしやで居あて下くだすつたらと、沁々しみ／＼・・・然さう思おもふんですよ。」

「まあ、姉ねえさん、達たつしやな幽霊いっれいと言いふのが、何處どこにあつて？・・・」

「いやの、でない事ことはあるまいがの。」

「可厭いやよ、伯父おぢさん、　「ー　氣味きみが悪わるいわ。」

「ほゝ、幽霊いっれいがお達たつしやなればこそ、お蕎麥そばも蒸せい籠ろうでお供物くもつぢや・・・早い話はやなしがの。　「ー　ひ

よ／＼煩わづうてござつたでは、お料具れうぐも重湯おもゆがお粥かゆにして進しんぜいでは成なるまいが、・・・ほゝ、いや笑事わらひごとではないがの。・・・此この奥おくさんの御隠居ごいんきよ様さまは、私わしが近頃ちかごろでの御別懇ごべつこんな、お知己ちかづきぢや、なれどの、其そのゝ、お知己ちかづきに成なりたてが、すんでに最もう佛ほとけ

様ぢやるがの。お知己が佛様と、よつてに、
お出掛けと言へば一寸それ、お佛壇からの、う
つかりぢやが、眞個に眞面目に思うたての。」

「然うね、然う言へば屹と、あの世でもお達しや
でせうよ。姉さんが那様に思つておあげ
なさるんですもの。いえね、此は姉さん
が最う禎さんの奥さんにお成んなすつてからですけ
れど、――お祖母さんが、どツとおわるかつた
時でした。先の主人の家（松巳家と言ふ）

へ、――御信心の歸りが何かにお寄んな
すつて、「八十幾ツてお年寄は、内ばかりぢやあゝ
りません、世の中のお寶ものです。眞綿
に包んでも、ソツと何時までも、達しやにして藏つ
て置きたい。……と然うお言ひなすつたも
んですからね、「とに角あの妓には、大姑だ。

（まあ、御壽命でせうよ、）と言はないまでも、
（お年にだけは不足はないわ、）と言ひさうな
處を、言ふかと思へば、何時までも藏つて置きたい。
あの妓が優しいあの心で、朝に晩に心一杯、おもり
の出来たのが一年ばかり、恚うと知つたらもつと早

く、借金も證書も打棄つて、縁付けて遣つたものを。ツて、松巳家の女主人さんが、私たちに、然う言ひながら、泣きましたわ。」

「澤山よ・・・光ちゃん。」

と、梢は靜に面を背ける。

「道理ぢやの・・・あゝ、道理ぢや。」

「ですがね、――其のお祖母さんの在らした時は面白かつてよ――あんな藝妓家でせう。

伯父さん、まさか楨さんのお祖母さんがと思ふ方が、ひよっこりおいでなすつたんですから、一寸驚きも

しましたけれども、――八十お幾の地廻り、俗を離れて粹だわね。・・・一寸、晩の九時近く

だつたでせうよ。「御免なさい／＼」ツて、女の聲がしますから、はいツて、女中が障子を開けた

わ。私は支度を出ようとして居た處でした。すぐに見えたわ。土間の處に――楨さん許の圓髻

に結つた年増の女中が、顔をてか／＼さして、ぶら提灯と石鹸づゝみの手拭を持ったのに、手を曳かれ

て、小さなお祖母さんが杖をついて莞爾々々して在

らつしやるぢやあゝりませんか。

此方こつちが地廻ぢまはりをしてお顔かほ馴染なじみ。　　ー　　ー　　あら、お祖は母あさん、と私わたしあ取りとかけた褌つまを押放おっほりだ出して、不ふ思し議ぎなお客きやくにまごついて居ゐた、この内うちの女中はこやを引ひっかきのけて駈かけだ出したわ。」

「おゝ、嘉助か。――待つてや。」
 臺所の戸のがたくる音に、抜衣紋の手を怯えたやうに、ぬいと上げた小兵衛さん。

「一寸、其の足で頼まれてくれいな。」と一度立膝をしてからだが、其でも忙しさうに、梢の背後を勝手へ立つ。

「嘉助だつて、ほゝゝ。」

とお光は小さな聲して、

「下戸が酔つぱらひさうだわね。――あゝ、

次手に一銚子……」

と火鉢に掛けたくの字の肱を、迂らし状に續いて出る。

「光ちゃん、構つておくんなすつちや……私……」

と追掛けに向けた瞳を――聞きつけないで流許のひそ／＼聲、嘉助の「へい／＼。」と言ふ

のばかり聞えるから　ー　其の瞳を手尖へ返すと、
詰めようとした煙草が見當を外れて、火皿の横に指
先の震へる我が手を見つゝ、其の眞鍮の煙管の、細
い雁首を熟と視て、何故か、ほろりとした。

「何うも／＼、．．．．．へい。」

と小僧の甲走つた勇んだ聲は、お光に心着をされ
たさうで。．．．．．其のまゝ、すた／＼と溝板を
又出て行く音。其れが、古箏の裏の壁に響く。

「異だわよ．．．．．姉さん、此處の露地はね、
下谷の家の裏木戸の、彼處の許にそつくりよ．．．
．．．嬉しいぢやあないの。．．．．．いま見たら板
塀に木戸もありますわ．．．．．尤もお隣のですけ
れどもね、　ー　手が届きさうよ。狭いんですか
ら。」

と爛をつける下心で、鐵瓶の火を發けながら、

「時間過ぎにやあ、槓さんが、よく、彼處をお敲
きなすつたわね、トン／＼なんて。」

と敲く眞似して、一人で嬉しがつて、お光は其の

癖、くせ 聲を潜めて、こゑ ひそ

「藍微塵あゐみぢんに頼冠ほゝかぶりと言いふのでないから、もの足りないなんのつて、私わたしたち仕出しだしの連中れんぢゅうは、勝手かってな事ことを言いひましたつけ。」

其處そこへ五燭しよくがポツと點つく。

「あゝ、おいでなされた、南無妙なむめう。」
と、電燈でんとうにお題目だいもくを稱となへながら、小兵衛こへゑは臺所だいどころでかたこと引出ひきだした能代塗のしろぬりの膳ぜんの、足あしのぐらつく奴やつを片手かたてで取とつて、立膝たてひざで張肱はりひぢの身構みがまへで、ト電燈でんとうに透すかして撓ためた處ところは、間まを見てお手てのものゝ竹釘たけくぎを、こゝらへ一本ほんの氣組きぐみが見みえる。

「お止よしなさいよ、光ちゃん ー ー 極きまりが悪わるいぢやありませんか。」

「否いへ ー ー でもね、そんな意氣いきなんでなかつたればこそ ー ー まあ、失禮しつれい。」

「澤山たくさんよ。」
「だからこそ姉ねえさんは、立派りっぱな奥おくさんにお成なんなすつたんですわ。…… 蔭かげぢやあ松巳家まつみやの女主人ねえさ

人も然う言つて居た事よ．．．．裏木戸へ忍ぶのは、以來、緋の羽織に紺足袋に限るツて。」

「其のかはり、何かと間違へられた事はなくツて？」

「あ、然う／＼。あの奥で車座の時のトン／＼には、肝玉がでんぐりかへりをしましたつね。ばた／＼すた／＼と言ふ騒動が酷いものだから、生欠伸をして居ためりけんの狸ちゃんか、キヤツてツて、金切聲を上げるんだもの。」

「ほ／＼、花骨牌かの．．．．ある奴ぢやわ。」

と小兵衛さん、今度は店から聲を掛ける。

「まあ、伯父さん、お察しの可いこと、．．．．濟みません。」

と梢がてれた顔をする。

「此でも職人でござりますわ．．．．若い時は附合で。」

と言ふ．．．．片づけものに、鋸屑を掴み寄せる其の形が、然も山寺の坊さんの落葉掻くなる風で

ある。

九

「伯父さんはね、……姉さん、いまでも私
を對手にして、五厘骨牌を遣りかねないのよ。尤も
嘉助には内證ですけれど。」

「御壯んですね。」
と莞爾して梢が言つた。

「これ／＼、貴女の前で何を言ふぞいの、

ほ／＼。」

「そして、あの晩でしたわね、——鍋焼餛飩
は。——考へると、よく懲りないで今でも食べ

ると思つてよ。」

今夜の御馳走も、あらかた此で分つたのである。

「お互様ね。」

「何うしたぞいの。」

と小兵衛は来て、又一座。

「騷動——大變な騷動だつたのよ。……
押入へかくれる妓もあれば、一雪類に店の方へ遁出
したものですからね、階子段の下に寝て居たお姥や
ん。……」

「お針かの。」

「否、松巳家の姉さんの母親ですがね。寝惚けた
でせう……。大地震だと思つたでせう。――
年よりを見棄てるかいの、少いもの……。助
けてくれツて騒ぎなの。――それでも、一人だ
け、次の室の襖際に耳を澄して居て、僕だよ、僕だ
よ、とお言ひなさる聲を聞いて、竊と木戸を開けて、
板塀の小さな庭から、槇さん、――今の旦那様
を、お連込みなすつたのはね、伯父さん、――
姉さん、奥さんなのよ。――備つたものだわね。」

「光ちゃん、澤山ですつてばさ。」
「構ふものですか、内端ですもの。」
「内端か、内端か、お邸の奥様をの、勿體ない。」
「まあ、飛んでもない。」

「なら樂屋だわ、こゝん處。――それから皆
で、場錢で槇さんを御馳走しようツて事に成つて、
いつもの的矢、――其の时分には露地へ入ツて、
ばた／＼音をさして居ますからね、丁度二月でした、
如月の……。――」

と、折をりから夜よるの分ぶんへかはりがけの、近所きんじよの稽古けいこ三味線みせんにうつかり釣つり込まれた顔かほだっけ。

「ちら／＼火ひの粉こを紅梅こうばいでせう、其その黒塀くろべいの木戸きどの口ぐちから、鍋焼なべやきを擔かつぎ込んで、皆みんなもお相伴しやうばんで、する／＼ほッほッと、鳩はとならいゝけれど、食氣くひけに掛かけては、木兎みづくが鳴なくやうなもの。――ねえ元禄げんろくツたら、
「うむ、今夜こんやのは氣前きまへを見みせた、的矢あたりや、嬉うれしいよ、分ぶんが厚あつい。」なんか言いつて、蒲鉾かまぼこを挟はさんでさ、御ご近所きんじよの三橋みはしの下したから、將軍しやうぐんさま様へ御直訴ごぢきそのやうな形かたちをして冴さえて居ゐましたっけね。わッと言いつて反そつたぢやあゝりませんか。それでもお箸はしを持もつて居ゐるうちが可よかつた……入齒いればがコツンと出でたんですよ……餛飩うどんの中なかから。」

「ほい。」

と、小兵衛こへゑは思おもはず口くちに蓋ふたをする。

其その、小兵衛こへゑさんの、ぱくついた口許くちもとを見みて、お光みつは脇腹わきばらを肘ひぢで壓おさへて、俯向うつむいて、くツ／＼と背筋せすぢを蹴しぎる。

「これさ／＼、お光坊。これ。」

「光ちゃん。」

「これはしたり。」

「伯父さんが呆れて在らつしやるぢやないの。」

「これはしたり。いえ、相當に苦勞もしますなれど、此の氣ぢやで、しやうばいも勤りますわ。はて、それぢやとて、これはしたり。」

「光ちゃんや。」

「あゝ、私、姉さん……だつて……」

あの時の餛飩の中の入齒は、もしか、此の伯父さんが落つこととして置いたんぢやあないかと思つたもんだから……」

「これはしたり。」

小兵衛は口を撫で、苦笑。

「いゝ加減になさいよ。光ちゃん。」

「でも笑事ぢやあないわ。」

「誰が笑ふんですよ。」

「眞個ね、御免なさい。――あれが元禄なれ

ばこそですわ。一寸金齒なら、屑屋にやつて、翌朝、

惣菜屋の薩摩揚を買ふものをさ、可厭な、味噌齒だ

ツて、挟んでるんですもの。」

と自分で言つて、言漉つてお光は、ぐツ／＼。

「あゝ、光ちゃん、眞平。」

「恐れる事を言ふわいの。」

と小兵衛さんは、又苦笑。

「何うでせう、をんなじ汁を吸つたんですもの、
 てん／＼に胸を敲いて、――最う恚う成ると、
 入歯がと言ふのさへ突吐すやうですものね――
 餛飩屋に談判をする元氣もなしに、皆がぐう／＼苦
 しがるのを御覽なすつて、槓兄さんが、あゝ、僕に
 働きがあると、こんな時、眞珠か、おぼるでも出よ
 うのに、皆に面目ない、と言つて、さみしさうにお
 悄氣なすつた。」

「眞個だわね。」

「餘寒厳しき折から、」

と、胸算らしい獨稽古を持出して、

「一人でお歸し申されるもんですか。……」

(あとで御主人から槍が出たら、申譯に私が自害)

「――自害が可いぢやあないの、切腹と言はない
 うちが、――元禄なんか其の意氣込ですもの。」

「――それなり姉さんを、一所に裏口から……
 ・・夜中の朧月でしたわねえ。」

「ほう、するとお茶屋へでなうて、すぐにお宅へぢやの。」

「勿論。」

「後生よ。光ちゃん。」

「何しろ、御隠居さんが、開けておいでなされたで何よりぢや。」

「右の地廻りの一件ですわね。」と串戯らしく、しんみりして、

「自分で言つては可笑いんですけど、姉の手前もあり、しばらく行つて見なかつたもんですから、お祖母さんが逢ひたがつて来て下すつたんですよ。生憎お座敷へ行つて居ましたつけ。．．．ねえ、あとで、お目に掛つた時、．．．お姉さん。」「勿體ないわね。」「お姉さん、顔が見たうて行つたがの、極りが悪かつたぞ。」

ツて、背中を敲いて莞爾々々なすつた。．．．私
は涙が出ましたわ。」

と、梢は今もせぐり来てさしくむ涙を、話とゝもに煙草でそらして、

「誰？ おばるさんでしたっけか、ね。」「あ

の時、お祖母さんに目八分でお茶を持って出たつて
言ふのは。」

「あら、おぼるやニ姉さんが遣つたんだと故とら
しいぢやあゝりませんか。――丁度お茶をひい
て、ぬき絲を繫いで居たんですがね、元禄よ。」

いや、其の臥薪嘗膽の姉さんは、――おぼる
と言ふのが、様子もの越、すべてハイカラをやるの
に負けない氣で上野が近いだけ、裸體美などゝ聞覺
えて、湯へ入ると、風呂棺へ蓋をした上へ、眞白な
二股大根。むし上る湯氣に、ぐたりと羽目へ寄かゝ
つて、長唄の勸進帳を復習ひながら、めりけんさん、
お冷水を一杯……すぐかけの露ぢやあ不可い、
大鍾でおかはり附大急ぎ。――あゝ氣が遠く成
る、と言つた女が、殊勝に梢の心映を眞似て、いま
に、お祖母さんの數珠袋にせうとて、ぬき絲しつけ
絲を繼合せるのゝ、手傳をして居た處、――尤
も世帯のはじめには、漬ものが第一と、梢が其の細
い指を糠味噌に思ひ切つてから、芥子漬には麴が入
るの、土用越は八升鹽……當今の秤目では何
うか知ら。……胡瓜は山が味がいゝなどゝ、

閑却かんきやくされたぬけものゝお姥おばやんが、若い妓この中なかへ返かへり咲さきの参謀さんぼうで、藝妓屋げいしやに取とつては、あゝ、是ぜか、非ひか。――皆みんなが蜜豆屋みつまめやより八百屋ほやの荷にを覗のぞいたといふ時じ分ぶんであつたが。――

「すぐに私わたしが手てを曳ひいて、お心易こころやすだてに座敷ざしきを杖つゑをつく眞似まねをしながら、それでも、あれですわ。槇まきさんの許とこへ行いつてはお祖母おばあさんノ、と言いふのだけれど、内うちぢやあ勿體もつたいをつけようと思おもつて、「槇先生まきせんせいの御隠居ごいんきよさま」と、女主人ねえさんに然さう言いつたものだから、「一寸ちよつとお茶ちやを入いれかへてよ、」と女主人ねえさんは丁寧ていねいに挨拶あいさつをして、自分じぶんが居ゐては氣詰きじまりだと立たちながら、「これ失禮しつれいのないやうに。」――然さう言いつたもんですからね、其處そこで元禄げんろくが目八分めぶなんでしたの……」

「誰だれでしたつけね、――あの晩ばん、お祖母ばあさんの前まへへ、紙かみに載のせたお茶菓子ちやくわしを、目め八分ぶに持もつて出でた人ひとは？」

「知しれてますわ。」

とお光みつが軽かるく受うけて、

「元禄げんろくよ、そんな事ことをするのは――でもね、

からかつたんぢやあないんですよ。あの時ときは――

奥おくへ引ひ込んだ主婦ねえさんが右みぎの御隠居ごいんきよさま様いと言いふので、

謹つしんで粗末そまつのないやうに、と然さう言いつたもんですか

らね、……あの妓こが生真まじ面目めなだけに尚なは可をか

笑しかつたんですわ。――到來たうらいものゝカステ

ラ……一寸ちよつと……叔父をぢさん、まだ。」

と目配めくばせで、御馳走ごちそうの催さい促そくして、

「あら、嘉助かすけがまだ第一だい歸かへつて來きませんわね。」

「おゝ、小僧あれの……恚かう云いふ時ときぢや、次ついで手にむかうでお相伴しやうばんをさせての、直すぐに買かひもの先さきへ

預けて置いた、がらくたを引取りに廻らせたがの。」
「あの、小父さん。」
と、梢が言った。其時、吸ひつけようとしたのを留めて、火鉢の縁に、俯向に置いた眞鍮の煙管の佗しいのは、其の言よりも目に着いた。

「おなじく、がらくた。．．．．」
一寸寂しく笑ひながら、
「．．．．と言ふほどのものでもないんですけれども、あの、いまお祖母さんが、其のカステラでお茶をあがつて、御機嫌のいゝ處を、私、頼みにして、少しお願ひがあるんですよ。」

「何なの、姉さん。」
とお光が先繰りに氣を入れる。

「光ちゃんには極りが悪いけれど、．．．．小父さん、一昨日のあの煙管ですがね、」
と皆まで聞かずに、

「ほい。」
と小兵衛が、發奮のない、しなびた冬瓜のやうな

と、
膝ひざをたくと、
梢こすゑの顔かほとをダブリウと云いふ形かたちに熟ぢつと視みた
お光みつは我わが煙管きせるの吸口すひくちと、
其その眞鍮しんちゆうの

其の一昨日の午後である。――小兵衛が仕上ものを届けて、工賃は請取つたのに、飲む張合のない人だから、懷中も半纏も、あるべかりにくしや／＼とした態で、小春の日當に帽子も被らず、曲尺と鐵槌と薄汚れた手拭を一所に握つて、のこ／＼と歸りがけに、谷町邊の崖裏に成る・・・近道を抜けて來ると、こぼれかゝつた邸の堀と、一方草の生えた崖を、兩方が背にして向ひ合つて、其の裏道に立つた、婀娜な女と、踞んだ屑屋、で不思議な取合せで居るのが見えた。

「はてな。」

丁ど前後に人脚がない、此が故郷桑名の田舎道だと、串戲にも眉毛に唾をつける處と、頬邊を膨らまし、頸をすくめて日に透しながら近づくと、

「やあ、桑小さん。」

と唐突に、其處に居た屑屋が、押挫げた羊羹色の古帽子を傾けて聲を掛けた。と同時に、ぼはり／＼

と二つばかり、尾花の散るやうだつたのは、屑屋が吹かした蝙蝠の煙の化けたので。

小兵衛はぎよつとしながら立留つた。

が、屋號は紛れもない桑名屋の小兵衛だけれど、一端「(桑小)」さんと家持の町人らしく箔を付けて呼んでくれるものは外にない。

唯一人、しがない取引で顔馴染の、此の邊からはずつと遠い、麻布十番から来る屑屋で、安原善吉と言ふ親仁ばかり。外にない。……それでない
と狐だが。

小兵衛は、しよぼつかせた目で撓めて、

「おゝ、此は高善さんかい。」

と言つた。――「桑小々々」と言つてくれる。

處で、此方からも問屋なみに、安善さんと言ふ筈を

屑屋で(安)は聞えがよくねえ、高買をするや

うに、(高善)と遣つてくれと、豫て親仁の註

文で――笑はせる。――が、其處で以て高善

さん……

「いや、桑くはこさん、今日けふばかりは安善やすぜんだ。大安だいやすの
コンノ、チキ……」

と帽子ぼうしの下したへ又またツと出だした。やがて小狐こぎつねの耳みみほど
ある太ふとい指ゆびを、居向あむかつた其その婦をんなに氣きを兼かねたやうに、
慌あわて、引込ひっこめて、

「初手しよてはね、全まくばかされるんだと思おもつたよ、此こち
方ら様に。」

「や、奥様おくさまで。」

と其その時とき、顔かほを見みて小兵衛こへゑが言いつた。

其處そこに襟えりつきの半纏はんてんで、色白いろしろく、末枯うらがれた崖がけの草くさ
を背せに、日影ひかげに立たつたのは梢「しすゑ」であつた。

「桑くはこさん、お知己ちかづきかい。」

「大切たいせつなお得意とくいさま様さまぢや。」

「可厭いやですよ。」

「あゝ可よかつた。」

と安善やすぜんが、ほつとしたやうに一呼い吸き深ふかく吸すつて吹ふ
かすと、又また……幻まぼろしの煙けむりがふかりと立たつ。

「罷り間違へば桑小さん、お前さんの處へ駈着けようと思つたがね、――見ておくれ、荷籠の中を、それ、汚え風呂敷だが、恭い包がある。少しばかり、今日は銀目を張つた、買出をした處で、裡がこはれものだ。此奴を持つちやあ駈出せねえ、尤もまた、此のお綺麗なのを、其の間此處に立たせて、屑屋の荷の番人をさせ申した日にや、立處にそれ、籠が花活に化けるは可いとして、中の買ものが水になる。・・・いや、眞個の事だ、桑小さん。」

「――然うかつて、お前さんの許まで一所に行つて頂く譯にも行かず、私一人で籠を背負つて、坂があるだけに、のそり／＼と上つて行くのも智慧がなく、弱つたよ。麻布十番名代の高善、途方に暮れて居た處だ。」

「道に迷つた修行者のやうぢやな、ほゞ、いえ、奥様、此の人の言ふ事は、何時も些と大仰でござりましてな。」

「處が、今日ばかりは然うでねえ。――まあ、此を一つ見てからの事にしなせえ、此だ。」

と、別に難のない親仁さんの、それだけは止せば
可い、合成金の認印の指環を嵌めた、筋だらけの掌
に、美しく載せたのは、火皿と吸口を黄金に、烏金
で細い茄子に眺へた、艶も照り、濃い紫の露を添へ
た、女持の煙管であつた。

「――のつけに私もお断り申したよ。否ね、
お断り申すよりか留めたんだ。滅多にこりやお離し
なざる品ぢやありません。またお離しなざるにし
た處で、此方人等ぢやあ店が違ひます。何うしても
お賣りなさいます思召しなら、何某と云ふ、表を張
つた然るべき店へお見せなさい。」

「ほんに、成程。」
と言つた時には、小兵衛は手渡にされた件の茄子
形の煙管を、七日ばかりの晝の月に捧ぐるやうに、
両手で上下を取つて透して居た。

「御免なさりまし、一寸拝見を……」
「ね、拝見ものだらう、桑小さん。……屑
屋にやあ職過ぎるよ。――だがね、奥様は何で

も可いから引取れと其でもおつしやる。が、其にした處で（今日は思懸けず買ものが突張りましたので、こんなお品を頂くほどの、）早い話が、（資本を持つて居りません）と、兜を脱ぐとね。」

と帽子を取ると、もぢや／＼とした胡麻しほを撫つけの総髪、窪んだ頸窪を撫でながら、

「奥様のおつしやるにやあ、（出来あひの眞鍮のを一本買へるだけのお錢をおくんなさりや可い）と……驚いた、……恚うなんだ。」

「眞鍮の煙管を一本。や。」と茄子を頂いたまゝ、ぐるりと廻る。

「如何に、物價が上つたと言つて、眞鍮の出来あひなら、たか／＼二分だ、三分と氣張つて兩とは出まい、以前はこれ羅字をすげた奴で三錢で買へた……滅相もない。」

「おゝ、滅相もない、なあ。」
と桑小も腰を抜いたやうに、ぐたりと踞ぶ。

「留めてもお肯きなさらねえ。．．．．何でも
買へとおつしやるんだ。――はゝあ、お禁厭だ
な、私は考へた――人通のない裏道で、茄子の
煙管を屑屋へ手離す．．．．失禮ながら、恚う見
た處、お顔に一つ、」

「梢は俯向く．．．．」

「爪尖に。」

と覗かれて、片足引いた吾妻下駄、残んの露草の
影が映す、素足の踵は消えさうであつた。

「黒子一つおあんなさらねえ。．．．．何のお
禁厭だか知らねえが、構はねえ引き受ける、とたれ
處で、精一杯お買ひ申さなけりや冥利が悪い．．．
．．と成ると、それ、持合せが見込の十分が一もね
え。――處で桑小さんを思ひ着いた。が、いま
言つた坂を上つて山越の一件だ。一寸途に迷つて居
た處へ、噂をすれば影が映す、」

「さ、さ、影も本體も顯れました。顯ればえもし
ませぬが、ほゝゝ。」

と天窓をトンと壓へて、皺手の隙から、日蔭に立
つた梢の姿を、却つて眩しさうに仰ぎながら、

「高善も申しますわ。これはお離しなさらぬが可
うござります。恚う申しては何ぢやがな、十分に頂
きました處で。なもし、高善さんの腹も讀めて居ま
す。飛んだ御損でござりませうぞ。」

「否、可いんです、打棄らないかはりなんで
す。．．．眞鍮のお代だけに買つて下さい、何
うぞ、御迷惑でも。」
と、きつぱりと梢が言つた。

上の邸の臺所あたり、ざあと水使の音がすると、
崖の細樋に、ちよろ／＼と水の通ふのが、つい近く、
おくれ毛に響くのも忘れたやうに、半ば、うつかり
した姿。．．．垣根越に棄てたらしい、莖の短
い、ほとけに手向の山茶花、小菊が、乾いたやうに、
濡れたやうに、一束、ばらりと崩れたのが、崖の腹
から銀杏返を密と覗く、夕日影

もの寂しいが、凜として、
「お禁厭です。何うぞ。」
と言つた。――佛壇の裡から、ものを言つた
やうである。

晝の其の月の下に、白く眉を集めて、ぼんやりと
額を寄せた。此の二個の家持町人。

「奥様、私がお引受け申しますわ。」
と桑小が言つた。

「お顔馴染だと言ひますから、一旦然うなさつて
置いて、可うがすかい、私と違つて御近所の事だ
し、……何とかまたお考が變りましたら、元
價でね、可うがすかい、何時でもお取戻しなさいま
し。――「お遠慮をなさらねえで」と桑小さ
んも言つて居ります。何、――御心配はいりや
しません。」

と麻布十番の大問屋が、ボンと籠のふちを叩いた。

――其の煙管の事なのであつた――

「・・・御免なさい・・・姉さん。」
 お光は撓ふ袖を折れるばかり、はたと蒲團に手を
 支いて言つた。

「・・・梢が・・・恥も、外聞も、極りの悪さ
 も忘れず、後生だから、返して下さい、あの黄金
 の吸口の茄子形の煙管を・・・其の時の言に甘
 えて買戻しに来た・・・實は其のために今日は
 買ものゝ次手に此店を志して立寄つたのだと言つた。
 「何を包まう、煙管を賣離したあの時は、些
 と自分ながら氣が何うかして居たのだつたと言ふの
 を・・・聞き／＼、・・・成程な、小菊、山
 茶花、錦木の紅い葉を、末枯の崖に、其の黒髪くろかみの左
 右に散して、日も月も幻のやうな中に立つて、禁厭まじなひ！
 と言つた風情は、四邊が暗く、急に山深き谷底に
 引入れられるやうに餘所目にも見えて、顔も凄いや
 うに蒼白かつた。・・・御尤も。尤も、尤も可うご
 ざりますとも、もと／＼お返し申さうために、小兵
 衛が預りました品。・・・あの時の御様子でも

察さつしられた、何なにか激はげしく氣きに觸さはり、癩かんの昂たかぶる仔細しさいがあつて、眞しん鍔ちゆう一本ほんの値ねに棄すてりは、一時じのたゞお心こころ得えちが、氣きまぐれに相さう違みない。やがて取とり戻もどしにおいでなされうと、……其それを待まつて居をりました次第しだいゆゑ、あれだけは、御ご覽らんの通とほり店みせへも飾かざらず、大切たいせつに――と言いつて錠ぢやうのかゝるほどの要えう害がいもあるでなし、名なばかりの鼠ねず入みらずも、茄なす子すには重ちゆう寶ほう。なれども爺ぢいの手てに掛かつては、懷くわ爐いろ灰ばひに成なり兼ねますまい。……ほゞ、一刻こくも早はやく、もとの貴あなた女なのお手て許もとへ。――

「……叔おぢ父ちゆうさん、一寸ちゆうと。」「
梢しやうと小こ兵へい衛ゑいの其その應うけ答したへを聞ききつゝ、聞きくうちに、胸むねも帶おびも、緋ひ鹿が子のこの背しよ負ひ上げも一しよ所しよに、我わが煙き管せを引ひん拵ねぢるやうに身みを揉もんで居あたお光みつが、――御ご免めんなさい姉ねえさん、と言いふより迅はやく、蒲ふとん團だんに手てを支ついて俯うつむ向むいたのであつた。

「まあ、光みつちゃん。」「
「濟すみません、姉ねえさん。」「
手てをばツたりと支つき直なほして、

「叔父さん、御免なさい。」

「何ぢや、何ぢや、何うぢやいの。」

「あの煙管は、私が持つて行きました。」

「わ。」と小兵衛は、ぱかりと齒のない口を開ける。

「昨日の晩方、私が赤坂へ歸りがけに、叔父さん聞いたでせう。——「おや一寸、此の煙管は」

ツて、此處の蠅帳の抽斗で見つけてさ……出ものを買つたと叔父さんが、店からお言ひなすつたものだから。……ぢやあ何うせお賣りなさるんだらう、それだし、内のもので見れば。」

と困つたらしく、それでも笑顔を上げながら、

「何の道大金なものぢやあない。……まあね、叔父さん、それに買手が私で見れば、どツち道相談の出来ない事はあるまいと、高を括つて、どうせ今日にも又用があつて來る事だし、日は暮れかゝるし、氣が急いたもんですから、其のまんま、黙つて赤坂へ持つて歸つたんです——

いゝえ、姉さん、此處には持つて居ませんけれど
も、落しも何うもしやあしません。・・・大丈夫
夫、大丈夫、姉さんのお手には戻りますけれども、
唯ね、・・・いま直ぐに、お間に合ひませぬの
が、何うも、何とも、私、何うしたら可いでせう
ね。」

「慌てものが、・・・ほんに／＼　ー　ー　や
あ、来たかの。」

と此を汐に、小兵衛は臺所へ、しよぼりと行く。

「眞個に、姉さん。」

と甘えるやうに、ぐつたりと火鉢に凭れて、顔を
覗いて、

「こんな時にお話をするツて、そりやないんです
けれど、私ねえ、少し的があつて堅氣に成らうと思
ひましてね。」

「まあ、おめでたう・・・」

「あら、そんな・・・でも、然う云つて下さ
ると嬉しいんですよ、お許が出たやうで。矢張りし

かし濟みません、――立派にひくんぢやあない
んですし、それに、お金子の事ばかりでなく、些と
抱主の方に彼此があるもんですから、叔父さんにい
る／＼、それに就いて打合せだの何のがあつて、昨
日も一寸赤坂を抜出して來て居たんですがね。

姉さん ――

お持ものだつたのですかねえ。……姉さん
の……いま言つちやあお世辭のやうで何です
けれど、私、こんなでもそれは癩症で、性の知れな
い煙管なんか嘘にもいきなり口へつける事なんか、
つひぞなかつたんですのに、何ですか、昨日のばか
りは、一目見ると、ゾツとするほどすいたらしくつ
て、うつかり一服吸つたんです。

梢姉さん ――

あの、それに、申譯のやうですけれど、古道具屋
の姪だつて、掘出しものをする氣ばかりぢやあゝり
ません。――いま言つたやうな場合ですも
の……

煙も甘し、すつきりと、私は心もほんのりしながら、ふツと思ひ出した事があつたんです。

新聞で見たんだか、お友だちに聞いたんだか、それともお座敷で、お客たちが噂をなさるのを、些と酔つてゞも居て聞いたんですかね、つい近頃のやうでもあるし、・・・半年一年、もつと経つたやうでもあるし、柳橋だか、芳町だか、それもはつきりはしませんか・・・一人、脊のすらりとした、色の抜けるほど白い、様子のいゝ藝妓がある・・・
・・・面長だから、漬島田も何も似合ふうちに、鬻に結つた様子と言つちやあ、そりやない・・・
・・・いつも烏金の茄子形の細打の煙管を持つて居て、そして其の人が、淺葱なり、白絞の手絡なり、高等な鬻に結つて、其の煙管でスツと吸ふ時、水晶のやうな齒に映ると、艶々と鐵漿を含んだやうに見えるのと、優しい眉もすつきりと富士額に青いやうな、生命取だ、類がない・・・
・・・圓鬻のお約束、お約束、と不思議に何處でも、いつも註文が出るものだから、蔭口をきくものは、令閨だの、御内室だの、もつとずつと、お部屋様だのツて言ふけれど、其の

と 圓鬚で、其の鐵漿で、其の煙管を一目見る ー

姉さん ー

確かに然う言ふ妓があるつて事を、何ですか、夢のやうに知つて居て、思ひ出したんですよ。．．．．其の癖、名は、はつきりと覚えて居ますわ

ー お蓑さん ー

おみのさん．．．．ですから、何だか柳橋らし
いんですがね。 ー

梢の顔の色が颯と變つた！ 谷町の崖下に佛の華
を黒髪に散した時も、思ふに慙うよ、と屹とした。

お光は些とも氣が着かずに、

「ふツと私、其の事を思ひ出したんでせう。圓鬚
に結つたのがよく似合ふ．．．．鐵漿をつけた茄
子形．．．．あゝ、あやかりたい、と又ゾツとす
るまで身に沁みたもんですから．．．．」

十四

「叔父さん／＼。」

「おいよ。」

と言ふ聲が、最う店口。で表でガタリトンと戸を閉す響。――日短な折からの、早や宵闇は深けれど、町筋の軒燈に、柳の枝はまだ白。

「おや、最うお閉めなさるの、」

とお光は、とつかはと云ふ袂捌きで、仕切戸の敷居の下へ、爪尖を半分一寸落して、障子の棧を袖口で軽くおさへて差覗く。と、腰障子をいま入れて、これでも大事な商賣ものゝ古道具の容體を一検分の思入で、正的に禿を圓く突込んだ處なり。

古巢を覗く鼻に似て、

「お光坊、・・・・奥様に御緩りと遊ばすやうにの。」

「まあ――お出掛け。」

「あら、姉さん、お立ちなさらないでさ。・・・

・叔父さん孰方へ・・・・・・」

「恁う云ふ時ぢや、丁ど可いで、一風呂ゆつくりと暖つて來るわいの。」

と言ふ、半纏の細帯に古手拭をだらりと下げて、殊勝にも心得た石鹼箱を、兩手を働かすため、寛げた懷中へ預けたのが、ゴツゝリと溢れて出た圖は、うぶめに抱かされた嬰兒の頭に似て居る。

「では。あの、一所に食つてからになすつては何う。」

「いやの、此でも職人ぢや。」
と頭と一所に胸を振つて、

「ほゝゝ、蕎麥は釜振と言ふのを知つとるて。鐵火ぢやるが。いや鐵火より行火の年かい、ほゝほ、お光坊、店の電燈を消してくれ。……聲がすると人が覗くで。それではの。」

「あい、行つていらつしやい。」
梢も立つた。

「まあ、姉さん。」
と、手取早く店頭みせさきの電燈でんとうを消せば、腰障子こしやうじの外そとに、

こぼごぼんと小兵衛こへゑの咳せき。

「道具屋だうぐやさん、――こりやお出掛でかけですか

い。」

と、通りとほすがりに、隣近所となりきんじよの人ひとらしい。

「はい、八功德くどくくの池いけと言いふのへ、どつぶりしつと沈しづみますて。」

と、足駄あしだだか、日和ひよりだか、そればかり新あたらく響ひびくのが、カタノゝともの寂さびしい。

「梢姉こずえさん、合方あひかたはきつばりよ。」

と、露地ろぢで引出ひきだす三味線みせんに、……

「しんみりのろけようツて處ところだわね。」

とお光みつが馴なれた手ての酌しやくをする。

「御馳走ごちそう様。」

と受けうけながら、杯さかづきを一ちよつと寸透すかして、

「異おつなお猪口ちよこだこと。」

何なにやら、妙めうに凸凹でこぼこに捻ひねつた分厚ぶあつなのは、酒飲さけのみでな

い叔父さんのもてなしぶり、悪くすると、鬱金の切に包んだのを賣りものゝ中から對に持出したものかも知れない。

お光は自分に控へたのを引傾げて、

「野暮だわねえ。……含むと齒を染めよう

ツて言ふ煙管もあるのにさ、これを押つけちやあ齒

莖の土手だ、まあ、可厭な。」

「何ですね、お前さん。失禮な。」

と梢はたしなめるやうに言ひつゝ、お光が、口で又影を映した茄子形の煙管に、何故か、急にぶるゝと震へた手で、一口飲んだと思ふと、

「あ。」

と言つて、震へる袖を、ぐいとすぼめて、斜違に身を捻つた。

「埃、蟲、一寸。」

「いゝえー あゝ、吃驚した。」

途端に臺所の障子の、大な破目から、がさ／＼と音もしさうに形を顯したのは、先刻の野菜の買もの

である。……這奴人參の舌を赤く出し、牛蒡の尾を生じて化けたのではない。暗さが何となく一方へ引締つた處へ、燈が凝つて、眞直に射す穴の裡に、自から、ばかりと浮いて出たのであつた。

梢は蟲を追ふやうに疊を敲いて、

「可厭だよ、此の人は？」

「あら、姉さん、……人參や牛蒡を、此の人だつて？」

いま梢しやうの其その振舞ふるまひは、色いろにも舉動そぶりにも出た心こころの惱なやみを、人目ひとめに紛まぎらさうとしたのであつた。

お光みつは其それとは氣きが着つかずに、

「可厭いやですよ、そんなものを視みて。」

「一寸ちよつとそんなものとは失禮しつれいだわね、此これでもお世帯しよたいの御馳走ごちそうさ。」と急きふに元氣げんきらしく云いつて、蓮葉はすはに一口くち。

「あら、そんな積りつもりぢやあないんですよ。ほゝゝ、いま云いつたのはね、――お臺所だいどころの事ことを思おもひ出して、急きふに里心ぢぢいんがお着つきなすつちや困こまると思おもつて……それで然さう云いつたんですわ。――歸かへしやあしませんよ。……一杯ひとつわたし私わたしにも頂戴ちやうだいな。

――此これは奥様おくさま恐おそれ入いります。」

と氣輕きがるに巫山ふざん戯けて頂いたきながら、

「何どうせ里心ぢぢいんの次手ついでですから、更あらためて唯今たゞいま伺かぎます、先生せんせいは。」

「遅おそいわね、問とひやうが。」

「呆れた。」
と目を据ゑると、静と頬がしまつて、少々口の尖るのが此の妓の癖で、眞正面でも横顔のやうに見える。

「あれだもの、飲んでやれ。」
と、ぐつと呷つて、

「へい、御返杯。……まことに申後れました。
先生はおかほりなく——」

「はあ、あひ變らず——」

「あひ變つては大變よ。そりや分つて居ますけれど、今頃は、——お待ちなさいよ、晩の支度だなんて言出されると困るから、聞きますまい。——
ですがね、姉さん、先生が前の「兄さん」の時分だと、かうした處へ、一寸車夫が何か使ひに遣つて、呼出してさ、一口差上げるツて寸法に行くんですがね。……お喜びなすつたわ。いつかの時なんか。——お待ちなさいよ。」

お光は最うほんのりで、

「自棄に企んで見ませうか。――朝晩一年押
通し、旦那様様奥様よりか、偶には情人に成つてお
遊びなさいな。あゝ、姉さんにも、何より其の方が
御馳走に成るかも知れませんね。――兄さんも、
姉さんさへお在なされば、古道具屋の臺所だつて、
天麩羅のころもが生だつて、そんな事にお構ひはな
いんですもの。あら、眞個に企てませうか。私は急
に思ひついた。――何だか瓢箪から駒が出るツ
て形ですけど、出た駒を馳らかして、兄さんを迎ひ
に遣りませうよ。よ。眞個に――貴女とお二人、
此處へ並んで下されば、私の今度の心願が叶ふ徴で
すわ。ね、眞個に可いでせう。一寸……人々を、
使はずぐにありますがから。」

「あゝ、お光さん。」
と立つのを留めた。手の震を、煙管に縋つても止
まないの、火鉢の縁へ火皿を極めて、壓へて、引
いて、其につかまるやうにして、

「お光さん、良人では宅に居りません。」
「えゝ、お留守。」

と言つたばかりで、それなり濟みさうな、梢の様
子ではなかつたのである。

「お留守。」

と又言つて顔を見い／＼、

「
」

黙つて引入られるやうに息を飲むと、

「お光さん。」

と颯と色を薄く染めると齊しく、堪へようとして、
細目に閉ぢた、眦がきり／＼としながら、露で心と書
くやうに、涙は弱く、沈む睫毛に、ツとつたはつて
溢れたのである。

「先刻から、言ふまい／＼と思つても、我慢をし
ても、堪へても、口より前へ、何しても涙が出るん
ですもの。――口惜い、私……察して下
さい。お光さん、良人では餘所に情婦が出来て、私
は最う棄てられました。」

と意地も、苦勞も、堪忍も、がつくりと抜けたや

うに、氣の張が肩に弱つて、ハツと火鉢に俯向いた。
手で支いた眞鍮の細い煙管に、前髪が、ふるへて附
くと、其の吸口が頸許へ・・・あゝ、白々とあ
る項を、刺が貫いたやうで惨々しい。

胸算のお光は興覺顔。

唯、また一息引きながら、

「まあ、そんな、そんな、姉さん、串戯ぢやあゝりませんよ。――見棄てるの、棄てられたのツて、兄さんと貴女とは、そんな中ぢやあないぢやあないの。第一さ。」

慌てゝ居寄つて、癩でもさすりたさうに、俯向いた其の梢の背を抱いた。が、顔を覗くのさへ、いた／＼しく氣の毒らしいので、顔を頸にかさねつゝ、やり違ひに目を反すと、恰もぶつかつた障子の穴、化け榮もしないで、人參牛蒡が霜げて居る。

「第一、そんな事がないツて證には、見棄てたつてお言ひなさる先生が内においでなさらないで、棄てられた姉さんがお菜の買ひものをなさるわけがないぢやあゝりませんか。」

と分つたやうな、分らないやうな證を取つて慰めた。お光は突詰めたらしい梢の様子に、つい通りで

は慰めよう言葉の術がなかつたのである。

顔を上げると、はらりとあてた、襦袢の袖口、濡々と、涙の中に美しく、

「良人ではね、お光さん、私を置いてきぼりにして何處かへ行つて、――最う四日にも成るが歸つて来ません。――お野菜もね、ですから當があつて買つたんぢやあないんですよ。――察して頂戴。――誰かがね、お腹を空かして、待つてと思へば、銀杏にも千六本にも、大根をちよき／＼嚙すのが、癩處へ上手に當つて、いゝ心持に三味線が弾けたよりか、どんなに嬉しかったか知れないんです。――それなのに、私、當なしに成了つて、何をすゝ張合もありやしません。不斷は市で買ものをすゝするのに、良人に食べさせようと思ふ時は、寶の山へ入るやうな氣がしたものを、今日は一人で田圃へ迷つて、日が暮れて、目も何も茫として暗く成つて、勘定をすゝお寶が、雨滴が落ちるやうな、寂しい情ない氣がしたぢやあゝりませんか。

毎日さ、三度々々のお菜を記いて覚えて置
く……… 罫入の帳面を當にして、去年の今月の
今日と、明日の分を買出して来たんだけれど。――
其の帳面もね、お光さん、お佛壇の横の茶棚の上
へ開けたまんまで、私は最う詰らなくつて、しめる
元氣もなかつたんですよ。意氣地はないけれど、あ
とを書入れる張合がないと、帳面はしめる力もない
ものね。」

と昔馴染の隔てなさに、愚に返つて、とり留のな
い事ばかり。

お光も、思はず貰泣して、「仲がよすぎて癡
話喧嘩をなすつたんでせう、聞く方が堪りませんと、
嘘にも串戯にする處ですもけど、姉さん、濟みませ
んが、そこ處ぢやないやうにお見受けするわ。それ
に、」
と堅く成つて、居直つて、

「私……… 聞いたばかりにして置けませ
ん……… 兄さんに情婦が出来て、とお言ひなす

つたわね。」

梢は黙つて頷いた。

「洒落にもお言ひなさる事ぢやあないわ。そんな
事——もしかですよ、萬々一眞個だとすれば、
飛んでもない、兄さんは——そして、そんなに
お言ひなさるやうぢやあ、姉さんは確な事を御存じ
でせうね。」

と意氣込んだのが詰るやうである。

梢は答けて弱々と、

「知らなくつてさ、お光さん。」

「兄さんは……あら、一寸御免なさいよ。」

とひとりで驚いたやうに、先んじて詫を入れつゝ、

「……兄さんはとに角ですよ。……
御様子だつて、學問がお出来なさるたつて、世間と
も言はない、其處等に、あのくらゐな方なら幾千も
あります。……怒つても——構はな
い。……私は言ふわ。私は姉さんの身ですも
の。……だけれど、姉さんのやうな心意氣の

人は澤山はない。いゝえ、ありません。其の貴女を
向うへ廻して、兄さんと出来たツてのは、もし眞個
なら、何處の婦です、どんな人です、え姉さん。」

「お光さん、太陽様が、西の山へおかくれなすつ
て目も心も暮れて行きます。．．．其の野原の渺々
と遠い處に、たよる灯影も何にもない。杖、柄杓も
取落して、同行二人の菅笠さへ、野分の風に吹取ら
れた、藝妓の果の巡禮が、亡者に成つたやうな目の
前に、露に光つて唯一つ、うつくしい紫の茄子があ
るとお思ひよ。」

おなじ浮世に住んで居るから、お光さんの目にも
留つたわね。兄さんの對手と言ふのはね、」

「えゝ。」
「其の齒を染めた人ですよ。．．．お衰さん
と言ふ柳橋の。．．．」

「――其の日はね、二時頃でした。」

良人で、二階で、仕事をして居たのが、「お茶、お茶。」なんて、人が知らないから可いかと思つて、いつものやうに、おやつを強請るやうに、どん／＼茶の室へ下りて來ました。

私は何と言はうかと、熟と考へて居た處

間の悪い時は仕方がない。番茶が罐の底に成つて、たしないのを、焙じて出すと、餘程乾かしたと見えて、熱いのをふう／＼やつて甘味さうに飲むんでせう。

お光さんも、先に知つて居なさるけれど、其の様子が、何うして此で、餘所へ年増のおつこちなんか拵へて、私を泣かせるだらうと思はれるんです。

――でも、何うも事實なんだから詮方がない。

「済みませんが私

ツて其の時、料簡を極めて然う言つたんです。

「折角下すつたんですけれど、あの煙管は頂きませんよ。」

「何さ。」

然う言つて、不意を食つて、一寸分らないやうな顔をしましたつけ、空惚けて居るんでもなさうなの。煙管を私にくれてから三月の上も経つて居るんですからね。

お光さんも知つての通り、先にね　ー　皆一所に居た時分は、私はよく何か遺失したわね。煙管だ、紙入だ、一寸挿す簪だつて、小間もの屋の荷と、水車の廻るやうに目まぐるしいくらゐでせう。粗忽かしい上に酔つばらつたと來て居るから。

でもね、慾は可恐くつてよ、世帶を持つてからは、拾はうとは思はないまでも滅多に落すもんですか。

ー　自分のをつい夏頃まで持つて居ただけだ、煙草入も筒もあるのに、何處へかなくして了つたもんだから、一寸買ものに出ればつたつて、長羅

宇のは持つちやあ歩行かれず、此ばかりはなくつては不自由だもんですからね。「どんなでも可いから、一本買つておくんなさい。」つて、良人に頼んで居たんです。

「真鍮ンでも可うござんす。

「櫛一枚買つたる事なし、――分つた、分つた、奮發をします。

「あんな巧言い事を――決して當にはしませんから。

二月ばかり經つてから、晝間。然も微酔で、可い機嫌で、出先から歸つて来て、土産がある。當て、御覽と、袂を突出して、肩を怒らかして、斜違ひに突立つて居るから、精々甘栗を二歩か知らと、私も何だか悦々して、支膝でお前さん、繪に書いた小笠原諸禮式の殿御に袴を穿かせる處――てツ形で、氣障だわね。

突立つてる人の袂を捜すと、コツリと當りました。

てんぐ帖てふで巻まいて鬱金うこんの切きれで包つんで、お刺まけに桐きりの箱入はこいりなの、――一寸其處等ちよつとそこいらを見渡みわたした處ところで、お佛壇ぶつだんの外ほかには、此このくらゐ丁寧ていねいなお道具だうぐはないてつた工合くあひでせう。

それが、あの煙管きせるなんです。

――いま・・・お光みつさんのお話はなしだと、お蓑みのさんは、其その茄子形なすがたを銜くはへて、皓齒しろはのバツと染そるのが、鬪鬚まるまげと一所しよに評判ひやうばんな人ひとですつて――世帯しよたいにかまけて居ゐますから、粹いきな處ころの、そんな話はなしは、私わたしは何なんにも知しらなかつた。

ですが、そんなに珍めづらしい形かたちでもなし、第一だい私わたしのには些ちとお見立みたてが妙めうだとは思おもつたけれど、婦をんなの服装なりや持もちものなんか、さつぱり分わからない人ひとですもの。買かつて来てくれた心こころが嬉しい、瓢箪へうたんでも、絲瓜へちまでも、そんな事ことは構かまはない。茄子結構なすけつこう、・・・胡瓜きうりでないのが僥倖しあはせだと思おもつてね。

その後ご・・・お彼岸ひがんに行ゆかれなかつた一月つきおくれに、市ヶ谷いちがやの焼餅坂やきもちざかにお寺てらがあるんです。――

聞いて頂戴。

私の母様のお墓に詣つて、赤いお線香を點しました。

蟲が鳴いて、寂として、薄が身體を包むやうです。
—— 久しぶりで、暮六つの目白の鐘を聞いた時、
ふつと私が小兒の時、たしか、あれは兩國邊で、踊
のおさらひがあつて、母様が、もう衣裳をつけた膝
に抱かれて、顔を視ました、其の山姥が黒々と鐵漿
をつけて居た處を ——

其のまゝに、お石塔の薄の影で思ひ出すと、澄し
て、高慢な顔をして、筒から抜いて、お線香の火で、
一服つけて、すつと吸つた茄子の色で、私も齒を染
めたやうな氣がするとね、極りが悪いやら、可憐い
やら、心細いやら、嬉しいやら。

「良人を買つて貰ひました、見て下さいな母様。
と、花立の花の中へ、トンと置いて、涙も露も一
所に成つて、手を合せて拜んだのが —— あとで
思ふと、恥かしい。 —— 其の茄子形は私が見か

へられたお蓑みのさんと良人うちとが話合はなしあひで、お蓑みのさんの手て
で小間こまもの屋やへ誂あつらへたものなんですもの、・・・
母様おつかさんに恥はづかしい、極きまりが悪いわる。――口惜くやしいよ、お
光みつさん。――
と、ひしと當あてた又また襦袢じゆばんの袖そでが、雪ゆきの臉まぶたに血ちを流なが
した。

「誰にでもお詫をします・・・それが悪い事
だつたら。――ですけども、見つともない、さ
もしいぐらゐには替へられませんか・・・私は
ね、お光さん、其の人から良人へ寄越す手紙だけは、
内證で見ないぢやあ居られません。――自分の
身體と同じで、尚ほ其よりか大切な良人の事なんで
すもの、何處で何をして居るか知らないで居られま
すか。」

尤も、開封したあとの讀殻ですよ。良人ではね、
何處の誰から來た手紙でも、葉書でも、何年にも唯
の一枚だつて、棄てたり破いたりはしないのが癖で
すからね。

私に見せまいと思つても、お蓑さんの分さへ何う
する事もし得ないんですよ。

でも其だけは、もしかを氣遣つて、他に見られて
悪いのは、ずた／＼に破いてはありますがね、・・

・ ・ ・ 火にも灰にもし兼ねるもんだから、彼方の穴だの、此方の隅だの、厚い書物の底の方だの、秘しがくしにして置くのを、留守の時を見計つては、一枚ツて言ふよりか、一條づゝ ・ ・ ・ ・ ・ 継合はして見るんです。字なんかうまいものなんです。女中にも氣を置いて、ぬすみものでもするやうに、其を密と讀む時の私の心にも成つて下さい。 ・ ・ ・ ・ ・ 字一つ、紙の切端が、其の時々で、鱗にも成れば、花にも成ります。火のやうに燃えもすれば、氷のやうに凍とする。最うね、私は自分の身體が一分だめしに成るやうですよ。活きながらの地獄ですわ。魔道にでも落ちたか知ら、日に三熱の苦と言ふのは、然うした思ひかと思はれますよ。

お光さん、御覽の通りの世帯でせう、しみつたれた事を言ふやうですが、一日に一度づゝ、鯛此目魚でさへ息を吐くのに、三日にあげず、あの人に茶屋遊が出来ますか。

何處で逢はうの、彼處で待つもの、途中の塀にかくれて居ると、日が経つほど段々に、玉章も首尾も

果敢く成る、露霜に成る、暗く成ります。……私わたしも、こんなに瘦やせたけれど、……良人うちではまるで青あをしよびれて病人びやうじんぢやあゝりませんか。……秋あきの夜更よふけに大川端おほかはばたをうるつくのは我慢がまんも出で来る。夏なつの朝あさのしら／＼に、日比谷公園ひびやこうえんで逢あはうなんて、其そのくらゐなら、何もねえ。私わたしに心中しんぢゆうだてをさせないで、疾はやくからハイカラさんを細君さいくんに持もてば可いい。――私わたしも構かまつて遣やるのぢやあなかつた。

お剩まけに、臆病おくびやうで神経しんけいやみで、氣轉きてんも、かけひきも知しりやしない。

此この春はるの末すえ、梅雨つゆ時分じぶんなんかも、續つづけて出歩であ行るいたもんだから、さすがに極きまりが悪わるかつたと見みえて、「何處どこへ行いらしたの」と私わたしが聞きくのに、

「活くわつ、活動くわつどうを食たべて、蕎麥そばを見みて來きた――は何どうですえ。」

そんなぢやあ、お茶屋ちやの柱はしらによつかゝつて居あるなら格別かくべつ、裏町うらまち小路こうぢの逢あひ曳ひは、とぼ／＼として危あぶつかしい。……待まち人びとの犬いぬに躓つまづいて、怪我けがでもし

さうで、はら／＼する・・・

女房の前も憚らず、日ぶみ、矢ぶみで大切な亭主を銜へ出して取つゝき引つきは我慢しよう、明方を散歩なんて、いけすかない。癩に障ると思ふ中から。あゝ先方の姉さんも度胸はない、途に迷つて居る様子

まあ、こんなぢやあ何う成るだらう。

私を姉さん／＼と、たよりにして下すつた、お佛壇のお祖母さんには可愛い孫さん　ー

私には大切な良人。

大切な良人が、恚うして居て臺なしに成らないうち、・・・えゝ、一層の事、私の身體を入交へて、お蓑さんの身ぬけをさして、内へ入れて一所にせうかと

「まあ、姉さん。」

「と思つても、手を見れば水仕事で、指の尖はざら／＼する、絲爪はなくなるし、」

「姉さんや。」

「否。」

「姉さん。」

「否、然う云ふが、心の中ぢやあ、矢張り私、あの人をお衰さんに遣るのは可厭です。」

お光が泣きつゝ、

「姉さんてばねえ。」

「―― お互に、學校を知らない連中だから、
 口惜いけれども、元祿はじめ、名はオパールだつて横
 文字は読めやしないわね・・・・照々光澤のある、
 細かい字の綺麗な西洋の書物の間で、あの煙管の事
 が記いてあるお蓑さんの手紙を見つけたんです ――
 ・・・・何うしてだか、それが、つい此の頃な
 のよ。學者でない悲しさに、柔かい日本の本の中ば
 かり氣をつけて居たからでせう。

読めれば其處に、其の手紙なんか秘した處に、戀
 しいとか、逢ひたいとか、こがるゝとか、鳴かぬ螢
 がとか、事ほど然やうにとか記いてあるんでせうね、
 横もじで、・・・・それとも良人の目には、字が
 すぐに染めた齒に見えるかも知れないし。細いから、
 あの人の睫毛のやうにちら／＼するかも知れないん
 です。

（――） 樹はありまして、陰がなく、時間の
 都合で午に成つて、日が照りました。お歸り途が、

お暑うございましたよし　ー　ー　ー
と書いてあるんです。

（　ー　ー　あれから私は一風呂ざつと浴びました、
また痩せました　ー　ー　）
と書いてあるんです。

（　ー　ー　煙管がお氣に合ひ、奥様お喜び遊ばし
候よし、御存じの通り私のと對のですから、どんな
に私も嬉しいか知れませんか　ー　ー　）
光ちゃん、聞いておいでかい。」

「梢は吻と吐息して、

「最うよしませうね、それからね、

（　ー　ー　代償の處を、御心配のやうですけれど、
そんな事は構ひません、袋もの屋は懇意ですし、月
賦と言ふ事にして置きました。どの道借が少なから
ずあるのでございますから　ー　ー　）

お光ちゃん。．．．．私　は　火鉢　の　抽斗　から、細

長い箱ながはこぐるみ、・・・其時そのとき良人うらちの前まへへ、煙管きせるを
きちんと出だしました。

――何なにさツて、煙管きせるなんです　――
然さう言いつたの。

氣きを打うつたり急せきこ込こむと、舌したが乾かわいて、もう口くちの利き
けない人ひとですからね、茶ちやをがぶ／＼と飲のんで居ゐます。

「貴方あなたには買かつて頂いたきたくつてねだつたんですけ
れど、お衰みのさんに御心配ごしんぱいを掛かけようとは思おもひません
でした。

手紙てがみを見みせられた、ハツとしたらしい様子やうすだつた
けれど、それをとツこに取とるやうな水みづくさい人ひとでは
ない。

「可いいぢやあないか、取とつてお置おき、私わたしも都合つがふが
悪わるかつたもんだから、・・・彼方あつちで小間こまもの屋や
に懇意こんいなのがあると言いふし・・・彼方あつちでもいろ
／＼お前まへの氣きに入るやうに心配しんぱいして、どんなのが可よ
からうつて、そりやあいろ／＼、

「お楽しみでしたわね、どうして、弄んで遣らうと言つて、――いゝ處で、お二人で、ひそ／＼と相談なすつて――お前さん、こんなに私に氣を揉ませといて、まだ足りないんですか、足りないの、まだいぢめ足りないんですか。」

「何時苛めた、苛めるとは何だ。」

「苛めるんです、はぐらかすんです、二人でおもちやにするんです。」

「お黙り」

「否、否、……」

「黙らないか、――先方は、先方は、深切に――」

「そんな深切は要りません、私をおいてさきへ死んだ……親の邪険が戀しい。」

ツて、つい、くひしめて、私が泣くとね、蒼く成つて黙つて居ましたつけ。

「あやまる、とにかく煙管は取つてお置き。・・」

・
・
・

「貴方が買つて下さつたんなら、眞鍮のでも嬉し
いんです。……お蓑さんの、こんなもの、此
が罪悪くて地獄へおちても、こんなものは要ら
ないんです

突立つて飛びかゝつた　――　疼くはない、震へ
て拳ばかり堅くするから、三つ四つ、頬邊を……
……

お光はせい／＼と息を切つて、

「兄さんが」

「打つて置いて、うる／＼と見當もつかずに手を
支いたのは、――　其處を拝んだつもりでせ
う。……」

「佛壇を頼むよ　――」

ツて然う云つて、棚から帽子を引攫つて、出たツ
切

晩には甘鯛のつき加減のを食べさして、甘味い、
と言ふのを見ながら、襷をはづして前垂を取つて、
まづ一服、と、あゝ、私其の中でも思つて居たの

—
—
+

┌
·
·
·
·
·
└

洋杖ステッキの銀ぎんの柄えを、紺無地こんむぢの綿入羽織わたいればおりの肱ひぢに軽く掛かけたが、様子やうすを繕つくろつたとは見えぬ。・・・・・縞しまの襲衣かさねはして居ゐるけれど、黒くろの中古ちゅうふるの中折帽なかをればぼうばかり、此この時節じせつに外套くわいたうもなしで、袖そでを引合ひきあはせた肩かたも寒さむさうな、手ての冷つめたさを庇かばつたのであらう。

鞆かばん、バスケットの一つも持もたないのが、――
一雨ひとあめ々々／＼に、年経としへたる木造もくぞうの停車場ステーションの、さながら鐵てつに伐きつて錆さびて行く、濡色ぬれいろの雫しづくも寒さむく、まだしよば／＼と雨垂あまたれの落留おちやまない、折をりからの時雨しぐれの晴間はれまを、木曾街道きそかいだうで人ひとの知しつた、福島ふくしま、須原すはらの間あひの宿しゆく――

寢覺ねざめの床とこは聞きえたが、山間さんかんの僻地へきちは見る目めも寂さびしい、上松驛あけまつえきの構内こうないから夕暮籠ゆふぐれこめてばら／＼と溢こぼれて出る、山やま一つ、里さと一つ、いづれも隣郷りんがう近在きんざいの客きやく。然しからずんば土地とちへ歸かへつた人ひとらしい――それ／＼さへ、頭巾づきんも莫蔭もくえんも冬構ふゆがまへ、結束けつそく堅かたく、鎧冑よろひがぶとの如ごとくに見みゆる中なかに、其男唯そのをとこたゞひとり一人、色いろが白しろいと云いふではない、面おもての露出むきだしなのが、底澄そこすんだ山氣さんきに曝ひられ、血ちの氣けを攪まはれて白茶しちぢけたのが、都會とくわいから來きたらしいだけ、洋杖ステッキ一本ほんの風體ふうたいは、野武士のぶしに剥はがれた落人おちうどに似にて、懣なま

目鼻立の都らしいのがふびんである。

が、それでも僥倖な處へ來た。
いま霽つた、あの雨の中なら何とする。

散歩下駄の些とのめつたのに、紺の色も褪せた足袋で、馴れない土地へ、ト踏出して、四邊を視たが、俾らしいものも何もない。

構外の枳形は、雨が流れて、地が迂る。

其處を、彼方の隅、此方の隅へ、ちよろ／＼と急足に、汽車を下りた佗しい旅人の散る状は、巖をえぐつた流許を鼠の走る趣がある。・・・と言ふ中にも、家と家との空地を見れば、すぐにずかりと、黒い山で牙を剥いたやうに迫つて居るから、峰の影を蓬に落して、熊の踞るやうである。

燈はまだ何處にもなかつた。

時に、其の男は、袖を引合せたなりに、片手を袂に突込んで、ものを捜すやうに、目も又ものを捜

すやうに　――　其處等を見廻しながら、がさ／＼と遣ると・・・・卷莨の袋の、ぐしやりと挫げたのを摘出して、

「ちよツ。」

と舌打を軽くした。

煙草が最うなくなつて、半分に折れたのが唯一本、粉だらけで、袂くさと一所に掌へこぼれたのである。

「可厭だなあ。」

――で、煙草屋でもあらば、と思ふ様子だが、総て體裁も此の通りと、煤行燈を軒に掛けて店前に人のない、御泊宿が山の根と、宿の入口に、二三軒向合つて居るくらゐ、正面に土間を開いて夕雲の下に小さくなつて、居酒屋らしいのが別に一軒、申譯だけに、卓子を据ゑたのがあるけれど、白い切を掛けたゞけに、猿神に供ふる俎に見えて、然も女の影は見えず、乾固つた蜜柑と、硝子箱のビスケット、ビール正宗の類の覗かれるばかりであつた。

道を尋くにも、人を呼ばねば便宜が得られぬ。

「何うしような。」

袖にした洋杖を、地へ支いて、冷い銀の柄を熟と
視た。行方の辻占に、倒して見さうな體であつた。

「持つて来う！」

と背後なる停車場の棟の出口に、忽ち起る野良聲

あり。

「あはッ、はッはッ。」

と山に響く高笑。

其とゝもに、

「うゝいゝ。」と酒のおくびを放つて、高足駄の足はひよろつきながら、眼を白め、腰を据ゑつゝ、其の洋杖でゝめる男を、四五尺、横に開いて前へ出抜け状に、じろりと振向いた紳士がある。

土地の紳士である。

たとへば、茶の山高帽を仰状に冠り、黒絨の五ツ紋の羽織、茶縞の嘉平次よれ／＼縞で、毛繻子の古洋傘と、二重の折詰、眞白な風呂敷包を、メリヤスの襯衣の薄汚れた左手に提げたが、衿は其の甲にだらりと掛つて、衣紋ぐるみずり脱けた。横つちよなりに高々と腕まくりした右の片手に、ビールの飲さしー（飲さしと言ふ、汽車の中で喇叭をして居たのであるから。）を素振をくれて大手を振つた。年配は五十を越えた薄髯の生えた紳士であつた。

行抜けて、よろりと留つて、斜違に振向いた處を、

「もし、一寸失禮ですが。」
洋杖の男は帽子を取つて會釋した。

「少々伺ひたう存じます。」

「やあ。」

と木の字に立直つた。――即ち洋傘を支いたのである。

「こりや、汽車の先生。」

と言つた。――相違ない、次なる驛の福島から乗合せて居たのであるから。

其處で、

「……何うも、先刻は失禮しました。」

「何の、決して……決して以て失禮な事はない、――決してぢやね。雖然ぢや、汽車

の……先生――僕は福島から乗つたのがあす、なあ先生。」

「然やうでした。」

「而してぢや、先生は當時既に、先んじて乗つて居られたな。居られたとすればぢや。一目にして瞭

然たるものぢやらう。僕が當地方の人間であると言ふ事は、……此處ぢやでなあ。」

と折々ビール罎を突出して、

「僕は某會社創立の宴に呼ばれたぢやが、可うが
あすか。ういゝ。」

と蹠跟て、ギクリと踏んで、

「で、然らばぢや、既に豫め汽車中に於てぢや、
君が以て問はんと欲する處は問はれて然るべきぢや
つたらうがね。あはツはツはツ、先生以て如何とな
す。」

と、ギロリと可恐しく睨むかと思ふと、仰向いて
又笑つた。

「あはツはツはツ。ういゝ、あゝ、いゝ心持
だ。……實はぢや、少からず所謂對手欲やで
な、——言ものを問はれんかぢや、奔湍飛瀑三千言、
あはツはツはツ——大に木曾の名所古跡を論じ
ようと思つたわい。（ひよろりと成つて）お

つと、あぶな危い、かけはし棧やか・・・かけはし棧や命をいのち搦むつた蔦かづ
らの如ごときははなはいき鼻息でふきと吹飛ばすぞ。・・・あにいはん豈況や、
詩をよこた横へ、うた歌をたて縦にするにおい於てをや。かけはし棧、ねざめ寐覺、を小
野の瀧、よしなか義仲はもとよりぢや、やまぶき山吹もとも巴もとも共にさかん壯にかた語
らんとほつ欲しましたて、ど何うぢやせんせい先生。　　きみ君は
いやにすま澄してを居られた。ほとん殆どちか近づくべからざるてい底の
ものぢやつたな。

むろん無論、こ此のしんし紳士は、きしや汽車のどうえう動揺に、みぎ右へひだり左へ、ぐぐ
たノとな成る・・・そ其のつど都度、えいえいとさけ叫んで
はまた股のは幅一杯にかへいじ嘉平次をふみひら踏開き、らっぱのみ喇叭飲、で、
げえ、となら鳴し、ひぢ肱をは張つて、ふういとてくび噴いててくび手首をド
キンとひざ膝につく、とあまた々もかたにつかけぎみ夥たび、かた肩をつかけぎみ突掛み氣味に、
じろりノとむか向うからにら睨めたてい體は、あま餘りちか近づくべき
ものではなかつた。

これ此でさへ、きしや汽車をで出たぐわいき外氣のつめ冷たさにまだまださ醒めて
あ居る　　が、か恚うとし知つたら、ぶ無人にんさう相などは
は憚らずに、はや早くえきあん驛員にみち道をたづ尋ねればよ可かつた。

「――何うも濟みませんでした。少し考へ事をして居たものですから。」

「はゝあ、――ふん、はゝあ、げい、はてな。」

とべろりと舌なめづる。

面倒だ。

「やあ、暫く暫く！……御無禮、大御無禮を仕つた。――酔うて居る、酔うて居ります。」

故に不可んと……不斷、妻が申す……ウイ、御無禮、大御無禮を仕つた。えゝ――と、げい、……何處をお尋ねでありますかな。」

「見返と申すんで。」

と、名が餘り名所めく、其のまゝ歌に成りさうなのを、やゝ。籠つて言つた。

「見返……駒ヶ根村、字、即ち見返ぢやな、

宜しい。確に相分つた。……其は、此の廣場を、向の角から、ぢかに山の根について行くぢやな。――相分つた。然らば矢張り、寢覺の床を御見物でありますな。」

「見物もとに角ですが、一寸訪ねます家があるんです。」

「お訪ねの家と……宜しい、確に……いや、些とも相分らん。何と申す家ぢや。」

「御存じでせうか、苅屋と云ふんです。」

言の下に、

「はあ。」

とぐた／＼と胸を揺つた。が、忽ち肩を揉んで、仰向けにぐいと反つて、

「辨天の住家ぢやな。」

と、じろりと凝視める。弄らかすに相違ない。が、憎いはぐらかし方ではなかつた。洋杖の方は眞に受けて、

「寢覺には、其の御堂があると聞いては居ますが、直ぐに參詣に參るのではないのです。―― 苧屋と云ふうちを承りたいのですよ。」

「やあ、君―― 汽車の先生。」

とづいと折詰の肱を張つて、

「そ、そ、それぢやよ。其の苧屋なるものが即ち辨天、はツはツはツ（とけろりと成）―― 帝大出の文學士、目下は東京駒込に於ける、日灼學校校長苧屋周藏氏出處、搖籃の地だ―― 其の、其の在所でありませう。先生お訪ねなさるのは。」

「御存じですか。」

がく／＼と頷いた。

「即ちぢやな、老御萱堂とゝもに留守を守つて居らるゝ、苧谷夫人、……即ち周藏氏の細君の事ぢや。辨天と専ら稀へるのは……は。思つても御覽なさい。其は盡く以て美人が有す。」

と言つたかと思ふと、急に澁さうに口を歪げつゝ、

額で撓めて、また目を据ゑた。

「君、先生は、貴公は、其の周藏氏が留守と知つて、而して後に苅屋家を御訪ねかい。」

「はあ、」

「……はあてな、いや、勢に乗じて、べら／＼と饒舌つたが、先生は誰方ぢやな、君は？・・・此は既に豫め以てお聞き申さにやあ成らんのぢやつた。――ウイ、――第一着にな。」

「――人にものを、お尋ねなさに、何が故に御自分お名乗りなさらんと、先づ最初にな、はッはッはッ、ウイ、……誰方ぢやな先生は。」

恚る土地柄の事である。どんな事で、ふと訪ねる方の知己縁類でないとも計られない。……

「楨と申します。」

と酔漢に對して、丁寧に言つた。

扱は……・・・禮介介は渠である。

峰の薄雲、木曾川の流を映して、中空に漾ふ下に、
 禮之介と思へば紫の影、煙管の幻が早と映る・・・
 ・が、其の茄子も凧に落ちて、時雨に暮れた一人
 旅

酔漢は、がくりと成つて、山高帽子をまともになげ、

「やあ御無禮　　酔拂ひの雑言に對つて、然やうに然も御丁寧にお名告を蒙つては、強い何とも恐縮ぢや。・・・僕もなのります。・・・速かに申上げる。が、更めて申上げる。さ、此へ　　お知己のしるしに一杯獻ずる。うんや、獻ずる。　　然り而して名乗ります。・・・何うぞ此へ。・・・」

と、よた／＼。・・・戸惑をした幽霊の誘引くが如く、件のビール罎で、恚う斜かひに手招きながら、よた／＼よた。・・・

「此へ、やあ君、此へ。」

胸を開けた、後退りに、ひよろ／＼とまた成つて、眞向の白い卓子の店へ、ずる／＼ずる、どかんと尻から入つたのが、谷へ落ちて行くやうである。山々の深さ大きさは、つい鼻の前の人の形も遙である。

――槓はついて行くふりにして、衝と泊宿の袖に隠れた。

「おゝい、君、汽車の先生。」

と向うでは、一旦腰を掛けた椅子をむく／＼と撥起きた處を、其の時分漸と顯れた庇髪で塗つた婦が、頭は庇だが、九字を切るやうに、合せて居た袖の印を解いて、酔漢の背中を掌でトンと當てると思ふと、ビール罎が轉巔つて、折詰が宙に踊つた。洋傘がぐるりと輪に舞ふ。

あとは知らない。

どツどツどツと汽車が出た。

槓は略見當のついた道へ、
ーー
そして、其ま
でうつかり手に握つて居た蓑の袋を、
爪先に浸すばかり
低く走る流れに棄てた。

誰が手に清めたとはなけれども、
山氣はおのづから澄んで埃をしづめ、
雨のあとは土を洗ひ、
石を磨いて、
唯落散つた木の葉のほかは、
濫に棄つるものゝ
目に立つ芥と成るのを憚つたからである。

あれに、山々、偉なる山の背に、
入日が染めた金色の雲を掛けた、
薄藍の峰は駒ヶ嶽、
奥に白いは御嶽であらう。

漆したのも、灰色なもの、
青いも高く重つた。
前途も墨の山である。

槓は初對面の衣紋を直した。

廂の低い、柱の暗い、
店頭縁臺に、黒く成つた
きざ柿と、乾からびたうで栗を
箆に盛並べ、草鞋を
釣して、同じ柱に鮎、
やまめの、夜は光を放ちさう

な眞黒なを、すく／＼とさしてある。ト土間の隅に、人影がほんのりして、ほつと白い顔の寂いのが一人居た。

が、此の際、それよりも目についたのは、谷に一枚翻つて、眞紅な山蟹の這出したやうな、葉煙草の看板が反對の山の裾に、家並を五六軒かけ離れた小家の腰障子に描かれた事である。

停車場を起點として、一寸した軒並の其處が丁ど出はづれらしい。

取着の、御泊宿から、兩側に、下駄屋、小間物屋、菓子屋、荒もの店、古着も釣した小さな反物屋――
下駄屋の店にはつま皮が並び、小間もの店には薬が看板、化粧品、淀屋の煙草入・・・筒持のには、不思議な青玉、怪しい珊瑚さへ交つたが何處にも煙草は賣つて居ないのに、ふと見つけた煙草屋は、呉服店の友染の時雨だより、草鞋の陰の白い顔より、此の山中に鮮麗であつた。

飛びつくやうに、其處へ立つ。――とまた、事も明白に、板敷の店の真中に、硝子戸の、煙草一通の箱を置いて、上に燐寸の包を重ねたほか、がらんとして何も無い。

「煙草をくれませんか。」

「一寸……」

おまけに人まで居ない。

「煙草をください。――御免よ……煙草をくれませんか、――御免、煙草をくれませんか、煙草ですよ……」

「ちよツ・・・」
舌打ちなんぞして追着くものか。

「弱つたなあ。」

前途を見ると、飴色の濡れた道が、石と噛み／＼、一方はがつくりと田圃へ落ち、一方が高い崖に添つて、爪先あがり次第に薄く、やがて深い霧に入つて行く、――木の葉も、枝も、露霜も最う黒く成つて、燈火一點染めたほどの色もない。藪も樹立も處々に、ぼつと煙つては居るが、伸上つても家らしい屋根は見渡されぬ――目の前を走る谷の細流も、早や遠くの方からさら／＼と冴えて寂しく響く・・・

「當がない、・・・煙草を買ふのに。」
先刻の廣場の飲屋まで、戻ればもしや、とは思ふが、あの酔漢を何うしよう。

「・・・崇られたかな。」
槓は喟然として駒ヶ嶽を仰いだ。

方角は知らないが、恰も其の峰が高く遠く都を遮つて居るやうに見える。

「煙草　　」

と呼棄てに出ようとしつゝも、未練らしく立淀んだ時である。

其處へ、もと来た荒物屋の草鞋の陰から、色の白いなよやかな婦が出た。

ほつれたまゝの圓鬚に、薄桃色の手絡が幽で、大島まがひの目立たないのを着て、襟はかくれた。かゝるさんとか、もんぺとか言ふ、裁袴の形したのを穿いて居る、・・・此の邊の山家其のまゝの風俗で、其がなよ／＼して見えたのであるから、すらりと装つたらどんなであらう。

紺の風呂敷包の、大分に膏のあるのを、しなやかな肩に掛けて、襟へ取つて引結へた、むすび目の、ふつさりと乳のあたりへ垂れたのさへ、此が當世の肩掛だつたらと思ふのに　　咽喉をくびりさうで疼々しい

重さうにうなじを垂れて、骨太な番傘の、すぼめ
ても持餘るのを抱くやうに兩袖で抱へたので、荷の
重さの釣合を取るのであらう。

唯、吾妻下駄らしい、其の新しい爪皮ばかりが、
濡れた淺葱で際立つて、然も鹿の子で、媚めかしく
も、床しく、胸前へ影が映すまで、色に出て目に立
つた・・・麗々と並立てた、いまの下駄屋の此
見よがしの爪皮の中にも、鼻緒にも、不思議に此の
色は一色もなかつたから。

「先生・・・」

「あ。」

槓は聞耳を立てた。

小間物屋の軒から、ちよこ／＼と駈出した、赤毛
を堅い庇に結つた、十二三の女の子が、其のもんぺ
穿いた圓鬚のを呼んだのである。

丁寧にお辭儀をして、何か早口に言つて又お辭儀
をした。・・・其の言ふ事は聞取れなかつたが。

「難有う。」

と其の婦は、細く透る、まことに優しい聲して、

「否、可いんですよ。」

と一寸結びめを壓へて言つた、手の白さ。

「重くはないんですから。」

と、小女の顔を見て、嬉しさうに莞爾したが、涙ぐんだらしく、瞬間の面影は露を誘つた花のやうで、尚ほ美しさが勝つたのである。

又・・・・學校でするやうに、きちんと恭しく膝に手を下げた小女に、靜に會釋して、別れて、淺葱の鹿の子が靜に近寄る。

とまで、うつかり見て居たので、忽ち向直つて續け様に呼んだ。

「煙草をくれませんか。何うしたんだ、煙草屋さん・・・・煙草だよ。」

「あ、貴方。」

「は。」

と言った。が、思ひ懸けない、其の優しい、しかも落着いた聲を掛けられて、慌氣味に、一寸驚いたやうに顔を見た。

見られて、薄色に透る、色を、淡く瞼に染めながら、

「あの、誰方もお見えにならないのでございますの。」

「これは……何うも。全く煙草が欲しいものですから。」

「さつきから、大分お呼び遊ばして在らっしゃいましたんでございますね。」

「お喧しう、……何うも相済みません。」

「あゝ、貴方。」

「一向土地不案内なものですから、何うもおやかましようございました。」

「まあ、貴方。」

「いや、何うも・・・」

とばかりで、槓は用もない袂の手巾を探つて、

「しかし、最う結構です。何、可いんです。多分、

誰も居ませんのでせう。」

「でも、折角、貴方。」

と槓の傍を静に一寸軒下へ出抜けながら、

「裏かも知れません。・・・誰か居ますでせ

う。」

と、其の優しい婦人は言つたまゝ。――此が更

めて、見て上げます、とても言ふのだと、其の柔な

肩に、ぐい、ぎし／＼と重量の掛る風呂敷包の荷に

つけても、勢、遮つて辭退も斟酌もすべき處、眞の

深切は口よりも身が動く。――婦人は、いま然う

言つたまゝで、煙草屋の廂はづれを横手の羽目、傍

が内だけの用に充てたやうな、大な菜の葉に、ぼつ

ん／＼の葱の坊さんが子を捉ろと交つた、畑

は可いが、歩行く足場に肥料桶が遠慮なく出してあ

る。其を、厭はし氣もなく、すれ／＼に通つて踵の

白い後姿が件の荷もつに押れて行く。

足許の小流が、むくりと裂上るやうに冷たく流れて、音はさら／＼と寒い風を誘つて鳴つた。

膨れた顔を仰向けに、暗い天井を薄目で睨んで、両手を懷中に、布子の下で、其處等中を、ごり／＼と掻き／＼、血肥りに肥つた大女房。

「おいでなつし、何上げますね。あゝ、あゝ」と欠伸する。

「敷島を三個……」
と言ひながら、ついと横手へ目をひかれたのは、裏からすぐに、山の根を、其の菜畠のうしろをむかうへ通る、うつくしい鳥のやうな同じ婦人であつた。

とのみで、間が一寸離れたから、頓興な聲を出して、此方から挨拶もされず――半ば無意識にたゞでもくれるやうに大女房の邪険に押着ける巻蓑を受取りながら――見送ると、畑の一方へ出張つた

同じ山の裾の雑樹の崖下へついで、ものゝ半町ばかり、槓が行かうとする前途の通り路へ出るのであるが、潔い水が、ちよろ／＼と其處からも一條道端へ流れて居る。

で、……いま、我がために、廂合の肥料桶を厭はなかつた、其の功德によつて、婦人の戻道は、水に清められたものゝ如く、淺葱爪皮は、碧瑠璃の珠の履を穿いたやうである。

と思ふも身勝手。

しかし、また目に立つた。

婦人は、一廻りして、道へ出しなに、會釋をする心か、振向きはしないが、軽く圓鬚を俯向けたやうだつた。が、其のまゝ、山路を獨り行く。

石、泥の荒れたる道、梢はすいて、根に残る、夜も其處からの黒い木の葉に、はら／＼と色に出で、濡れた淺葱は……又媚かしい。

ずうと伸せば、肩へも背へも、追着くほどの距離だつた。

が、其は何となく憚られた。

槓は禮心に、其の場も動かず、腕を張つて、したゝかに煙草を吸つた。

「持つて来い！・・・」

低い屋根ならびの空を隔てゝ、いま着いたか、出ようとするか、むく／＼と立騰る、機關車の魔法で噴出す、煙なんぞに術を較べて負けるものか。

まして況や、煙草屋の化女房の、消え際の如きは眼中にない。

風も告らず、暮の色は迫つた。駒ヶ嶽の背にたな
 びいた金色の雲は、雲の斑の一つ／＼、眞中を残り
 てまはりは颯と鶏卵色に薄く成る。左右に、前後に、
 仰ぎ又差覗いて、曇る山は灰汁に、晴れたのは藍に、
 澄めるは青く、暮れんとするのは早や暗い。

と視ながら、槓は爪尖上りに道を辿つた。なだら
 かとは雖も、崖の雑樹の出入りにつけて、婦人の影
 は最う前途に見えぬ。

其を鹿の通路で、こゝを、あの白い足、淺葱がち
 ら／＼・・・と思ふにつれて、木の葉が瞳を呼
 んで、行く／＼幽艶なる色を露す。

露、霜、雨に朽ちて、唯黒く積り、灰色に落ちた
 と、一わたり見た目も、恚くて注意を促さるれば、
 それ／＼に艶である。縁を赤く残して、中の破れ
 たのがある。中を紅に染めて、緑の残つたのもある。
 腐蝕が櫻貝のやうに見えるのもあれば、裂目が蝶の

翼を容づくる。．．．．蜘蛛を銀で鏤め、松蟲を
烏金で象嵌する。

「．．．中に、缺けず、裂けず、もみぢの葉の完く
して、眞紅なるは、皆小さく、恰も紅玉を刻んだや
うで、落溜つた落葉の堆き底に、宛然黒髪の塚の中
なる、燃ゆる心に似て居た。」

「あゝ、綺麗だ。」

一枚手に捧げたのがあつた。．．．漆の艶も
濡色に濃く、深く縁を刻んで、さび一つなく、中が
楓の葉の形に燃立つばかり紅である。透かすと．．．
其の染分けた劃に、四邊の嶽々、峰々の、藍も、
青もすら／＼と透徹して、葉の筋は、目のあたり、
駒ヶ嶽の雲の金色を、其のまゝに黄金に蒔いた。

「．．．眞個にするだらうか．．．知らな
いものに、繪を彩色をして見せたら．．．話を
したら．．．」

楨は奇蹟を觀て、神秘を感ずる如く、且つ翳し、

且つ透し、空に裏表を翻しながら、片手を上げて浮か／＼と成つた。

「お柳（妻、梢の事。）は秋が好きだつけ
ー 然う言へば柳橋も．．．．」
ハツとした。

忽ち、裂くが如き水の音。

足は激流にのぞんで、爪に橋の袂が掛つた。岸、左右に巖を削つて、榎も漆も倒に生ゆるが如く、磊々たる石青く、暗き谷を、矢の閃めくが如くに流るゝ、谿河がどつと道を横切つたのである。

楨は思はず退つた。

左手の岳の小高き處に、青五輪と古塔婆が立つて、松が一株寂しく植つた。．．．其の下に、葎かと思ふ破傾いた草の家が一軒廂低く、穴に似た奥に、ちよろ／＼と焚く爐の火が漏れて、煙は軒を騰らず、迷々として却つて屋根の草に浸む。

「此處が見返り橋と言ふのかも知れない。」
殆ど一軒家で、見渡した處、問ふべき家は他には
なかつた。

「あ、何處へか。」

心着くと、……・……・凄い流に一驚を吃したト夕
んに、何う落したか其の木の葉を知らない。

それに、いま葉を翳しながら、どんな風をして、
櫓焚く此の家の前を通つたらう。

槓は且つ惜み、且つ恥ぢて、逡巡しながら、たそ
がれの其の一つ家の軒に寄つた。

一段低いので、がくりと成つて、又吃驚しつゝ、恚
う覗くと天狗様やら、狼やら、人形の首のやうな杓
子やら、朦朧として異形な姿のあらはれた、幾枚か
のお札の傍に、やゝ形に出て新しく、目に立つ札に、
(獵師) として、岡宅平と認めたら―― 獵
師……・……と山暗く、故郷遠く見られたのである。

「前刻は何うも　――　お庇様で煙草にもありつ

きましたた．．．．．」

と槇は敷島の袋を見せながら言った。

それも、親みを表はす一つの手段だと思つたが。

「全く、奥さんとは思ひがけませんでした。何うも失禮しました。しかし、何ですか、此が當前で、然もあるべき事のやうに思はれて成りません。」

と其も此も一齊で．．．．．口早に挨拶するのが、山々の夕暮の影が、麓の霧で一度中絶えて、また、菜、大根、葱の根から潮やうに湧いて擴がる、畑續きの、此處が背戸で　――　居室が二間並んだ縁側を横にして、先刻の婦人と向合つて立つて居る。

「お見それ申したと言つては嘘に成ります。苅屋君とは、まことに不斷誰よりも、御懇意を頂いて居りますけれども、奥さんは御結婚　――　間もなく、此方にお留守だもんですから．．．．．それに

「

と一寸言淀んだ。(談話はいづれ出ようが)

「高島田に鼈甲の花櫛、花笄、裙模様の振袖で、二嬢に唯さしうつむいた苅屋周藏氏。――新夫人利佐子と知つたのが、もんぺ袴に、いまも着て居る。――紺緋の筒袖、且つ背負荷もつに、抱へた番傘。餘り變つたと思ふのを憚つて、胸に疊んで黙つたのである。」

利佐子は白い指さきで、其の上被衣の襟を刻んで、

「は、あ、あの。」

と何やら心急いたやうに、然も内端な會釋を、

「――此處で顔を合せてから、二度三度繰返した。

其が……

「は、あ、あの。」

とばかりなので……。思ひ掛けない客に氣惑ひして、羞恥むとのみは思はれない。――あの、靜だが優しく透る聲が、何故かかすれて、慥うじれつたく柔かい咽喉に引擲る。

で、あ、あ、と何かあとを言はうとしては呼吸せ
いて、空咳きに紛れるやうで、何故か、切なさうに
見える。

「で、何は、御機嫌よく、おかはりもありません
で。」

「は、あ。」
「實はこゝん處、しばらく、申譯のない御不沙汰
に成りましてな、しばらくお目に掛らないのですが、
苧屋君からは、始終おたよりがございますか。」

「は。」
とぼつと薄皮の臉を染めた、が、情愛が色に出た
ばかりではない。聲の掠れるのを、惱むらしい。も
う、此の時は、軽く顔を横に振りつゝ、指先で咽喉
を擦りさへしたのであつた。

唯見はしたけれど、黙つて顔ばかりは見て居られ
ない。

「突然に生まして、飛んだお邪魔をいたします。」
「は、えゝ、えゝ。」

何うも弱つた。

氣易く、少し笑ひかけて、

「苅屋君とは、あんなに御懇意にして居りましたも、まだ一度も此の御郷里へはお供をしません。まるツ切はじめての土地だもんですから、御存じの通り、大まごつきにまごつきましてな、此方様も、何でした。あの、橋向うの一軒家、——岡宅平。……」

獵師としてありませう。獵師は珍しいので、名もよく覚ええました。が獵師と言ふのが船頭と言ふのと違つて、何ですか、心細いやうで、

と胸にある事を、つい喋舌つて、

「其處で、尋ねましたつけ。よく教へてくれましたのに、……畦道を取違へたと見えます、こんな裏口から、……」

「は、あ、あゝ、えゝん。」

と幽な咳までして、今度は明かに、何故か切なさ
うに血を染めた。

いや、何故どころではない。

停車場から、やがて半道はあらう。・・・だ
ら／＼のぼりを、あの荷を背負つて歸つたばかりで
も大儀は思ひ遣られるのに――いましがた獵師
の家で、場所を尋ねて、橋――矢張り見返橋であ
つた――を渡つて、右へ畦道へ切れて、畑中を
來るとほゞけ立ち、亂伏した尾花越に、一つ孤屋の
屋根が見えて、白壁の藏はないが、下屋を藁に、棟
と瓦の交造――教へられた通り、其が紛ふべ
くもない苧屋の家と思ふ。裏手に森を抱いて、流の
音が訝するやうに響いた・・・其の森を離れて
また菜畑へ見える中を、荷で水桶を兩方に荷つて來
る婦人があつたのである。

間は離れたが、脊恰好、ものゝ様子が、先刻の婦

人に寸分違はぬ。絶對とは言ふまじきが、容色、も
の腰、小間使にも婢にも、あれだけの奉公人があら
うやう譯はない。とすると、

「細君だ、や．．．．細君だつたか　　—」

利佐子さん　「—」

親友の妻であるから、名も、年紀も、其の生立ちも
よく知つた。

「が、あれは何うだ。」

天秤棒で水を汲む。　　—　　ぎよつとした

が．．．．

「苅屋の辨天．．．．」

いたはしさもいたはしけれど、美しい人の其の姿
實にこそと頷かれて、土地で辨財天と風説するのを
思ふにつけても、細君が自ら、あゝして、水を荷ふ
のではなしに、寢覺におはす、おなじ名の天女が、
こゝに頑健にして、強情我慢なる人の知つた姑に事
ふる、嫁御寮を憐んで、かしこくも身代りに立たせ
給ふ．．．．われらも、面影に導かれた．．．．

浅葱の玉の履のあと

唯、其處に、折伏した尾花にまじる芋苗の中に、戸惑をした兜蟲の如き、黒の中折帽を露に残して、彼方に水擔へる婦人は樹の下になびいた霧の中にかくれたが。

「御免下さい、御免下さい。」

「ー 辿りついて、音訪ふ聲に、」あ。」

と云つて、廂の横手から、ばら／＼と出た人は、瓔珞も掛けず、天衣も曳かず、もんぺ袴のあまゝで、しかも素足に摺切れた草履である。これではなくては擔へまい。

無理な力業に胸が挫けて、さそくに聲の出ないのは、何故どころでない、ー ー 其のためである。

楨は目を外して、舊來た小山の上の、あの寂しい松を視た。偶と、其の枝に釣される照手姫を思ふと同時に、大慈觀世音の御身がはりを念じながら、やつと一息して、

「御萱堂は……何、御老母はお變りもあり
ませんか。」

と、妙に聲さへ低うした。

「お利佐あ。」

驚破呼ぶ、しやがれ聲が。

「利佐よ。」

あゝ……呼ぶぞ、猫魔が。

「は。」

此に利佐子は音を立て、

「唯今——あの、御老母は、一寸風呂に入つ
在らつしやいます。……はい、只今。」

と手敏く、筒袖の紐を解くと、めりんすの、菱び
た帯の折目に、あはれや、もう、紫の色の褪せた襷
を用意に挟んで居て、

「御免遊ばせ。」

片手を、白く潜らすうち、片手は最う、一寸丸げ
て、その上被を縁の隅。

「……すぐに、お目にかゝりませうし、あの、御緩り……。まあ、とにかく……。」「と後や、前。そのうちに又可厭な聲。今度は、底力をねつとりと引いて、

「利佐えゝゝ。」

と呼ぶ中で、ぢやぶ／＼、成程、ぢやぶ／＼、廂の裏と思ふ處にぢやぶり／＼、と谿河の音には似べくもなき、生ぬるき、音を立てるのが、猫魔の舌舐ずる氣勢である。

「あゝ、容易な事でない、細君は、肉も皮も喰散らされはしないだらうか。」

槓は、利佐子の駈出したあとを、猛獸に魅込まれて、毛を慄かすやうな片隅の其の紺の筒袖のしをたれたのを視ながら、利佐子が、それを脱いで置く時、禪をちらめく雪の腕に、うつかり持ったのを縁に落した、中折帽の傍で、とぼんと腰を掛けて悄然とした。

駒ヶ嶽は暗く成つた。

「やあの、ごし／＼ごし／＼と、のえ、――
これ、力ちからを入れるだけや。」

はゝあ、背せなか中なかを洗ながさせる。

「極きまり處ところは、ちやんと極きまつて、のえ。柔やわかいばかりが能のうではねえだに、のえ。東京とうきょうのお客きやく様さまござつたば、婆ば々々もめかさんば成なるまいし、ふあワはワ。」

「南無なむ、觀世音くわんぜおん。」

禎まきは思おもはず佛ほとけを念ねんじた。

「のえ、のえ、――のえ。――あツ、あちツ、ちツ、ちゆツちゆツ、こんれい加減かげんをせうてばえ。親おやを煮にるか、のえ。」

「ふあワ、はワ。和女にしよがのは邪險じやくけんでねえて

ば・・・・・邪險じやくけんでねえだで許ゆるすだい。行届ゆきとぎかん、不束ふつつかばいの。のえ、のえ、よう氣きを着つけるだえ。」

「……もし。」

「は。」

禎まきは呼覺よびさまされたやうに、利佐子りさこの顔かほを視みた。

「あの、お老母としよりが申まをされます。何うぞお上あがり遊あそばして、」

「否いえ、出直でなほして参まゐります。」

「あれ。」

「勿論もちろん、出直でなほして参まゐりますが、一度失禮どしつれいを致いたしま

す。」

「貴下あなた。」

「實際じつさいはじめから一旦たんはたご旅籠りやうを取りましてな、
・ ・ ・ それからと思おもつたんですが、まるで様子やうすが分わからないものですから、此方こちらで伺うかがつて、と然さう存ぞんじて
て・ ・ ・ ・ ・ 」

「利佐りさや。」

「はい、はい、
・ ・ ・ ・ ・ まあ、貴下あなた、飛とんでも

ない・ ・ ・ ・ ・ 」

「お利佐りさよ。」

「はい／＼。」

とまだ掠かすれて。

「あゝ、屹きつと更あらためて出でますと、然さう何うぞ、然さう

何うぞ、」

と縋すがりよ呼びに、言いひ縋すがつて、

「……弱つたなあ。――」

「――あの、貴下。……あんなにお親しく遊ばして下さいます、お友だちがお出で下さつて、内へお泊り下さいませんでは、何うしませう。お老母も申されます。私も濟みません。」

「否、決して、……然う言ふわけでは。」

「何うぞ、あの、とに角、お上り遊ばして下さいまし。こんな旨い恰好をして居りますから。……唯今、足を洗ひますと、お火鉢をお取り申します。何うぞお上り下さいまし。行届きませんから私が叱られます。何うぞ、私を可哀相とお思ひ遊ばして。」

槇はしめやかに聞いて、ほろりとした。

「どうこい。」

と、のさりと廂の裏を出て、

「こいシよ。」

と一つ、掛聲をした姑は、澤庵のむれたやうな湯氣を立てたしみだらけの丸裸體。が、――紺の

布子を、皺手の張腕に客の方へたくしかけたので、
やゝ身の半ばの、脇の下から腰少し蔽うたのみ、へ
ちまに似た乳を露骨に、七十に垂々たるのが、何處
へつける禁厭やら、まるげて持った其の布子の中に、
汚れた赤い切を少々、不氣味に湯氣にだらけさせ
つゝ、ちよんぼりとした切髪をびよいと振つて、頤
を出して、首を据ゑたなりで。ト出て客に向つた時、
ひよいと、手拭を肩に掛けた。其のまゝ、又横向に
首を据ゑて、角を取つたもの置の土間で足駄を脱い
で、木臼を轉がしたやうな階段を、

「や、どうこい。」

と、跨ぐ時、
めかせながら、次の室の壁際を、のいゝ、たそが
れの納戸へのたりと入つた。

二十九

湯上りの薄化粧・・・縞の寝衣にぞろりと成
つて、若々しい淡紅色の扱帯を、胴をくびつて、緩

かに腰に結んだ、圓鬚の利佐子の姿を。――此が
堅氣でなく、否々堅氣でも主人が日華學校の校長で
――それも宗教の學校でなかつたら。――も
う少々、委しく明かに御目に掛けたい。

寢室の電燈の三燭の、剩へ木曾山の暗い事

部屋は、禮之助が暮方此家へ音訪れた時、其の縁
の外に立つて居たのと同じ、廣い方の八疊で、其處
に、寢床が二つ並べてある。樟腦の薰がする、敷布
は掛けずに、對の友染の、花模様の揃つた處は、細
君が當家へ嫁入の調度に疑ひない。實家は松本に、
名のある料亭旅館だと云ふ。此の一组は納戸の長持
から取出された事を、禮之助は、それとなく知つて
居た。

尤も、姑が手傳つて、二人で抱へては、二度、三
度、利佐子の方は、其のふうはりとしたのを胸に、
恰も花の雲に乗るやうだし、姑の方は鉈で櫻を伐る
やうだつたが。――此のあたり、山家の寒さは、

爐端ろばたに居ゐても膚はだに透とほる。櫛ぼたあかりに燻くすぶつた、茶釜ちやがまの黒くろさ、松まつの古根ふるねの時雨しぐるゝばかり、冷つめたい谿河けいがの音おとも通かよふのに、筵むしろに浸しみた灰はひの色いろは、火ひに向むかつて霜しもを結むすぶやうであるから――入交いりかはりつゝ運はこぶ其その夜よるの調度てうども、我われのみに設まうぐる厚衾あつぷすまか、と膝ひざを薄うすくして覗のぞいたのであつた。

いざ、寢床ねどこへ、と成なると、枕まくらもそこそ隙すきはあつても、びたとついて、殆ほとんど八疊やふ一杯ばいに、・・・かの雪谿せつけいと言いふ難處なんじよを越こえて、辛からうじて生命いのちがけで視みると聞きく、高山かうざん絶所ぜつじよのお花畑はなばたけのやうな、對つめの褥しとねに――驚きぜつを吃きつしたのである。

勿論もちろん、其その一方いぱうのは、姑しつとのためのものでは決けつしてない。

姑しつとの床とこは別べつに敷しかれた。

場所ばしよは、枕頭まくらもとの床傍とこわきの二枚襖まいがすまの蔭かげに成なるに――
方角ほうかくは鬼門きもんだらうか――佛間ぶつまらしい小部屋こべやであつた。

寝しなに、其の襖から立身で覗いた。・・・
古布子の裙はだけで、可恐い事には、舌のやうな赤
いものをちらりとさせたが、得體の知れない、幅廣
な紐をだらりと下げ、皺手に、長羅字の煙管を構へ
て、

「や、御免され、俺は早や臥りますまい。」

「は。」

の爾時、禮之助は、・・・桐に鳳凰、櫻に短
冊と言つた形で、友染の對の夜具の、とにかく坊主
枕のある方へ、かたく成つて附着いて居ると、

「のえ、槓しやあん。」

しやアんと聞える、ふはノノと頬邊を揺笑して、

「屏風さ、のえ、此處と此處とへ。」

折から爐端で、まだ片づけものをして居た、利佐
子が來べき塗枕と、襖際とを、姑はトンノノと煙管
でたゝいて、

「のえ、隔てに立てべきでんするが、縁の方から
風が來るでや、裙の方さへ建てたではえ。」

成程。其處に六枚屏風。で墨繪で描いた仙人が朦朧として此方を下り目でニヤ／＼と不氣味に笑ふ。顔が押附いて並んで居るのを、和合神かと思へば、箒を持つてるやうだし、寒山拾得かと視れば、遠くの山の端に、鹿だか、飛出した人間だか、ものゝ怪しい形がある。鐵柺にしては本體が同じ處に二つある。

繪の方はよし、それは化ものでも仔細ない。が、猫魔でない、白髪の姑が、仔細らしく矢張りニタ／＼と立つて居て。……

三十

「ふアツ、ふアツ……槓しやアん、餘所他の姑は、のえ、若いものと、老人の寢所の中さ屏風で劃るが、のえ、夜半何程でも其の屏風の上から顔

を出して覗くと、のえ。俺が流儀は開放しぢや。」

胸で掬つて、衣紋を抜いて、

「開放しぢやと言うて、襖はちやんと閉めるんでする。しめた上にえ、枕は彼方だてばえ。」

と横向の頬邊に、また可厭らしく笑を含んで、件の煙管でづいと指した。寢床の位置は、佛間の其の姑の足を、此方に寝て細君が圓髻に頂く事に成るのである。

「のえ、槓しやアん　ー　氣の通つた事は、御本陣の天井板のやうぢやるがや。悴が寝る時も此通りぢやてばえ、　ー　なあ、悴え！」

と其の悴を、干鱈の骨を搔しやぶるやうに、噎れて且つ、筋張つて言つて、

「のえ、槓しやアん、返事せうてば、　・　・　・　・

なあ、悴。」

「は。」

とばかりで、すくんだ頭を、槓は其のまゝ俯向いて、

「おやすみなさい。いろ／＼何うも。」

「いろ／＼利佐と話さつしやい。氣の通つた事は、御本陣の天井板ぢや。……なあ、せうてばえ。」

「は。」

と又言つた。――實は――周藏と兄弟同

様の親友であるから、今夜は悴が歸つたと思ふ、

「悴と思つて宿をする。」然う言つて、姑に引留められた次第なのであつた。

一體考へて見れば、禮之助も些と蟲が可い。此の姑とは、東京に居た時からの知己で、其の頃は、周藏が、禮之助とゝもに卒業前の大學に通つて居て、……二人は言ふ通り親しかつたが禮之助の方は、はじめから此の姑とは反が會はない。何處か、女學校へ通つて居た姪だと言ふ女と母子三人ぐらしの住居へ、一週間に三度は缺かさないで遊びに行くほどで居ながら、周藏が留守だと聞くと、聞いたばかりで、禮之助は玄關から遁げて返つた。

「周さんはお留守でございますが、唯今」と姪が

老母としよりに取次とりつがうとすると、「決して、決して。」
と後退あとずさりをして門もんを出でる。遁にげやうが遅おそいと、垣根かきね
にも、辻つじにも、まだ身體からだのかはし切きれない前に、老
母よりが黒くろく成なつて門もんへ出でる。また可恐おそろしく話はなしずきで、つ
かまつたら最後さいごだ、猫背ねこせの頭出あしだし、切髪きりがみの額ひたひで睨にら
で、長煙管ながぎせるで拍子ひやうしを取とつて、トンと拂はたいては、灰吹はひふき
の蓋ふたを一々取とつたり蓋ふたしたり、で、神道しんだう、佛法ぶつぽふ、唯たゞ
今末いままつぼふ法ごせ、後生安樂あんらく、仁義禮智立身出世じんぎれいちりつしんしゅつせ、米こめから天氣てんき、
物價高値ぶつかがかうちぎ、十三代前だいしまへからの苧屋かりやの系圖けいづに到いたるまで、
息いきも吐つかせずまくし懸かける。それ、此これを恐おそれて遁にげ
る奴やつを、「こんれ、待ちせえよ。周藏しゅうざうさ今いまに歸かへ
べい。」で「――槓まきしやアん」――だ。
唯と「――は、は。」とばかりで、遁にげ状さまに、
千の矢やさきと降ふりかゝる、白髪しろがの影かげを追おふ如ごとく、帽子ぼうし
をくる／＼と廻まはしながら、洋杖ステッキの捨鞭てすむちで、砂利じやりを乗のつ
切る例れいが數々かず／＼あつた……と云いふ次第しだいで。

梢こやしのお柳りゆうが、お光みつに話はなした「――其その事情じやうで、
家いへを駈かけたしたまゝの禮之助れいのすけは、ひとり心こころに思おもふ仔細しさい
あつて、周藏しゅうざうの故郷こきやうを訪たつねるのに、旅費りよひらしい用意ようい
も持もたず、支度したく一つあるでなし、泊たまりも宿やども、實じつは此こ

の苧屋の家を志した。で、蟲のいゝと言ふ事は倒れ
伏すとも萩の原、婆々は化けても軒の夕顔、あから
さまに言へば黒塚に咲く女郎花で、面影ばかりも、
新妻なる利佐子を心だよりにしたのであつた。

三十

が、最う、姑が、あの襷がけの白い手に、湯の垢
をかゝせて、あちゆツ、ちゆツの時分には、洋杖とゝ
もに足をあとへ引いて居て、皺だらけの半裸體が、
湯氣を立てゝ顯れたのを見ると、蛇身の惡氣を拂ふ
やうに、帽子を胸に廻して居た。――けれども
利佐子に引留められた。

灰も冷い火鉢の前に、悄然と座に着くと、利佐子
が焚落しの僅ばかりの火を、佗しさうに持つて来て、
しかし炭をドンと繼いで、折から颯と通る風に、所
帯崩して、熾す處へ、姑が帯をしめて出て来て
「こんれは、槓しやあん」と真中へどかりと坐る
と、槓が手をついて挨拶するのを横目に見ながら、

利佐子が炭をおさへつゝ顔も横に成つて吹いて居た火箸を、ぐいと引たくつて、じみりと目配せをしたので、何やら支度に利佐子が立つと、まだ後姿が襖際を隠れぬ前に、掻發つて、打撒けて、積んだ炭を、ぐわしや／＼に突崩して「こんな事で火は燐るかてば——何と云ふ不器用つらあえ。」聞けがしの獨言で、積直す下から、ごそ／＼と疊の暗まぎれに、炭を炭取へ引戻すのを見て、第一番に遁げたく成つた。

次には、晩の支度が出来て、此は、更めて爐端へ呼ばれた時であつた。槓が何心なく榾火に絶るやうに、あいた處に坐らうとすると「やあ」と留めた。姑の引拂ふ手がぶる／＼と動いて、「横座ぢや、其處はえ。先に逝かしやれた俺が旦那かのえ、いまの周藏か、のえ、苅屋家の主人でなうては、はい、誰様でも坐るべきでねえでんす。其處さ嫁が歩行いても、主人の頭を踏む同様に成るでんですてば。」ふアふアと、あとをさまして、「東京の借屋なら構ひまつしねえど、いま、のえ、周藏の力で——一旦微祿した家邸を再興中の、瘦せても

此が苅屋家です、槇しやア、田舎はものは堅
いてば、頑固のやうぢやが禮儀が正しい。貴
方も、のえ、腹を立てずと、書物の外の學問ぢやで、
のえ、……さ、さ、客座は其處です。――
はい／＼／＼、何もござるませんねど、澤山まる
つて、はい。「と言つた」槇は見當違ひの腹を立
つより、利佐子の其の時の心を思つて泣きたく成つ
た。

膳、椀は南天の實と、百合の蒔繪で見事であつた。
が、ぜんまいの煮つけ。生のまゝで、ざくに切つた
青芋苗の酢浸。串ざしの山女の焼もの……ま
では、論ずるがものはないが、惱まされたのは椀の
清汁で、鹽出しの田螺と金魚麩を種に、満々と汁を
湛へた、蓋が、泳ぐばかり波を打ちつゝぬるくして
且つ惡甘い。東京ものゝ口に合ふやうに。「俺が
加減をしたてえば、さあ、かへて、のえ。」と言
ふ、もう一品、姑が自慢の早吸ものと稱へて、酒の
肴にも飯の菜にも、此のくらゐ鹽梅のいゝものはな
い、世帯持は且つ覺えて置けと言ふ日附で、と見る
と、澤庵を賣の目に刻んだ奴に、湯を注込んで、椀

でむらした奇品である。臭く變に臭つて、ぬる／＼といきれた加減が、たとへるも可恐い。湯上りの其の姑の乳首をしゃぶるやうで、口許へ持つて來ると忽ち其の舌が釣つて、自から、目が白く成るやうな氣がして、げつと言つてこみあげる。

「ー あゝ、東京の内に居れば、たしない世帯の、八杯豆腐の惣菜にも、梢が煮出しを引いてくれて、木皿で一寸加減を試みて、味醂をたして、……指環もない手で、花袖を驕つて、さめないうちにー ……と火のつくやうに思ひ出すと、其の白く成つた目が、底涙で、ぼつと霞む。處を、」
「さあ、まゐれば、いゝ鹽梅だ、のえ。」と強ひつける。是を想へば、無鹽の平茸を旭將軍に搔食された、猫間殿はお仕合せ、と禮之助は貝吹いても遁げたく成つた。

剩へ……姑ごは、山女には手もつけず、件の澤庵吸ものを、むし／＼と噛んで、ちゅッぱ／＼と舌鼓でして遣りながら「槇しやアん、こんれは更めて一つ思ひ指でんす……悴ぢやと思ふで、

俺と、おや子の堅めぢやてばえ。」で、袂から紺地の緋のやうな斑の入つた切を出して、盃のふちをしな／＼と拭いて獻された時は、嘘でない、肝を冷した。

禮之助は、嘗て東京の或停車場のW・Cに於て

――聊か尾籠で恐入るが、此とよく似た婆々が、袂から出した同じやうな切で洗はない手を拭いて、腰を振動かしながら、又袂に藏つて、健かに出て行つたのを見た事があつたのである。

――とは言ふものゝ、傍に膳も控へず、塗盆を膝にして、まだ湯にも入らないで、もんぺ袴のまゝで、うつくしい手古舞が犠牲に上つたやうな、あはれな姿で、しかも、世に唯一人の夫の親友と云ふのを、嬉しさうに視つゝ給仕についた細君に對すれば、よしや狐にしる、恚う化けた女の手なら、馬糞と雖も斷念められよう。――

然も、姑は、苅屋家の留守として、家に空閨を守る此の人を慰むるために、禮之助を悴として、周藏

が不意に歸省した事にして諸事萬端を待遇する。

—— 其處で、おや子のかための蓋だとさへ、且つ拭つて言ふのであつた。

禮之助は、遁げるも、引くも、出来なかつた。

然うかと言つて、細君には猪口一つさす事も、虚氣とは成らない。家憲とあつて、坐どころさへ煩かしい姑の所謂苧屋家である。許を受けないで、つけざしなどしようものなら、承塵に、長刀、槍はないが、納屋には鋤、鍬、鉞が見えた。

—— 思ひ懸けず、但、閨には枕が並んだのである。

長煙管の撞木とゝもに、黒塚どのが、壁の隅の煤を
 呼んで、消えたあとを、禮之助は、すつと寄つて、
 及腰に成つて、其の襖をびたりと壓へた。

何う云ふものであらう。

唯、横手の襖が細目に開いて、圓鬚の白い顔が覗
 いたのに、其の舉動を視られたので、ひよいと摺つ
 て、床の端へ戻るとて、素性は何うでも、女房と名
 のついたものゝある、いけ年を仕つた男が、二つ三
 つ續ざまに頭の天邊を搔くのに、不思議に、姉で
 もありさうな親みのある微笑を見せて、利佐子がす
 つと入つて、

「御免遊ばせ。」

と裙を通つて――其處に一對、新しさは金具
 の光る、此も嫁入道具に相違ない、箆笥の並んだ、
 眞中處へ、一寸膝を支いて肩ぐるみ頂で傾いて、も
 のを考へるやうにした。ト霜でも浴びたやうに萎々

とした、其の時は、もんぺを取つて居たが、下の抽斗をそつと開けて、一寸覗いて、細腰で居直つて、數へる如く、二つ三つ、何やら衣ものに、扱帯を添へて、ぱつと色に出たは長襦袢。袖で包んで、内端に立つて、

「御免遊ばせ。」

と又靜に出て行く時、聲が掠れて目を拭つた。禮之助も、ほろりとした。

何だ、何だ、――松本の料理屋の名代娘ともあらうものが、何を發心して、學者の、教育家の、校長の妻になんぞ成つたんだ。

浪花節。八木節とまでは我慢は出来ない。せめて地方まはりの壯士役者と駈落でもすれば可かつたものを。

周藏は、親孝行で、教育家だから、家と云ふ、苅屋家と云ふ家のために、留守をさせて別居をして居る――即ち老母の命のまゝに――

「ちよツ。」

家が何だ、家が呆れるぜと、茶枕を引搦むと、投遣りに胡坐に成つて、巻蓆の灰をボンと引拂つた。

其處へ、細君が寝巻姿で……せめてもの心

ゆかしであらう。艶に艶くまで、姑に秘して着換へたのである。

「あり難う．．．あり難う．．．結構です。ー結構ですが、奥さん、寢覺の床を見物どころではありません。．．．實は私は宿なしも同然なんです。ー同然ぢやありません。今夜恚うして、貴女のお傍に御厄介に成るが、お恥かしい次第ですけれども、打明けました處、貴女にと言つては餘りに厚かましい、御隠居にでもお頼み申して、幾千を拝借した上で、木賃へでも行かないと、．．．しますとね、寝ます處は辻堂か、縁の下ツきりなかつたのです。」

「御風流でございますこと。」
 と靜におとなびて、然う言つて、音を忍んで炭を繼ぐ。

禮之助は一呼吸、黙つて首垂れた。

正しく面を上げながら、

「奥さん．．．何も彼も恥を忘れてお話しま

せう。――聞えても構ひませんが、成るべく。」

と、まだに脱がない、羽織の袖を引しめつゝ、

「何うも忪うもないのです。……家内の奴

と、大喧嘩を遣附けましてな、家を飛出して參つた

んですよ。」

「……まあ、貴方。」

「壯に遣りましたぜ。」

と何か氣競つて、手柄らしく言つたあとを、寂し

い顔する、

「貴方、まあ。」

「散々です、然も私の方が非常なまけ軍の上、御覽の通り落人の身と成りました。」

「不斷、苧屋から窺つて居りますよ。おなかゞよ

過ぎて、あの癡話とやら、口説とやらを遊ばしたん

ではございませんの、――でも一寸、」

と面を合せた、目をそらして、

「癡話だの、口説だのツて、知つたかぶりな、粹

な方に失禮でございますわね。」

「恐入ります、恐入ります。」
禮之助は手で其の言を頂くばかり恐縮して、

「飛んでもない——私の方は雑兵の落武者で
すし、家内の方は何がなしに嚙々左衛門、と左衛門
と名のつく奴です。貴方の前でなんぞ噂にも成るの
ぢやありませんけれども、お話をしないでは分り
ません。とに角、義理は明白なんです。今度の事な
んぞ、………恚う申してはのろいやうですが、
義理は明白です。何一つとして、家内に悪い處、越
度、不都合、何にもありません。此方と言ふと、
からきし箸にも棒にも掛るんぢやないんです。苦々
しいを超越して、弱つた顔をして佛壇から覗いて居
る、先祖や、兩親に對しても、いざと言ふ、そんな
場合に、家内に向つて出て行けなぞとは言はれた義
理ぢやあないんですから。」

箸にも棒にも掛らないと言ふうちにも、夫婦喧嘩
をして、野郎の方が家を出したのは、私を以て元祖
とします。心得違な亭主は此を以て、模範として可
いくらゐが、せめてもの取柄でせうけれど、さあ、

勢よく駈出したはと言つて、實は居たゝまらなく成つて遁出したんですが、……あとの始末が着きません。恚う言ふ時、懷中へ潜込んで、膝を抱かうと言ふのは、親友とも、先輩とも、唯一人の兄哥だとも思ふ苅屋君なんですが、他の事はともあれ、今度の事に限つちやあ、苅屋君の居まはりへも寄附けない、理由が……こゝにあるのです。

藝妓の世話をして、夫婦にして遣つたと言つては、苅屋君は身分にかゝはる……」

一段と聲を低めて、

「第一、御隠居がです……どんなに不心腹だか、御立腹だか知れないから、それへは極内に成つて居ますが、貴女には差支へない、お話をしても決して差支へないと、私は信じて、お話をしますけれども。――家内と一緒に成りましたのは一切、苅屋君のお情なんです。何を措いても、のつぴき成りません、金子を用立つて下すつた。

勿論、堅くお返し申す約束には成つて居ますが、

月賦げつぷです。月賦げつぷ、然しかも、苅屋君かりやくんが自身じしんで帳面ちやうめんを拵こしらへ
て、墨すみをくろ／＼と上書うがきをしてくれたんです、
一一年ねん一一月くわつ一一日び一改之これをあらたむ。槓まさ
家繁昌記けはんじやつき・・・は何どうでせう。」
と言いひせまつて、聲こゑが曇くもつた。

「苅屋君かりやくんの其その厚情こうじやうに對たいしても・・・。」

禮之助は、言掛けて差俯向いた次手に、内端に巻
 蓑を吸つけたが、ふと火のついた尖を翳すやうに透
 して、

「あゝ、お旨い。」

と又吸つて、

「先刻は……更めてお禮を申上げます　――
 御馳走さま。」

「まあ。」

と、白い頸を横に見せて、一寸背きながら莞爾し
 た、寢衣の姿は初々しい。

「で、處で今のお話です。　――　こんな場合
 に……誰を措いても　――　一番に頼らねば
 成らない、御主人　――　苅屋君の傍あたりへも、
 氣が咎めて、極りも悪し、可恐くもあつて寄着けな
 いには、譯があるんです、（知つてる通り僕は酒
 も飲まん煙草も吸はない。）　ツて苅屋君が言ふん
 です　――　（たかノ、飯を食ひに牛肉屋へ上る

か、一寸した西洋料理へ入るべらゐなものだが、其だつて一人ぢやあ。よう行かん、と然う言ふんです。が、眞個で。……つい、酒を飲まんのだから、そんな處へ出入るのは面倒なんでせう。其の癖つきあひの可い男で

「何うも貴女の前で、大將の噂をするのに、饒舌り方が時々敬意を缺くやうですが御免下さい

「否、否、結構でございますわ。」

と膝を合せて聞惚れる。……道理だ、こんな山家に、三月も四月も空しき閨を守るのである。唯其の人の一言さへ、どんなに身うちに響くだらう。

あゝ、苅屋君、と言ふたびに、襟から脇明へ衣が揺れる。

「聲も一層しめやかに、

「他が銚子を三本倒して、濟まない事ですけど、可い加減とろ／＼と成るまで、悠然として、葱でも白瀧でもつゝいて附合つて居てくれます。」

「御飯がほんたうに、ゆつくりなんでございますよ。御一所に何しますのに、御迷惑を掛けますこと。」

「迷惑……迷惑なんて飛んでもない、とお世辭を言ふべき場合ですが、何うして、叱言を言はれますよ。眞面目にね、可恐い顔をして、「飯は悠暢り遣らんと毒だよ。――噛んで、噛んで。」

――此處等が又兄哥らしくつて嬉しい男なんです。私と言ふものが、何の能もない癖に、可恐く早飯なんです。――飲んでる時は可いんですが、景氣なしで、朝飯を遣る時などは、お香々をばくり。――「噛んで……噛んで」

――ごつんと咽喉へ支へると言つた始末で。」

「ほ。」「と忍び音ながら笑が出た。」

「目を白黒して一口茄子を。」「唯、行詰つたやうに一寸支へた。」

濃い紫の煙が亂れる。葎の灰を、火鉢の縁に忙しく

刻んで、

「……聊か大袈裟です。……いや、串戯はよして、苅屋君が、既に、實は大早飯食だつたんださうですよー 中學校……中學校は、私は一所ぢやあなかつたんですが、其何處かへ、秋季の遠足。……然う箱根だと言ひました。乙女峠へ腰を掛けて、ずらりと並んで、富士も蘆の湖も眺めながら、竹の皮づゝみを開けて、大な握飯の晝辨當。ー 此奴を腹は空いてるし、二口ぐらゐに、がく／＼遣るのを、並んで皆とをんなじに兵糧を使つて居た、有名な學者の校長が見て、「飯はゆつくり食んなさい、ー 噛んで、噛んでー」實に有難く深切に聞えたさうで、此が肝に銘じて、それから熟く咀嚼をするやうに成つた……身體の丈夫なのは全く其のお庇だつて歴史つきの御意見。」

「あの、私も叱られますんですよ、御飯が早いもんですから。」

「貴女も……此は難有い。」

「ゆつくりおあがりと申^{まを}しては、あの……」

「噛^かんで……噛^かんで——」

「まあ、肖^{そく}如^{くり}ですわ、——お聲^{こゑ}まで、」

「いや、此^{これ}は何^どうも……」

禮之助はやく寛いだ。――

其處で、……苅屋君が、屹と成つて私に言つたと言ふ、其の事ですが、（僕は、それ酒煙草の味も知らん。意氣だ不意氣だ、そんな事の境も分らん。）とまだ其の頃は男世帯の、私の内で、牛肉鍋をつゝきながら、私に頭を搔かせて置いて、（何うも、あの意氣な婦と、君との間は、あのまゝにはして置けない。――是非取極め給へ、一所にさせよう、いや藝妓人だから何うの斯うのと、今更言つたつて仕方がない。僕はあの婦には見どころがある。）と、苅屋君の言つたのには、一寸した譯があつたんです。

此の以前に――苅屋君が私を訪ねて来てくれた時、……春の半ばで、うつとりするやうな月の朧の夜でした。彌生町の露地の門に入る。――私の家は奥の方で、入つてから二三軒、他の家だの。庭だのがあるんですが、其處へ入つて來ると前へ立つて行くものがあつたんですな。」

「貴女の奥さまだつたんでせう。」

「えゝ。」

「存じて居ますわ。」

「何うしてゝす？」

「主人がおうはさをしましたもの、

貴方の祖母さんの手を曳いて、湯からお歸んなす

つた處だつたんですつてね。・・・竹垣の中に、

連翹だの、山吹だのが、ぽつと咲いて居て、奥の井

戸端には、櫻にしてはまだ早うございましたさうで、

紅梅が散りかゝつて居ます處へ、其のお話の朧夜ゆ

ゑ、しつとりと、濡れて霞んだやうな御様子で、投

島田のいゝお髪で、縞のお召で、若い方が。

お祖母さまは、かはいらしい、脊の小さい方でし

たつてね、杖をおつきなすつた、此方の方の手をお

曳きなすつてー失禮ですけどあの其の意氣な

藝妓衆が、お二人分の手拭と石鹸は御自分のをお持

ちなすつたんでせう。・・・花にも霞にも浸み

るやうに、芬といゝ薫がしましたつて・・・

（うしろを歩いたばかりだが、まだ、こんな香が

する。あゝ、いゝ香だ。）　　――　と苳屋が自分の手を、袖を………」

と利佐子が優しく、其の手を唇に當て、袖を視て、

「貴方がお聞きなさいましたら、嘸ぞ可笑うございませう。（おい、移り香と言ふのは、こんな事かな。）……然う言つてあの人の事ですから、また手を袖を。」

「あゝ、……うゝ。ぐちや／＼、」

と隣の納戸で、姑の舌の音。

「……お姑様……お手水でございま

すか　――　姑様。」

が、其切りで返事なし。

爐端と思ふに、駈廻る鼠の音。此の猫魔があるものを、木曾の鼠は豪傑である。

「よく、お寝つて。」

と利佐子は鼻筋を白く一寸小耳を澄したが、唯横

に膝をずらして立つと、はらりと、紅入襦袢がこぼれた。

屏風の蔭へ隠れると、今度は、手に、ものを、何か捧げて出た様子が初菊の兜に非ずで、山姫が狼の首、いや、狐の面を袖にしたと美しく、一寸凄くも見えたのは、小さな盆一杯に掛けた布巾で、こんもりと高い處は銚子が下に成つたのである。

禮之助は、吃驚したやうに、

「おゝ、此は何うも。」

其の思はざる高聲の、密と下を潜らして、「何にもございませぬですよ。それに些ともめしあがりませんし……此だけ……あの、先刻お口に合ましたやうですから。」

味噌漬の香のもの……其のくらみな事は心得た。となりへ音のきこえぬやうに、細かく柔かにはやしてある。

お酌も待たず、會釋もなく、ぐいと取つた銚子の

めかたで、
「いや、
殆ど尻餅をつくばかり。
活返りましたなあ。」

「貴方、まだ、お燗が。」

「さあ、……其のお燗を頂くんですが、一寸お待ち下さいよ。此の鐵瓶へ入れますと、翌日屹と匂ひます。」

と思はず、となりの間へ目づかひして、

「其こそ、飛んだうつり香です。——御迷惑

ついでだ。此が可い、」

と火を押つけて灰を立てた。

「隱亡燗。」

とうつかり言つたが、

「下徒は此に限りませす。」

「あれ、そんな。」

と利佐子が、懷紙をきちんと疊んで、其の銚子の底へ灰に敷く。……

「此はまた本寸法、お花見酒に成りました。……

……が、きなツ臭いと大變です。——其こそ

眞個に飛んだうつり香。……」

と言ひかけて

「……最も嬢左衛門の移り香の場面ですか

ら。
」

「まあ、お聞きなさいましな。」

と杉箸を、客の前へ揃へながら、

「苅屋は、かう見て、貴方のお祖母様で在らつしやる事は、すぐ分りましたんですけれども、お連さまの御様子が御様子だし、それだし、まだ一度もお目に掛つた事のない方ですから、間が悪くつて少し、後れて、おあとへ附いたんでございますつて——玄關の格子戸をお入んなさる時、お祖母さまが、しつかりとお掴んなすつて在らつた、藝妓衆の手を取つて、二度ばかりお頂きなすつて、（姉さん、難有う、難有う。．．．）とお言ひなさつた、其のお背を抱くやうにして、お入れなさいますと、御一所か、と思ふと、一寸、あとへお残んなさいましたんですつてね

お祖母さまが、（歸るのかの、歸らんと家に居さつしやいよ。の、居てくれさつしやいよ。）とお言ひなされると、しばらくして、甘へるやうに、お祖母さんの肩へ、白い横顔をおつけなすつて、ふいと横へ曲つて、お臺所口へおいでなさつたんでござ

いますつて　ー

其の頃の御境遇ですから、御緩りともおできな
りはしまい。とに角お寄んなすつたんだらうが、そ
れにしても、一所にお玄關からはお入んなさら
ず・・・・・苅屋が申しますには、あの・・・・
お祖母さまはお氣がつかなかつたやうだけれど、藝
妓衆の方は、同じ露地を誰か知ら、背後に人の来た
事を御承知のやうだから、それで遠慮をなさつたん
だらう。

「すぐにお祖母さまに伺つたが、其の晩は、貴方は
お留守だつたさうでございますね。」

「
禮之助は黙つて俯向いた。」

「まあ／＼とおつしやるのを、御遠慮も申上げて、
直ぐに歸りましたと言ふんですが、（私は涙が出
た、あの手を引いた所を見て、）・・・・・然う言
つて、・・・・・移香だと言ふ袖の上へ、ほろりと

涙をこぼすんですよ。」

「實に濟まない、濟みません。」

とがつくりするまで又俯向いたが、

「……こんなしだらをお目に掛けては、全
く貴女にも申譯がないのです。――いえ、實の所、
それなんです。苧屋君が、……其處で私に言
つたのも、それなんです。（傍で見ると呆れ返る、
苦々しくて、話に成らん、――君には實はあい
そも盡きたが、對手の婦人の、としよりの介抱をす
る、あれを見ては黙つて居られん、夫婦にしよう、
取極め給へ。）と恚う苧屋君が言ふんです。」

何、奥さん、むかしからも言ふ事です。親の手水
に手を曳けば孝行の名が賣れると。……冷淡
で、高慢ちきで、音程は憎いがまつたくですよ。」

と浮り言つて、はつとした。

こゝに今しがたの様子では、利佐子は時々、手水
に起きる姑の世話さへするやうであつたから

其處で、忘れたやうに、兩の掌で銚子の膚を抱いたのであつた。

「お爛は？ 貴方。」

「唯今。すぐに、」

と、慌てたものかな。反對に挨拶しながら、

「ばあさんの手を曳くのが孝行なら、客の便所へついて立つ藝妓は皆貞女です。しかし家内は僥倖でした。いゝ人に見られました。むかし、徳川の何代かゞ道中をするのを見ると言つて、八十幾歳の婆さんを負つて、麥の中から街道へひよこりと出たばかりで、水のみ百姓が田地を貰つたと言ふ果報ものゝ話があります。家内に對する苅屋君の恩徳は征夷將軍以上のものです。」

で、其の時に、「いづれ、主人、抱ぬし、就ては、借金とか義理とか、苦界に居る身體の償の金子が要るだらう、其を僕が都合する、引受けた。」
 と言はれたので、女の身請などゝ言ふ事は、芝居か

狂言きやうげんでなくつちやあ出来るできわけのものものでないないと、断あき
念らめて居あました、素寒貧すかんびんな私わたしは、夢ゆめも夢ゆめで、茄子なすび

お、お酌しやくでは恐入おそれいります。」「

煙管きせるも酒さけも鵜吞うのみにして、

「其その……茄子なすびが鷹たかに代かはつて、富士ふじの山やまを
飛越とびこす夢ゆめを見るみのかと思おもつた程ほどです。まさか、いき
なり、苧屋君かりやくんが抱着だきつきもしますまいけれど、何なんと言い
つたか覺おぼえて居あません。（しかし楨まき……）
と苧屋君かりやくんが言いつたんです。（あの婦ひとと夫婦ふうふに成な
つた以上いじやうは、決けつして不品行ふひんかうはしまいな、僕ぼくに對たいして
またその婦ひとに對たいして、不品行ふひんかう……浮氣うはきとか言い
ふ事は決けつしてしまいな。）と楔くさびを打うつて、恚かう、
屹きつと念ねんを入いれたんです。

奥おくさん　　――

……此こ。此これですから今度こんどの事ことぢやあ、何どうし
て苧屋君かりやくんの身みのまはり、五町四方ちやうほうは寄よれはしません。

弱よわりました　　――あゝ、此これは……」

と言いひながら二三杯ばい立たて續つづけた。

「就て、貴女にお願ひがあります。――折入つた御相談もあるのですが、――頂戴します。――圖々しいやうですけれど、泊りは知れて居ます、……此の上追出されては行く處もないのですから、我ながら度胸を据ゑて、――せめても、貴女に申譯に、苅屋君の男振を話ませう。御主人の噂をさして下さい。聞いて下さい。」

「は、何うぞ。」
「と思はず、膝も近いまで――桃太郎でも聞かやうな、嬉しさうなものごしに、猪口の口をためらつて、ふと其のへりを齒に銜へ、」

「いまの續きです。で、（何しろ、金子はいくら有る。）と箸をおいて、ふつくりと腕を組んで、卓子臺の向うへ乗出された時は、ドキリとしました。何ですかね、こゝが一生の生命の瀬戸際かと思ふほど胸がドキノとして急には口もきかれなかつたんですよ。（極める處はきつぱりと極めなきやあ不可ん。僕に詰らん遠慮をして、金高を内端に見積つて、間に合はせな事をして、あとに借金が残るやうでは

面白くない。雖然、然う云ふものゝ僕。――も神
通があつて天から降らせる金子ではない、學校の維
持費なり、何なりに豫算で預つて居る金子の中から、
融通をするのだから、――尤も差支へのない限
りだ、それに心配はないが、餘り額が多くては、男
が一旦口に出した恥を忍んで引退らなけりや成らん
けれども、何うだい、たかは。――と言ふ其のうへ
にも打開けて相談をしてくれます。

ひかせるの、世話をするのと言ふ方角はないので
したが、愚癡なり、内證話なりに、大概借金のため
は知れて居ましたから、おほよそを言ふと、其のく
らゐなら都合が出来よう。尚ほ取極めをした額だけ、
手紙で言つて寄越し次第、すぐにも調べようと言ふ
ので其の晩は別れました。

――何うも貴女に、いまお話をするよりか、お
目に掛けたかつたのは、金子を渡してくれた時の、
苅屋君の態度と風采です。――

「―― そんな時の事を讚めるのは可笑いやう
ですけれど、もう、貴女だから構はない・・・
として置きます。―― 家内と内相談をしまして
ね、直ちに一寸學校へ飛んで行くと、生憎、教員會
議がある、今日の間には會ひかねるから明日何時に、
銀行まで、と言ふ都合で、其の翌日、また飛ぶが如
くで、銀行へ行つたんですが、場所は本郷通りで學
校から近くもありました。けれども、苅屋君は最
来て居て、黒の背廣の膝を伸して、床几に掛けて、
兩方の手を衣兜へ入れて、背後むきに成つて、天井
をゆつくり見ながら、表通りの騒々しい電車なんか
知らん顔で、超然として居ました。

丁度晝飯のやすみの時間で銀行内も静です。

駈込んだ聲音を聞くと、振り向いて莞爾々として、い
きなり「さあ。」と言つて、もう引出してあつ
た紙幣束を衣兜から掴んで渡して、それが、優しい
小父さんが、小兒に玩弄品をくれるやうな顔色で

― 別に……又何枚か 「晩に祝杯を擧
げ給へ ― 何だつけか、それ、お取膳とか言ふ
奴で……いづれ緩り……学校の時間が
ある。 ― 榎家、萬歳、萬歳 ―
と帽子を両手でポンとはめて、すた／＼と行つたん
ですがね。

うらゝかな春日をうけて全身が光つて見えた ―
金剛石で彫刻をしたやうです。

藝妓をひかせてお取膳、いろ男の氣だらうか、土
手に咲いた蒲公英で、此方は吹くと飛びさうです。

面がほてるほど嬉しい中にも何とも言へず心細く
つて、四邊が寂しうございました。

いや、實にお見せ申したかつた、更めて言ひます
が苅屋君の其の風采を。……尤も當日、御歸
宅次第、貴女は御覽に成つたんですか。―

利佐子は黙つてはなじろむ。

「ト確、其の時はまだ東京に御一所でしたな。」
一段低聲で、

「御老母も。」

「え、あの前の年の暮ほどに縁附きましたばかりですから。」

「然う、ずつと年暮に、精養軒で御披露で、
貴女の高島田、花笄、お振袖を拝見しました。」

「いや、お話をするにつけても思ひ出します。苅屋君の家ぢやあ、姪と言ふのが居なくなる、新しい女中が来る、と言ふうちに、結婚の話を開く。祝すべし、祝へ、と景氣ばかりが大きくなって、眞個の一ツ葉、松の葉で」間の手に味噌漬の香のもの。」

「御祝儀に罷出ました時は、苅屋君が留守で――
ですから遁出して・・・辻へ曲る處で、此奴がスタコラだと洋杖を廻してたほど餘裕もありましたし、精養軒で赫耀として銀燭映紅華てつた時は、偏に新夫新夫人、お二方を祝するほかはなかつたのですが、あけて、新年に成つて、慇懃不沙汰で、ま

だお宅へ御年頭にも伺はないうちに・・・恥を
申さんと分りません。厄年ではなかつたのですが、
暮のうちから八方塞り、茶屋小屋は暗剣殺です。蒲
團も火鉢も要らないわ、大入場に潜込むんだつて木
戸銭だけなければ成らずで、不義理ばかりで顔向け
も成らない友達の處へ金策に廻つて、何處でも工面
のつかないで日が暮れました、其の擧句に、丁度一
人、

貴女のお宅へ、しかも其の日、年始に行つた、と
言ふ一人の友達が、（苧屋君の家は素ばらしいぞ、
金屏風が立つて、根こぎにしたやうな大な梅が活か
つて居た。）と話したゞけで、貸しません。・・・
・・・おなじく工面が悪いのですから、酒はなし腹
はすきます。とぼ／＼と迷つて出て、もう一町で不
忍の方へ明る成る、暗い横町の隅の方で、へだつて
黒塀に立ちました時、其の話にきゝました、お宅の
金屏風がきらりと目の前に光つたんです。自分のう
ちが思はれました。――暮から、障子の穴も張
らない、湯ずきな祖母に、まだ初湯さへ使はせない。
――自分は、と見ると、紋は汚れる、下着は典

す、裾は破れる、足袋は褪げる、あと齒は減る、鼻緒は緩む、溝板は反つて居る、のめれば、葱の流汁へ身投をして死ぬばかり。

苧屋君の金屏風、振袖の新夫人。

こんな時は抱合つて、肩をくはへて泣かうと言ふ、いやそんな芝居には木戸があります。

何と血迷つたか、もう一軒、學校でも遠くに居て、別に口を利いた事もない友達の新學士を、しかも千駄木の森の中へ訪ねました。

玄關が寂然として、奥で歌留多を取つて居る。百人一首を半分ばかり、．．．もう立つてるのも苦いほどで、生垣について踞んで聞く．．．お宅の花は梅だと言ふのに、其處の垣根は柵です。地獄、極樂の境．．．漸と、一句切ついて、哄と聲の湧く處で、おづ／＼と取次を頼んで、其の新學士を呼出しますとね、脊の高い男だから、上框から手をのばして土間へ宙乗をするやうに、格子を覗いて、暗い方へすする私を見て、やあ、と吃驚した顔

をする。 (月給は暮に使つてしまつたんです、弱
つたなあ。) が眞實で、貸されたよりは、尚は恐
縮。(待ち給へ、……歌留多を取つて行き
ませんか、まあ、上つて。) 此方がある、いろに逢
ひたいんだ、歌留多を取つて居られるか。ふてたや
うに引退ると、わつと又奥の賑かさ。キヤツノ、
オホノ……と女の高声、鹽煎餅の音楽入で、
蜜柑が踊を踊るやうです。え、世の中は、貴夫人
と令嬢で面を打つてらと、仇も報もないものを、我
がひがみから、私は……貴女。」

「あ、姑様、お手水ですか。」

「利佐え……」

其の利佐子は立つた。

慌て、禮之助がつかみさがしに布巾を取つて、
銚子ぐるみ盆を蔽ふと、戻橋には鬼が出る……
狼でなく、狐でなく、今度は猫魔の顔に成つた。
利佐子が、ぞつと身に沁むやうな、そして怯えた

聲をして、

「あれ、雪に成りましたよ。」

空は曇つて陰気だけれど、町は露地も花やかで、
 山王の森にまだ烏も啼かない、やつ下りと言ふ時分、
 赤坂溜池の藝妓家柵見家の軒へ、涼傘も持たず、ば
 ら／＼と散る柳とゝもに、寂しく音信れたのは梢で
 ある。

唯いで内の様子を視るやうに覗くと、土間の御
 神燈に、婦あるじ、家の姉さん、升子と言ふ名がし
 るしてある。

傍へ並べて、三津代とかいた、上へ、鼻紙の切端
 を、いけぞんざいに附着けたので、其の字が透けて
 見えるのであるが、はりめが少々、ペロりと口を開
 けて居るので、守宮を呑んで居るやうで、何となく、
 其の三津代の身さへ酷たらしく想はれる・・・

四谷の古道具屋、桑小の姪なる其のお光が、此の
 抱ぬしの家から行つたり來たりは、既に前段に於て
 御承知の通り、身を堅めるのに派手なひき祝などを

する質たちのでない。親許おやもと身みうけとか言いふ類るゐのであるから、要えうするに泣なきを入れるので、抱かへぬしの方ほうで嬉うれしがる筈はずは、まあ、なささうな處ところへ……貼はり紙がみ。

それに、ものゝ經緯いきざつが、最もう身みも肩かたも拭ぬけて了しまつたあとではない。お光みつはまだ此この家に籍せきもあれば、身からだ體たもある。あるのに御神燈ごしんとへ恚かうした仕向しむけは、何なんぞ、其その折合話せりあひばなしの行ゆきがゝりに、升子ますこと言いふ抱主かへぬしが、自分じぶんか、或あるは其その意いを受うけた奉公人ほうこうにんかゞ、三澤みつ代よへ面つらあてに、「えゝ、恚かうすりや」と癩癩かんしゃやくまぎれに違ちがひないのは、ペつと唾つばでゝも着つけたらう、ぺら／＼と名なを嘗なめて、紙かみの動うごくにつけて察さつしられ

升子ますこの氣象きしやうも略分ぼつわかつた。

「ー ために格子かうしから覗のぞいて見みつゝ、梢しすゑのお柳りゅうは、ふと袖そでを合あせた、袖口そでぐちの手ての甲かぶを片手かたてで輕かるく壓おさへてためらつたやうである。

が、やがて思おもひ返かへしたか、小腰こししをしとやかに、靜しづかに開あけて三和土たゝきに立たつた。

「御免下さい。」

「誰方？」

用心も躰も可い。……すぐに顔を出したの
は内箱と言った、しかし土氣の失せない、三十ぐら
ゐの横肥りに肥った女中で、
のそりと立ちながら、

「へい。」

と其處へ一つ、蒟蒻玉のやうに、返事を掴んで投
着けて、

「どちら様。」

「姉さんはお宅でございますか。」

「孰方様ですか。」

「は、あの、私は四谷に居ります、楨と申します

もの……」

と言掛けて、一寸口籠った。御神燈の影は
さゝぬが、瞼が幽に翳つたやうな、心の裡が思はれ
る……

「……ものゝ、家内でございますが、お家の
姉さんはおいででございますか。」

女中が、些と故とらしくはあつたが、妙な顔して、
「誰方ですか、姉さんと言つて。」 「此方様

の。

「お嬢さんですか。」

「升子さん。」

「え、お嬢さんはお出掛ですよ。」

お柳に漸と分つた。此家では、あるじの升子の事を
お嬢さんと言ふのである。

「然やうでございますか、——では、三津代

さんは？……」

「居ます。」

とぶつきら棒に言つて、立體のまゝでぐつと下目
に見た。

「一寸、然うおつしやつて下さいませんか、——
四谷の槓ですつて、然うお言ひなすつて。」

「何う言ふ御用事？」

「一寸お目にかゝりたいんですが。」

「ですから、何う言ふ御用事（間） てんです

よ。御用向によりまして。」

梢のお柳が音信れた用と言ふのは――未練らしいが、紫の煙管の事。――あれは、昨夜だ

――桑小の住居で、やがて三津代が、眞に姉さんには申譯がない、と言つて打明けた處によると、……實は其の煙管は、唇に當てると、色が齒に沁むまで我がものにしたかつたので、叔父が店の古道具だから、と、たかを括つて、赤坂の榎見家へ持つて歸つたのださうである。

それが、姉さん、否、お嬢さんの升子の目に入る
と、妙に乗懸つて、欲い、譲つてくれまいかと言ふ。
「今朝目の覺める間に、富士の山の夢を視た。

それに、此の茄子の煙管、こんな縁起のいゝ事はな
い」と、さへ言ふ。……眞個か虚偽かそれ

は知らない、年紀はまだ若いし、升子と言ふのは、
—— 本名がお琴で、小柄で細りした、評判の美人で、然も旦那が男爵の富豪であるから、界隈の茶屋小屋で、かげで绰名をつけるにしても、手近な處で、姫ます、小ます、とでも洒落べきものを。——
奈何せん。擧つて、指して（代官升）と稱ふる。高く留つて、ツンと澄して、横柄なのに、かねて、虐げるばかり計込むと言ふ意味で、聞えた溜屋の、儉約家であるから、掘出しものと睨んだので、富士の夢などは何うだか知れない。

が、たつて望む。

三澤代の方では、それほど貯蓄屋のお嬢さんに、
いくらか損をさせても、身抜けのしたい談合の弱氣の最中、しかも我身に筋も、由緒も、因縁も何にもない。……其の時は實際なかつた——がらくた道具で、屑屋の賣もの。譬喩は聊か過激だけれど、お葬式の洲濱で御機嫌が取結べるやうな、もつつけの僥倖。さりながら、其處はぬからぬ胸算ゆゑ、叔父が、桑名で、桑名屋と言つて、桑名の殿様の春

雨時分、桑名の御守殿から、むかし拝領をしたやうな勿體をつけた上で――「お譲りどころか差上げます。縁起ものですから、故と……」

「坊ちやまのお手から、……はい、ママさんに。――」

（註。升子には男爵の兒があつて育てゝ居る。）
と言つた次第。

「ですが、ですが、否、姉さん、」と其の懺悔をしたあとで、三澤代は其時、梢の胸に嚙りつくやうにして、涙をほろ／＼と溢しながら、「あなたが構はない、もういゝから構はないとお言ひだつても、屹と煙管を取返して、お返し申さないでは置きませんから」――梢はそれを、さすがに、「もう、要らないから。」とは言はなかつた。出来る事なら、「お光さん、何うぞ、一生の恩を被ますから。」で、杯を納めたが。横町を歸る叔父さんの、湯上りで釜振だと言ふのに似ない、下駄の音の寂しかった事。

却説、此の日、まだ正午前であつた。槓の臺所口へ、ぼんやりと音信れたものがある。内には梢が、
 ー 茶の室へ坐つて、鐵瓶を撫で、視ても、立つて出窓から覗いても、座敷の片隅へ退つて、縫かけの襦袢の袖を撫で、見ても、箆笥の底を覗いても、又玄關へ出て視ても、何處にも禮之助は居ないから、もう一度茶の室へ坐つて、座敷へ行つて・・・
 と我ながら、立つたり居たり、うろ／＼して、人の見る目も恥かしいので、さしてもない買ものに女中を出して遣つて、其のあとで、針箱のまた傍へ来て、針を持つ處を、もの差に取違へて、抱くやうに、取つた男の襦袢、いけ年を仕つて、うつかり横撫でを遣つて汚すから、着換への分に、と、數寄屋町に出て居た頃の、袱紗だか、もつと以前の頭巾だか、自分の紋の蔦が一枚、こぼれたやうに出て居るのを、京染に遣つて濃く染めたが、紋が矢張り臙に視える。それを、いつか苦に病んで、氣を揉んで、眦が切れて、頭痛のするまで、瞳で撓めて、奥口に工夫したのを・・・いま手に取つて、もの差を杖に熟と

視て、思はずキヤノと取詰める、切ない胸を、縁に開くと、あかり取の小庭がどんより曇つて、一人寝の衾のやうな寒い風。縁日で買った秋草の、尾草ばかりが煙のやうに枯残る。……其の庭も、誰のために綺麗に掃いて、手水鉢をかへた水の、柄杓を濡して、雫する。……はかないほどの水の音。

ハツと泣いて、颯と睨を染めた處へ、――其のいまの臺所の人氣勢。ごめんとも木綿とも古綿とも、ぼやけた聲は、屑屋が来たか、毎日来る突拍子な聾八百屋かと出て視ると、桑名屋小兵衛、桑小さん――

「おや、小父さん。」

茶の室へ通すと、ほう／＼と勢のない呼吸を向うへつきつゝ、凍んだやうな、両手を鼻の下でふは／＼と揉みながら、唯入つたが、何にとつちたか挨拶もせぬうちに、こぞみ腰にさした曲尺を、扱き／＼、ひよこ／＼と火鉢を向うへ突切つて、中腰に成つて、

揉手を合掌にをがみ／＼、佛壇の前へのほりと立ち、
「寸法は何うござりませうか。秋濕氣から以來、
お扉のあけたてにくるひも出はいたしませぬか。」
「否、結構よ。」と云ふうちにも、ぴたりと天
地へあてるのだけれど、此だけの職人で居て、威勢
の悪さ。．．．めくらが、手捜をするやうで。
今度は尺をだらしなく懷中へ突込むと、其の懷中か
ら、ぐたりとした紙袋を取りだして、「御失禮では
ござりまするが。」と其處へ供へたのが痰切飴。
で、「おう／＼お見事にお飾つけを。」と言ふ、
ー 過去帳の、さて、どの志にも當らな
い、．．．今日は命日ではないのだが、禮之助
が、茄子形の煙管のために、梢の横頬をぐわんと撲
つて、眞赤になつて、突伏して、「お佛壇を何う
ぞ。」と言つて駈出して行つた廉がある。．．．
．．．お料の品も整と揃つて、花立の花も新しく、コ
スモスもしをらしく、濃い浦島草、雁來紅も鮮麗に、
庭はかれても、こゝは錦。「おう／＼奥様、御丹
精。」と、鼻を詰らせて言つたと思ふと、冴えた
音で、チーン。」

なも／＼なも／＼と、口も頬邊も、此の時木魚の如く膨らまして、．．．小兵衛さん。あとびつしやりに成つて、棚の下へ潜つて、壁の隅へ附着いて、「さて、奥様、何とも早や。」とつんのめつた拳の上へ皺額を揉込んで、もう一息退りながら、

お光は勘當いたしますわの、此、此、此を御覽じ下さりまして。」と、井から引出した手紙が一通、朝の間に赤坂から、三津代が使にもたして寄越したと言ふのは、――

（叔父さん、助けて下さいまし．．．）
．．．榎見家のお嬢さんは、昨夜中絶つたが、煙管は返さない、と言ふのである。

然るに、立はだかつた女中の様子が、南瓜か、薩摩芋でも言ふならば知らぬ事、唐突に、煙管だ、茄子だなど、言はうものなら、八百屋ぢやあござんしない、と向腹を立てさうであるから、其處で、もう一度、

「お目にかゝれば分りますんですが。」
と梢が言つた。

「ですからね、お取次をしますからね、御用向をおつしやいよ。」

と向面に成つたかと思ふと、其の拍子に、あと一つ、框の板を一段下りると、慌てたやうに、肥い腰が、夜着を被せて箕を倒にした形に、突のめつて、一つ裏返つて居た小さな編上靴だの、まだ一足駒下駄をちよこ／＼と、搔寄せて、逆上せた顔を上げて、
「此方へ、此方へ、……此方へさ、あなた。」

とづんぐりとした手を目の前へ振つた。が、ハテ

ナ、急に土下座するばかり、更まつた態度は、以前
同朋町あたりで 工面のいゝ時、いくらかはずんだ
のを思ひ出しでもした女中か、と思ふと、（此方
へ、此方へ）と、言ふのが、此方へ上れと言ふの
でなくて、手を振る方へ、（片寄れ、退け）と、
推退けるやうでもあつて、一寸まごつく。

「・・・退いて下さいよ、傍へ。」
思はず下駄箱の方へ、――ハツと梢が身を寄
せる。と、最う其處へ――

孔雀がスツと下りたやうに、燦と、きらびやかに
立つた、淑女がある。

一間、奥から、ばた／＼と一人、また駈けて出た。
仕込か、下地子と言ふ年ごろだが、家風と見えて、
庇髪で、ボンとお太鼓を高く背負つた、顔も襟も眞
白なのが、違棚などに掛けて居たらう、手に持つた
艶布巾を、帯へ一寸挟むとゝもに、框へ横に手をつ
いて、

「お歸り遊ばせ。」

「お嬢様、お歸り遊ばせ。」

扱は柵見家の、このお嬢さん、升子が餘所から歸つたので、――分つた――其のお歸りの通り道とて、客は下駄箱の方へ片附けられたものである。

家風と見える、家風と見える。

升子は、跪いた二人と、横に立つたお柳とを、伶俐さうな七口を結んで、大きな目でじろりと視た。

此の間に、恐しく、半纏も股引も氣取つた車夫が、いま送込んだ、――入口は横の角家だから、――ほんの露地を三歩ばかり、別に買ものもなかつたらしい、――丁寧にお叩頭をして、格子戸を引く處を、客が居るから、汗を拭いて、黙然でスツと出て行く。

柳にサラ／＼と風が添つた。

二階から階子壇、トン／＼と音して、引掛帯の横顔で、障子から覗いたのはお光の三津代。唇

へ墨をなめたから陰気な顔で、

「あら、姉さん。」

と言ふと、トンと坐つた。――場所と言ひ、時刻である。……湯上りの石鹸の香を芬と漾はせて、膚脱の身じまひで、パツと化粧つて、紅を含んで、乳をくびつた伊達巻でも顯れようと言ふ處を、例の胸算が、別しては此頃の仕誼だから、二階の部屋に堅く成つて、主人の臺帳と自分の手控。呉服屋、小間もの屋の通帳、筋向の俵帳場から、四角の煙草屋、おごりつこの蕎麥屋の掛まで、反故にした起請文が午王の烏に成つて、取巻いたやうな裡に閉籠つて、一心不亂に算盤を弾いて居たので。

――お柳のおとづれやうが、もの靜だつたから、聲も氣勢も、それは何にも聞きつけなかつた。小間使のばた／＼に誘はれて、あゝ、お歸り、と出迎へに出た處――

「誰方？」

と升子は、つめたいほどの澄んだ目で、其の三津代を屹と視た。

三津代はうるたへたやうに、ト息を吐いて、
「は、私が前に、大變にお世話に成りました。――
いつもお話をします、あの下谷の姉さん……」
「
あれ、悪い事を言ふと、お柳は思つた。」

「ふん。」
と小升が冷に頷いた。――其の時、金剛石で
も嵌つたらうと思ふ、輝く柄の、薄色の涼傘をトン
と離れた。其を、やゝツと氣合がゝりさうに女中が
うけて、力んだ機に、膝を開けて、手渡しに小間使
の両手に授ける。

土間は狭いのである。お柳は肩を窄めて慇懃に會
釋をして、

「お初に……失禮をいたします。……
四谷に居ります。槓と申しますものでございますが、

あの

「三津代さんに、御用事？」

「いゝえ、失禮ですけれど、濟みませんが、

……お嬢さんで在らつしやいますか、……

貴女に、一寸……」

「私に。」

と言った切、さきへ立たせた小間使のあとから、
框を蹴るやうに衝と上つた、香水の薫滴る如し。

「一寸……」

とばかりで、お柳の前を、ぽつかりとした草履が
宙を行くと、がた／＼と下駄箱へ……其の手
でごし／＼と鬢を搔き／＼、女中も引込む。

三津代の膝に置いた手が、落ちるやうに疊につく
時、お柳の袖が犇としまつた。

奥で爽かな衣摺れの音がする。

唯、三津代が寂しい顔を上げて、障子を縦に拜む
のに、ふと目を合せて、何にも言はず、二人は其の
まゝ俯向いた。

「三澤代さん……」

「」

「お通とほし申まをしたら可いいぢやあないの。何なにをしてるのよ、をかあしな。」

「あゝ、姉ねえさん何どうぞ。」

お柳りゅうは目めませで頭かぶりを掉ふつた。「あゝ、何どうぞ、

奥おくさん。」

お柳りゅうはきつぱりと、

「御免ごめんなさいまし。」

「もし／＼。」

ほ／＼と癩かんのまじつた升子ますこの笑聲わらひこゑが、襖ふすまは開あいて居ゐるが、奥深おくふかく、向むかうから聞きえて、

「貴女あなたが、そんな事ことをなさいませんでも、・・・
 ・三澤代みつよさん、宅たくには奉公人ほうこうにんが居をりますから、其それがいたしますから。・・・唯今たゞいま、お客様きやくさまにお褌しつねをさしあげますから。」

三津代みつよは、トお柳りゅうの前まへへ取とつて、火鉢ひばちをさしよせて居ゐたが、火ひも入いれない前さきに、火箸ひばしで灰はひへ、（ヒステリー）とかいて見みせて、寄添よりそつて居ゐたのが、ついと退のいた。

「其それとも、お手加減てかげんで、貴女あなたがなさらなければ、其その方かたのお氣きに入いらなアいの。・・・一寸ちよつと、内うちの奉公人ほうこうにんぢやあお氣味きみが悪わるい？・・・氣味きみが悪わるいはいないでせう。ほ／＼。」

あとが又また險けんな調子てうしで、

「早くしないかよ。．．．お敷ものや何かを
さ．．．えゝ、煩い！ 二人附着いて鬱陶しい
ぢやあないか。チヨツ。」
と背負上か、何か振飛した。

小間使の方が、別誂の金紗の色蒲團と．．．
續いて、桐の丸火鉢を据ゑたが ー

「一寸、駒．．．」

「何をしてゝよ氣の利かない。お蒲團はね、お客
様にお敷かせ申すの、．．．知れてるぢやあな
いか。袱紗ぢやあるまいしさ。前へ据ゑてお目に掛
けるつてもものではなアいの。」

「恐入ります。」

とお柳が當てようとする處を
「薄汚れた足袋なんかで、お乗ん、なさるやうな
お人柄ぢやあないつてばさ。」

お柳はぐいと折かゞみを ー ー しなつた縁の友

染の、色の褪めたのを密と視つゝ鼻紙でコハゼを外
して、足袋を脱いで、くるりと捲いた。素足の白さ、
清らかさ、娘のやうに袂を曳いて、足袋をかくして、
すつと乗つた。

「ママ、ママ。」

「そら／＼ママちやまお歸りです。」

と臺所に聲がすると、すぼんとはずんで、ばか／
＼と駈込んだは、緋の筒袖におなじ羽織を裾まで着
て、小倉の袴を高々と穿いた三歳か、年弱の四歳か
と思ふ、くり／＼と栗蟲のやうに肥つた、旦那似た
らう、升子の面のやうでない男の兒で、妙な好みは、
土耳其形で、長くりボンを撥ねた、帽子を大な額に
被つたのが、ひよいと出て、鹿爪らしく、腰に兩手
を突張つて、顔を横つちようにお柳を視ると、

「誰？」

「おい！」

「此の方はね、坊ちゃん。」

と三澤代が言ふのを、……續いて臺所から

入つた年嵩の。　　―　遣手と此ばかりは肥つたの

がいに　　―　大な乳母が、

「餘所の小母さん。」

「馬鹿。」

「

「きさまなんか来る處ぢやあないや。」

「まあ。」

「坊ちやま、そんな事を。」

と三澤代と乳母が聲を合した途端に、

「馬鹿。」

と言ふと、蒼い靴足袋で、高く前髪を狙ふばかり、
お柳の胸をボンと蹴た。

ハツと肩すかしに、身を躲して、さそくに袖を翳した。散らさぬ雪の小手冴えて、四天を投げる花の枝。　　―　下谷で聞いた踊子をと、三津代は面を伏せたのである。

發奮でストーンと尻餅で、

「めいイ。」

と蟲のやうに泣出したが、
引抱へた乳母の手から、手足を跳ねて、ママの居
間へ、

「馬鹿、馬鹿。畜生」

「何うしたの。」

聞かぬ振して乳母が、

「山王様の小橋の處に居たんでございませがね、
ママ様がスツと、此の横町を俾でお歸り遊ばすのを
御覽になつて。」

「ぢや、遠くから、――鷹のやうだわよ。」

と、ぞろ／＼と裾を曳いて、帯を除つた、用たし
の出の大柄の大島ながら、ダリヤを縦に抱いたやう
な紅入友染のしどけなさ、朱鷺色獨鈷の伊達巻一つ
で、火鉢の向うの座蒲團へ、づつぼりと沈んだやう
に膝をのせる。

附添つた小間使が、茶のお給仕は銀瓶で。

お柳は、何と、手持無沙汰の煙管の眞鍮。

「あら、火がないぢやあないの、――
寸・・・木で拵へて悪かつたわね、――お
い、眞個に悪かつたわね。・・・一寸、駒や。」

「は。」

「木でさ。」

「へい？」

「え 火だつてんだよ。火だつてえの――木
で拵へて濟まなかつたつてんだよ。宅の火鉢は。」

「――もし・・・金の火鉢でなくつちやあ、
火は入れられないんですか。何うしたの、お客様に
灰を差上げるんぢやあないことよ。――灰をめ
しあがるかよ。一寸。」

「はい。」

「煩いね、灰をめしあがるかつてのさ。お客様が
さ。――火を上げないかい、間抜けだね。――

箱屋さん、・・・箱屋さん、・・・もし、

お林さん。」

と奥を呼んで、

「爪取をおくれ。」

「其處にございましたつけが。」

と、林と云ふ、例の女中が、のそりと出て来て、
黒檀らしい、茶棚の傍から、炭取を取つて出す。

「チヨツ、霜枯のこほろぎぢやあないよ。炭取を
何にするのさ。――つめとり、つめとりと言つ
て、銀で拵へた小さな剪刀。」

と尖つた頤でしゃくひながら、

「あなたのお國ぢや何て言ふの。は！ さ！ み！

」

「あの、お持ものゝ中ですよ。」

と小間使が注意した。

七重八重なる懷中持、緋裏の間から、きらりと抜
いて、猫板に敷いた懷紙の上へ、目と指の先で撓め
ながら、華奢にプツリ、コチツと鳴して、指を見詰
めて傍目も觸らずに、爪を寄せて二ツばかり搔込み
ながら、鷹揚に言つた。

「入らつしやい。」

「はじめまして。」

と其處で、梢が會釋をすると、伸びては居ない爪だから、剪刀の尖と中指を瞳で撓めて次手に眉を顰めながら、

「はあ、はじめまして。」

と升子は目もくれず返事をする。世俗にも、謙遜つて、一方に交情を求むる時は、お目掛けられてと言ふくらゐである。ものを言ふのに、爪を取り／＼瞬一つしないのでは、對手が睨んだより接穂がない。

「お初に……」

と梢がまた言つた。

「お初はないでせう。ほゝゝ。」

と急に忍笑をしながら、矢張り傍目も觸らないで、
「お初は最う。今しがた下駄箱の處で濟みました
つけね。」

「まあ。」

と、其の眞鍮の煙管を爪探つて、

「何うも濟みません　――　失禮をいたしました。」

「おや。」

と目を大きく冷く開けて、然も眩しさうに仰向いた。

「最うお歸りですの、何うもまあ、せつかく遠方

お越し下さいましたのに、一向お構ひ申しません

で。」

傍で三津代が堪りかねて、

「姉さん。」

と雙方へおど／＼する。

「お嬢さん。」

と、煙管を落して、梢が少し更つて、

「飛んだお邪魔をいたします．．．．．すぐにお暇をしなければ成りませんのですけれど、實は、貴女に少々お願があつて参りましたものですから。」

「お願があつて　――　私に。」

「はあ、實は　――、

口も利かせず、

「あら、然う。．．．．．お願があつて　—
私に．．．．．些とも存じませんでした。それは、
何うも、はじめまして．．．．．」

「はじめまして、一寸お初にとおつしやいよ。此
處等で仰しやる處ですわ。おつしやいよ。お初にと
さ。」

「．．．．．あの申すんでございますか。」

「奥さん。」

と三津代が涙ぐんで見る顔を、目ませで堪へて、
梢はせん術なささうに、

「お初に、」

と沈んで言つた。

升子は故とらしい上調子で、

「一寸お初はないでせう。　—　先刻下駄箱の

處で濟みましたよ。ほゝゝ、貴女があれで状箱を持

つて、おいでなされると、かゞみ山の火の見櫓で、芥

箱にお躓きなさる處だわね、お氣をつけなさいまし、

手前ども露地には悪い犬が居りますから。チヨツ煩
いことね、があ／＼があ／＼。」「
居間にも雲が掛るやうに、烏が鳴いたのである。

小さな拳を、坊ちゃんは一　小兒の癖に毛深
いから、光線の工合で、もや／＼とむく毛が見える
一　黴の生えた團子のやうに握りながら、餘所
の小母さんを睨んで立つた。（勇ましいのを、股
へ挟むやうにして、肩から壓へて、奥の敷居際から
顔だけ出して、様子を窺つて居た乳母どの。

「そら／＼烏が、烏が。」

と託けに、模様が悪いと視て、ひよいと抱いて、
どし／＼と二階へ上る。

上りしなに小兒が、ひよいと唾を吐掛ける眞似を
して、

「馬鹿あ、畜生。」

四十四

「馬鹿は其方だよ。」

と升子が険い目で二階を見上げて、

「雁ぢやあないんだー。烏を見物つてのがあ
るものか。見せる奴も見せる奴だ。」

と三つた瞳に、廂髪の顔の白い大な鳥が映つて、
尾を翻々と紅に階子壇を上へ、また、すつと行くも
のがある。

「おい。」

と升子が鋭く呼ぶと、いま乳母に續いて上りかけ
た……今度は其の小間使が中段で一寸留る。

「故々呼ばなくつても可いんだよ、あとで然う言
つて遣るから……畜生。」

「いゝえ、乳母さん呼びに参るんではございま
せん。」

「おや、然う……・・・・・椋鳥かと思つたら、お
前も矢張り烏を見物なの。おや、然うなの。」

「いゝえ、一寸干ものを見て参りますんです。」

と横状に、ぬすみ見をしながら、すくんで上った。

「ふん、そんな、お前のそんな、油揚のやうな禪なんざ、疾に鳶が攫つてら。」

と顔にも似ない悪體で、

「畜生。」

と忽ち身を震はすやうに、剪刀を疊にたゝきつけると、敷居に留つて、チンと鳴つた。

「見たが可い　　鷹が烏に成つたぢや

ないか。　　御前様の、御前様の・・・私

の・・・私の・・・大事な坊やを、縁起で

もない、誰だい烏にしようとするのは。」

と、肩も髪も揺るかと思へば、颯と顔を赤くする

と、升子は唇を噛んで、唐突に泣きじやくつた。

ヒス、ヒスと疊の目へ、（テ）と（リ）をうる

抜きに、すつと指のさきで棒を引いて、梢に密と見せながら、三津代がほろりと又涙を流す。

梢は黙つて、俯向いて、膝で手首を握つたのであ

る。

「ど、どうなさいました。」

臺所に引込んで居た女中が、障子からのそりと出て、むく／＼と疊ずりに膝を寄せると、

「何うもしないよ。」

「へい。」

「鷹が烏に成つたんだ。」

「おや、まあ。」

とうつそりと生真面目な顔をするのを、振上げた顔で、自棄に睨んだ。

「馬鹿。插子木に羽が生えたんだい、引込んでる

が可い。――第一ね。」

と急に又きつぱりと極めつける。

女中が、うつかり釣込まれて、

「何でございますか。」

「煩いね。味噌汁の噴溢れた話ぢやあないツてば、鍋蓋の棧のわれたやうな顔を突出して、何だ

い。……引込んでおいでツてんだ――第

「ね・・・一寸、三津代さん。」

「は。」

「何故、何の怨があつて、あなた、何うして私の家へ、けちをつけようとするんです。ーいゝえ、つけないとは言はせません。さかのぼつて御覽なさい。」

と、言語も大に溯つて、

「あなたは、第一、三桝家の人に成つて・・・内の抱妓に成つて、そりやあぺこべの七三にしる、分にしろ、可ござんすか。くばりものゝ、手拭まで私に見立てさせてさ、暑い最中に、涼傘をさして私がついて、此の土地でお披露目をしてからどれだけ經つと思ふんです。あしかけ三月・・・てツた處で、まる六十日稼がないぢやありませんか。いゝえ、そりや、物質上の損益は別の話としてゞすよ。勿論今度おひきなさいます。おひきなさいますに就ては、ちゃんと計算はなさいますのさ。・・・計算はなさいますけれど、よくお聞きなさいよ。」

梢はとにかく煙草をのみ得た。

四十五

升子はいよ／＼、薄いが切れさうな鋭い聲で、
「内で可ござんすか、三桝家で抱妓を置きま
す．．．．まあ、何にしてもですね。藝妓衆の世
話をしたのは、あんたがはじめてだと思つて下さい。
置けば置けますさ。幾らでも．．．．今まで
に．．．．ですが、何だの彼だのツて面倒だし、
少し考もあつたもんですから、家來はこんな大勢
居ても、――變な顔をおしでない。」

と其處にまだ手持不沙汰な女中をじろりと見て、

「お前たちの役に立たない棚おろしをするんぢや
あないから、．．．．水口が開いてるぢやないか。
おい、またお前の親類が顔を突込むよ．．．．一寸、向裏のむく犬がさ。」
と追込んで、

「抱妓は一人も置かなかつたんです。それをで
す．．．．断つてと言ふお話で、私もつい其の

氣になつて、お世話をするやうにしてからは、何う
せ藝妓を置く以上は、二人や三人ぢやあ、此の看板
に對しても、見つともなうござんすからね。次々に
後を仕入れて、燦と賑にと思つてる處なんぢやあり
ませんか。――あなたが出勤から、日もないの
に、土地ぢやあ大した評判なんです。よくお座敷が
ありました。決して手前どもの看板故とは、は、申
しません。いゝ藝妓衆だ。別してはですね、お客一
人、藝妓一人さしむかひのお座敷に持てる事は、一
寸三津代さんぐらゐの妓は、土地にも少なから
う……ツて、待合さんの人氣でございまして
ね。――

とニヤリとしながら、

「賣れなけりや可かつたんです。――失禮で
すけれども、懨かお稼ぎなすつたもんだから、内に
三津代さんて妓のある事は、最う此の土地で知らな
いものはありません。ほんの暫くの間にです、・
・・其の暫くの間にですよ、それだけよく賣込ん
だ癖に、急にふいと引込むと成つたんぢやあ、何か、
然も私に、届かない、不都合な氣に入らない事があ

つて　　「　　え、そりや然ですともさ、．．．．
氣まゝに外土地へ住替をなさるんぢやあ、何だつて、
承知をしません。けれども、約束をした男がある、
お嫁に行く、堅氣に成ると言ふんだから、それを可
厭だつてつちやあ道に背きます。ですから不可いと
は言はないのです、承知はしましたけれど、世間の
評判は、詰る處、私の家が居づらいつい事落
るほかはありません、初端の妓が居づらくつて遁出
したと成ると、また其に尾緒がついて看板にけちが
着きます。　　「　　一旦思ひ立つて、多勢賑にしよ
うとするのに、彼家ぢやあ、と世話をするものが二
の足を踏めば、抱へられようつてもものも、胸に手を
置くに極つてるぢやあゝりませんか　　「　　三津代
さん、あんたは何の怨があつて、三桝家の看板と、
私にけちをつけるんです。」

「まあ、姉さん。」
と泣聲である。

「私ばかりぢやあゝりませんよ。」
音をさして、火鉢の縁へは箸を離して、

「大事な坊やにまで、けちを着けてさ。それを言ふんですよ。煙管の事です。私が富士の夢を見たから、縁起に欲いと然う言つたら、「まあ嬉しい、一富士ですね、三茄子と言ふんですから、鷹のやうな坊ちゃんの手から、はい、ママさんに」——然う言つて故と坊やの手に持たして、私のものにしたんぢやあないの。切火を打つて、縁起棚へ飾つたものを、……一寸、盗賊だつてお佛壇の中へ手を入れるつて奴があるものか。」

言語道斷である。

此處で、倒伏しも、駈出しもしない梢は、對手のヒステリ——より餘程氣が狂つてゞも居さうに見えるが、あはれな婦は、たとへば暗い路に迷つたものゝ、賣卜を頼んで、卦の上に於て、其の運命を罵られ、酷らしきまで惡状に、火難、劍難、盜難と疊みかけられた上を、生命は旦夕に迫るぞ、と言つて威嚇されたも同然で、失望落膽、悄乎ればとても、恐れ戦けばとても、此の際怒り憤る氣は聊かも起らなかつたのに相違ない。

何故と言ふに、晝間、事の経緯を告げに来て、姪の三津代の手紙と、もに、くしゃ／＼に恐入つた。小さんの様子を視て、わが事ながら、弱い其の人たちのために、我が手で立派に煙管を取戻して、二人にほつと安心さして喜ぶ顔を見ようと思つた。うまれついた立て縞の達引氣の、不斷着の袖に凜と籠つた、其の三分の俠氣さへ、いまは八々と消耗せて、かくは、唯、運の定業を待つばかり。――梢が、煙管さへ返つたら、禮之助は其の時歸る。……あの、蓑吉さんの茄子形を、こゝに掌にする時は、禮之助の姿が内を横飛びに飛出した時の、外套に碌に釦を掛けなかつた其のまゝで、四谷の坂町の世帯の門の戸を開ける時だ。――とばかり、現の境に、茫然として、思ひ詰めて居るのであつた。

「はい、はい、へい、……はい。」

「明樂だちう。」

と升子が「ー」電話に掛つて居る女中に、振向いて、仰向いて、聲を掛けた。

「はい、え……へーい。」

「直ぐ行くから。」

で、唯今、と云つて受話機をゴトリと掛けた女中を、頭で指揮した序手に、衣紋を繕つて、一寸軽く膝を立てると、伊達巻ばかりの着ものゝ据に、投遣りな長襦袢、胸まで亂れて媚かしい。

「拾つて、拾つて、……金貨は落ちちやあ

居ないんだよ、爪剪が其處ン處で、何うぞ煙管

を……煙管ぢやあない、私を拾つて下さいま

しつて、口を利用して居るぢやあないか。鈍間だね。

然やう、然やう、お拾ひなすつたら、丁と其をもと

の通り、懐中持の中へ入れて、持ものと一緒に、は

い、はい、と言つて、私に下さるつて次第なんです

の。
」

「へい……貴女。いま爪をお取りなすつた
んでございますか。」

「知れた事さ、癩に障るお客の前ぢやあ爪をとつ
て、なし崩しに少しづゝ弾いて遣るんだよ。」

いや、聞いて居られない。

「これから行く、明樂の客と言ふのがね、お寶も
ない癖に、悪く片着けて取澄ました、何とか學士と
か言ふんでね。「貴女」とか何とか言つて、氣
障で、しみつたれるつちやありやしない。奇特に、
お約束だから行くけれど、さしむかひの杯洗と、お
銚子の間へ、鼻紙を敷いて、「失禮、遊ぶ隙はあ
つても、ついねえ、ほゝゝ。」か何かで、チヨキ
ンノゝさ。「結構です。何うぞお構ひなく、今日
は快晴仕り恐悦至極。」で、うそノゝと顔を見
ノゝ手酌で飲むのを「おや、憚様。」とか何と
か言つて、ぶちん、と白茶けた鼻の尖へ此の缺片を
弾いて遣るのさ。」

あゝ、私わたしがついて居ゐない時とき、うちの人ひとなど、どんな目めに逢あはうも知しれない。うつかり酒さけでも飲のまねばいゝが、と梢しほはこんな中なかでも思おもつて居ゐた。

「しみつたれたお客きやくには、大概たいがい然いうするもんですわね・・・ねえ、奥おくさん。」

と不意ふいに眞向まつかうからあびせられて、

「まさか。」

とうつかり、そして梢しほは寂さびしく笑わらつた。

「まさかはないでせう。」

と急きふに雲くもが晴はれたやうな、明あかるい顔かほで、

「こゝは赤坂あかさかよ、」

と衝つと立たつて居室あまへ入はいつた。

其その様やう子すが、何なにか、打解うちとけて、事ことの叶かなひでもしさに見みえたので、あはれな此この二ふ人の女をんなは、息いきを静しづめて、凝どつと、もの腰こしを伺うかがつたのである。

そのうち、蘭奢薰らんじやくんじたが、

「もつと、もつと、端はしを引ひいて、其處そこを緩ゆるめて、

然う、此方だよ、此方をさ。其方で極めたんだ。ぐ
いとー一寸しめるんだよ。解くんぢやあない。
ずらかすんぢやあないよ。アレサ氣味の惑い、瞽女
のお化が取憑いたやうな風をおしでないつて言ふの
に、衣紋がツゝ張るよ、前褌が崩れるぢやあないか。
何のために肥つてるんだい。こんな時に力を出さな
いぢやあ、今時ア場末の縁日にもいぢやあ／＼の姉さ
んは流行らない。あいた／＼痛いよ。馬鹿。いくら
綴錦だつて、内ぢやあ不斷手掛けさせて居るぢやあ
ないか。横へ一寸ばかり其處を引くんだつてのに、
わからないね。およし、畜生、馬鹿、鈍間、えゝ、鳶、
どうするんだい油揚。

と、出の小紋の冴えた色が、さつと、奥から浮い
て出ると、敷居際でくると廻つた。褌をはら／＼
と捌くとゝもに、鳳凰の翼を金粉で彩つたやうな、
錦の帯を燦と輝かして、さら／＼と長く曳いて鱗の
如く狂つて出た。

「来やがれ、油揚。」

嘘ではない。……二階から這つて下りた小

間使がはら／＼して支膝で、

「晩のお惣菜でございますか。」
と白い顔して言った。

「何がお惣菜だい。お菜つて柄かい、鹽をなめてりや可いんだ。」

おしな、帶を手傳ふんだ。此方廻つて、それさ、あれ、畜生、口惜い。」

と泣聲で、身悶を、ばた／＼すると、凄く、綺麗な尾の尖で、殆ど女二人巻倒して、

「勝手にしやがれ。素裸でお座敷へ出て遣るか
ら。」

主人も主人、女中たち……何それほどの帶一筋、したがあれでは占るまい、と下谷で聞えた派手ずきの、世帯で瘦せた手をさすつて、もう先刻から腰を切つて、帶の結目を壓へては、いや／＼差出るものでない、と氣を落ちつけて控へたのが、此の時堪り兼ねて、つと寄つて、

「お氣味が悪いでせうけれど。」
と低聲で然う言つて、ト掛を小腕で白く取つて、
ひらりと肩をつけてぐいと占めた。

升子もきこえた女である。しめ加減がきちんと當
ると、嵐にすさんで疲れたダリヤの、葉も花も眠る
やうにしなやかに成つて、其まゝうつとりと立つた。
が、唯思ひがけず、女中二人が兩隅へ避けて突立つ
て居て、引添つたのが梢、と見ると、ぶる／＼と身
を震はして、

「よして、頂戴。」

兩袖を左右に振つて、

「あら、堪らないねえ。」

とばた／＼と、兩手で袖を拂きながら、

「糠味噌臭い！」

「光ちゃん、心配おしでないよ……」

四十七

見^み附^{つけ}を掛^かけて、辨^{べん}慶^{けい}橋^{ばし}は一面^{めん}の霧^{きり}である。
目^めに立^た籠^てめて濃^こい霧^{きり}は、不^{しの}忍^のの池^{いけ}の一面^{めん}も、町^{まち}中^{なか}
も、嬉^{うれ}しいにつ^つけ、悲^{かな}しいにつ^つけ、心^{こゝろ}の描^{えが}く影^{かげ}にか
はりはない。

梢^{こしげ}のお柳^{りゅう}は、袖^{そで}も薄^{うす}れ行^ゆく霧^{きり}の裡^{うち}に、記^き憶^{おく}にばか
り判^{はん}然^{ぜん}と、以^い前^{ぜん}下^{した}谷^やに居^あた時^{とき}の我^わが面^{おも}影^{かげ}を思^{おも}ひ浮^{うか}べ
た。
然^さうだ。

さうして、丁^{ちやう}どこんな霧^{きり}の中^{なか}を、禮^{れい}之^の助^{すけ}の借^{しゃ}家^{くや}に
音^{おと}信^づれて、六^で疊^ふの二^{にか}階^{かい}の書^{しよ}齋^{さい}に逢^あひに行^いつた光^{あり}景^{さま}を、
睫^{まつげ}にばかり露^{つゆ}と成^なる涙^{なみだ}の霧^{きり}の濡^ぬ色^{いろ}に、艶^{つや}あるばかり
描^{えが}き出^だす。

然^{しか}もそれは、秋^{あき}の末^{すゑ}なる夜^よ中^{なか}であつた。

抜^ぬけられない酒^{さけ}の座^ざ敷^{しき}に夜^よは更^ふけて、一^{たん}旦^{たん}は家^{うち}へ
歸^{かへ}つたが、左^{ひだり}裊^{づま}を兩^{りやう}方^{ほう}に引^ひ上^あげる間^まももどかしい。

紫紺しこんのコートに友染いっせんのだてを包つんで　ー　大目おほめには見みてくれても、勤つとめの義理ぎりゆゑ主人かへぬしに忍しのんで、あの黒塀くろべいの裏木戸うらぎどを、密そつと開あけて、するりと抜ぬけると、鷹揚おつやうで居あて、ハイカラな癖くせに、こんな處ところを嬉うれしがる、オパールが座敷ざしき歸かへりを近道ちかみちして潜もくるのに出會でつくと、ハタと白しろい顔かほは逢あひながら、それでも互たがに見透みすかさねば成ならないほどの霧きりだつた　ー　「お樂たのみ、お土産みやげ。」と年下とししたのに背中せなかを一つ敲たかれながら、棄すて臺辭ぜりふを言いふよりか、其そのお土産みやげで胸むね一杯ぱい。

生憎あいにく、不意ふいの通路かよひぢに、今夜こんやは飴あめも甘納豆あまなつとうも煎餅せんべいも持もつて居あないのが、禮れいさんの祖母おばあさんに、もの足りたない。いつもは、丁ちやんと心掛こころがけて、たしなみの袱紗ふくさを摺すらして、「はい。」と言いつて、甘いあまものゝ紙かみぶ袋くろを、袋ふくろながら、お祖母おばあさんのちよこんとした膝ひざに置あく時の、あの嬉うれしさうな顔かほの見みられないのが残念ざんねんだ。が、それは榮耀ええうの餅もちの皮かはと、翌日あくるひの餡子あんこを考かんがへて、お祖母おばあさんの目の前まへで、私わたしのすきな栗焼あはやきの皮かはばかり食たべて見みせて、餡子あんこを大だい事に手てに据すゑて、小兒こどもらしいと笑わらはれよう。禮れいさんには何なにが可かい、女中ぢよちゆうの心づけも、大丈夫だいぢやうぶと、帶おびの間あひだに氣きを入れて、襟えりで、

懷中を覗くやうに、氣はうか／＼と町に行く。

人にも逢はず、また逢つても見えまい、人ツ子一人通らない。然も調弄はれるのが口惜しいから、交番のある處はわき道へ外れて、霧の中を、霧にも縫はせ縫ひもして行く。途中で、前後唯一人蓑を着て、ぼつと蓑の肩の浮いて来るものに逢つた。其の時霧がふは／＼と白く動いた。(蓑脱げば黒羽二重の雪見かな。) いつか座敷で、學生さんで若い癖に、發句とやら俳諧とやらに大層凝つて居るのに聞いて、一寸端唄になりさうな、好いたらしいと覺えて居る……何故か、姿が似たやうな、あれを脱いだら、禮之助に成りはしないか、迎ひに來たのぢやないか知らと立留つた時、ふつと消えると、急に寂しく成つて前途を急いだ。

ひた／＼と跫音が、靜めて行くが耳に響く、地には霜でも置くらしい。

根津と上野を見透しの小高い廣い處へ出た――
さきの辻を一つ曲つて、此からが晝も寂しいけれ

ど。生垣板塀を奥に縫ふと、其處の地内に、小ぢんまりした小さな二階屋。大方今頃は、まだ勉強をして居て、裏の小窓が、高い處に、屹と窓明がほんのりと映すであらう。其とも寒いから、しめたか知ら。近頃は身體が弱い・・・煩ひでもしなけりやいゝが、二三度咳を聞いたから、と思ふ我身もゾクリとして、・・・それまでふら／＼微醉に、突手に投げた袂を引いて、兩袖を胸に搔合せた。

霧の海から、靈地の光明、燈明臺でも探るやうな、いまだ遙にして影もない、彼方の小窓を大空に憧憬れて、蹈みしめながら浮くやうに前へ出た時、思はずハツとして一步退つた。

三間とも隔たるまい。此から曲らうとする辻の角に、きら／＼と細く閃いて、鋭い光るものがある。ゆるいが稻妻のやうに霧を切つて、丁ど立留つた此方の乳から肩のあたりと思ふ處、蜿つて閃々と臉を切る、寸法といひ、もの凄さが、見紛ふべくもない、抜刀をひらめかすに相違ない。

いつもの夜なら如何に更けても、そんな事は考へぬ、恚くまで深い霧である。通魔に誘はれて、もの狂か何ぞの、憚らず、町に刀を弄ぶのであらうも知れない。近よれば浴びせかけられると、悚然として立すくんだ。

交番へ駈つけようか、思ふ男に逢ひに行くのに巡査さんは送つてくれまい。此のまゝ内へ遁げようか、顔見た時の嬉しさに、此の可恐さはかへられぬ。

―― 何の戀路は水の底、火の中とさへ言ふものを、とかつとあつく成るまで引立つて勇氣がつくと、晃乎と振廻すらしい其の白刃の手の内が、隙間だらけで、突いて來たらかはされさう、沈めば空を切りさうだし、裾を拂へば飛べさうなり、肩をすかせば流れさうに見える、と思ふ。踊の立廻りを、人が見たら、此の方が狐か狸の憑いたであらう。―― 一人ではつと氣合を掛けて、肩をそらし、袖を潜らし、身を沈め、ひらりと飛ぶ。身振を一人ですて居るうち、其の勢、霜の尾花に飛つくやうに、衝と自刃に突當ると、ひよろ／＼と光つて流れて向うへ抜けたは、寢衣に烏打帽を着た男が、自轉車の稽古を

して居たので、ぐらりゆらりと見當つかず、おなじ處を、蹈はづしては、横縦十字に乗つては迂る、眞新しい輪が其の向々で、白く蜿つて、光るのであつた。

禮さんの二階家は、一番奥で、左右に二三軒、邸地の入口に石段を上つて木戸がある。梢はとかくして、其の木戸へ辿着いた。が、門がさゝつて居た。逢ふ約束の通じた時は、こゝに仕掛をしてあるのを、其が見えない。もう先刻から心當の窓の灯は霧に遮られたか見えなかつたし、樹立は暗し、門は遠い。呼ぶ高聲は憚られる。強く敲かぬと聞えないし、梢は、途中の白刃より、此にトンと氣を打つて、悄乎とした懐手、袖も襟も今は濡れて、霧に身を沈めて消えさうに成つた。

一つばんが、ジャンと鳴つた。

地を蹈む、すた／＼と跽音して、「來たのか。」

「禮さん。」

火よ。火事よ。燃ゆる炎よ。相濟まない事ながら、

戀の闇には松明であつた。

「流もとの板が危いよ。」

と言と、言ふうちに、

「冷いなあ。」

ひしと抱いて、軽々と、臺所を茶の間へ入つて、お祖母さんの枕許でトンと下した。

妙な女中で、給金の額さへあれば、夜具に金を掛けたから、厚綿の大夜具を、高く深く大きく廣く、ぬつくりと茶の室一杯に成つて寝て居る。・・・・・其の傍を抱かれて抜けた。

「あれでも門は雨戸と一所に、二重にしまりがあるからね、じれつたくつて臺所から飛出したんだ。うつかり机で坐眠をするとお前が来たと思つてさめた途端だよ、――馬鹿な、蓑を被て、酒を買ひに行く夢を見た。あしたは飲むぞ。翻譯ものゝ内職が、一寸、いま一句切つく處だから。」

と言ふだけ言つて、すた／＼と高くもない二階へ

飛上つて、……寂然とした。

また一つ鐘を聞きながら、臺所口も、次の襖も、梢が立つてしめて来た。

「お祖母さん。私。」

となつかしさうに頬を寄せたが、すや／＼と眠つて居た。

枕頭の火鉢に坐つて、埋火に炭をつぎもせず、じつと坐つて、うつとり二階を見つゝ、パラ／＼と忙しく繰る、あの大な字典のページの音に合せて、火鉢に指で、二上りの調子を取つた。

やがて衾は、すきゝれがして、がさ／＼と、綿は薄の蓑であつた。が、霧を被いた鴛鴦の翼は、……黒羽二重と緋縮緬。

忘れもしない。其の翌日の三時頃、數寄屋町から、俵を飛して、いまの三津代が駈つけた。――折からの日曜で、二時にうけた宴會のお約束を、忘れはしないがうか／＼して居たゝめで。

「道順が可うござんすから、すぐに茶屋へ行らつ
しやい。大變な御催促。帯も衣服も持つて來まし
た。」

と、其處はさすがに、胸算だつた。

卓子臺には、銚子が乗り、火鉢には鍋が掛つて、
梢は、臺所の手傳ひに、男ものを借りた浴衣の上被
を、いま取つて、藝妓島田の姉さんかぶりの手拭を
はづしたばかりの處、―― 出の衣ものより紋
着に、その時しめた竹屋町。

「これは驚いた。怪しからん。僕のところを何だと
思つて居るだらう。」

と帯を手傳ふ三津代の肩越に、火鉢から覗いて居
た禮さんが、蹴出しの褌に水際立つて、すらりと裾
を玄關へひくのを見ると、殘惜しさうに未練らしく
立つて來て、

「まあ、よからう。」

前で留めたが、うしろへ廻つて、

「一寸。」

と言つて、帯へ手を掛けた時、

「見つともない。」

と片袖で衝と拂つた。

「藝妓の形に成つた時は、そんな眞似をしちやあ
不可い。」

「あゝ、其の罰が當つたか知ら……何故か
う私は弱く成つた——」

梢は一人濠端に、四谷へ歸る道も忘れ、辨慶橋へ
入りもせず、見つけの坂を上へ取つて、うつかりと
歩行きながら、櫻の中の小さな柳に、しよんぼりと
身を寄せた。町中も水の面も、たゞたそがれの霧で
あつた。

「火事ですかー」
 いつかうと／＼としたと見える、半鐘の音だと思
 つて、偶と目を覺したが、其切寂然として臺所に鼠
 の駈ける音と、もにカーンと響くのは其の鼠が金盃
 か何ぞ蹈荒した餘波らしい。

と思つても、禮之助には一ツ半鐘の音に成つて何
 時までも耳を離れなかつた。熟と胸に手を置くと心
 臓がカーンと鳴るやうである。

戸の外は木曾山中の雪である。
 禮之助は彌生町の霧の夜ふけを思ひ出さずには居
 られなかつた。

いまの聲にも心着かず、尤も寢惚け半分で人を呼
 覺すやうなものではなかつたが、苧屋の妻は天鵝絨
 の襟深くすや／＼とよく寢て居る。

姑が厠へ起きたので、話の腰も折れ氣も抜けた上、

夜も更けたのに然までは、と憚られて、先刻は、二人とも聲を潜めて枕に就いたのであつた。

瞼に近き髪の艶、薄化粧の香、袖の色、
屋根には雪を被いたであらう、霧は尚ほ濃く重かつた
―― 驚鴛の衾が惚ばれる。

禮之助は寝返りして、利佐子に背を向けながら、
横状に衾を抱いたが寝られなかつた。
―― 時刻も丁度然うらしい

はる／＼と田圃つたひに、いや、寂しい町を、
木戸へ来て其處に、またたど／＼とも置の裏あたりに、お柳がイんで居さうで成らない。

背戸畠の樹立は早や眞白からう、霧だと影を包む
けれど、雪は姿を浮出させて、彩色で刻んだやうに
尚ほ面影が目に映る。

其の袖に、其の袂に、ちら／＼さら／＼とかゝる雪。

「あの、日本中の毛蟲嫌が、
情なればこそ潜つてくれた、本郷に棲んだ家の、
門にも背戸にも、總地内一面の李の樹を思ひ出す。

白雪に紛ふ麗かさ。

通ひ路も春は花やかに、其の中をちら／＼と小走
の紅入友染が、やがて淺葱の襟に映つて、颯と顔の
色を青うした。青葉の毛蟲の夥多しさ。夏の浴衣も
質素に成つて、秋の露の濡色も霧にさみしく包まれ
て、次第に流許の霜に所帯じみた。

たゞーとせのうちになさへ、膚の瘦せたは誰がため
ぞ。

あゝ、又騒ぐ・・・鼠の音が可恐くはないか、
あの心細かつた眞夜中の鍋焼餛飩が今頃は、坂のぶ
から聞えるだらう。風でも吹かぬか、・・・犬
の遠吠。

四谷を案ずるまでもないーまざ／＼と其の
背戸にお柳の姿が目に着いて、木曾の雪の風情には、
言譯のないにもせよ、さら／＼と其の女にかゝるは、

白い大な毛蟲である。

井戸を覗いて、

「きやつ。」

と云つた、内側にも釣瓶の棹にも、李の下は赤いやうな毛蟲が一杯。

姑が使つた風呂桶にも雪の積むのが目に見える。

禮之助は、幾度か、がばと起きて、雨戸に手を掛
けようとしたのであるが、晝の苦勞と疲勞と、氣あ
つかひを思ふにつけて、我が心の迷のために、利佐
子の眠を驚かすに忍びなかつたのである。

蓑も笠も納戸で視た。引被いて、いのち懸に駈出
したら、夕暮煙草を買つた處あたりで、コートの下
に襦を取つたお柳の魂とすれ違つて、我が夢は歩行
くであらう。

あゝ、あの時の夢を實にして、見えない姿にも逢
ひたい。

と思ひ詰めるのがうつゝに成つて、魂は此蓑を被つて、雪の中をうろつきながら、衾の中に身悶えした。

慥くして、夜具の袖さへ動かさず、憤ましやかに、するりと抜けて、ほんのりと人膚の花の香とゝもに、此の降雪に最う起きた苅屋の妻の、襟掻き合せ、帯しめる音を聞いたのである。

「もう、お目覺！」

と遣瀬なさに、縋つくやうにして言はうとしたが、さて利佐子の、起きて、それからの苦勞を察すれば、胸が切つて聲が涙を誘ひさうなので躡まれた。

四十九

「……其の女ですか、お蓑の事ですね、
——其は何うも然う更めてお聞きに預つては、
何とも家内に向つてよりはお話がしにくいんですよ、
實は……」

お蓑の事を、利佐子に尋ねられた時、禮之助は又
内々で酔つた中にも眞個弱つたやうに然う言つて一
寸枕に面を伏せた。

翌夜——最う其の時は二人とも寢床に入つて
居たのであるが

今朝木曾の山家の雪の一處此のさながらの孤屋に
夜が明けてから姑もやがて起出で、後の事は作しや
も預らう、婆々がつきについての系圖しらべ、蓮如
の説法、悴の自慢、料理の講釋。嫁の讒訴をしたの
なんぞ、讀者も悚毛を震はれるであらうと思ふお察
し申す

處で、一種の息氣は可恐しかつたが、炬燵をたよりに、姑が巢をくふ佛間の四疊半に小さく成つて引籠つて居た。――

はじめ禮之助の考へでは、主人周藏の許へ利佐さんから、今度の一埒の手紙を出して貰つて、善惡ともに其の返事を引搦んで、目を瞑つて其の周藏の東京の寓居へ飛込まう。で、其の。口添で横頬を撲つた戀女房の内へ歸らうと言ふ下心であつたのだが、苧屋家の恚うした様子が二日一日はおるか半日片時も居たゝまれさうでないのである。今は最う返事どころか、利佐さんの手紙まで待ちおほせない、旅費だけ借りて雪の上へ轉出ようぐらゐに思つたのに――困つた事は、然うした経緯は姑へは内證で――昨夜も爐端で澤庵の賽の目とも存ぜず吸もくの蓋を取つた頃、實は少々歴史上の著述の事につきまして、寐覺の此のあたりの實地調査に――御迷惑ながら兩三日御厄介にと言つた口がある。

またあれで居て、飯をもりつける事と、惡どめをする事は、病と言つていゝくらゐしつこいのである

から、五通りや六通りぐらゐ遁げて歸る。口實の腹案さへ立てゝ見たが、どれもものには成、らなくつて、・・・雨とさへ俗に言ふものを、禮之助の頼む樹陰は大雪である。おまけに晝頃から山嵐が添つて吹雪に成つた。

で、時々炬燵から這上る如く壁際に立つて、東向の小窓から外を視ると、野も山も濛々として人らしい、獣らしいものゝ影もない。眞白な荒海の如き中に、まだ凍らないさうで唯動くものは裏の小流の水車のいとゞ大いのが雪に包まれて倍嵩に成つて、ぐるり／＼と廻るのであるが、難破した幽霊船の大車輪が經帷子を着て、地獄の方へ、家ごと曳いて行きさうにさへ思はれる。

彼處が、來がけに路を聞いた獵師の家のあるあたり、と伸上つて覗く心覺えの小高い丘の、下には屋根も窓も視えないで、たゞ折曲つた一つ松の直く成つて、ゆさぶれ／＼突立つたのが、胡粉で塗つた可恐い大なる鬼の態に見える、とも見えれば、山深き雪の精が名も知れぬ犀の如き猛獸の装して、中空に

踞すくまれる趣おもむきもあるのであつた。

「四しめん面楚歌そかの聲こゑだ。」

取とつてもつけない事ことを言いつて、うろ／＼と爐端ろばたへ出でて、自在じざいなべで煮にものをする救主すくひぬしと思おもふ人ひとの傍そばへよつて、二つ三つ言ことばを交かはしたのがせめてもの心遣こころやりで。

しかも爾時そのときに、利佐りささんから、其その年としの春はるのはじめ寒かんの中うちの根雪ねゆきの時とき、思おもひ掛がけず薪まきを切きらして、此この田たの奥おくの山寺やまてらの庫裡くりまで、其その薪まきを借かりに出でた。

丁ちやうど恁かうした吹雪ふぶきの日ひ　　今日けふの此この雪ゆきは一度ど消きえませう　　ー　　半町はんちやうばかりの道みちだけれども、往ゆきに分わけた足跡あしあとがもう消きえた、一歩ひとあしづゝ踏ふみ分わけて歸かへる寺てらからの道みちの中なかほどで、背せに負おつた薪まきの重おもさで、どつちの足あしも雪ゆきの深ふかさに動うごかなく成なると、吹ふきつける風かぜに押伏おつぶせられて、俯向うつむけに倒たふれると、粉雪こゆきが目めく口に染しみて助すけを呼よぶ聲こゑが立たたず、薪まきの上うへへ見みる／＼うちに降積ふりつもる、もう息いきの絶たえさうな處ところを、向むかう岳だけの獵師れふしの悴せがれの折をりよく通とほりかゝつたのに救すくはれた事ことがある、山路やまぢの雪ゆきは心得こころえと用意よういがなくては、分わけては風かぜに吹ふぶ

雪の時、うつかり門へも出られない、と、其の寺までも歩行いて見たい、と言ふ禮之助を留めながらに利佐さんの話を、納戸の姑の大生欠伸の中に聞いて、楯火に袂を濡しもした。

待兼ねたのは、夜である、夜も晩食の後である。

――約束はなけれども、利佐さんが屏風の裡で、湯沸で一銚子、と沙漠のなかの緑水とか。――其の時の待たるゝにつけても、早寝はやびけ心掛けて、

「少々かぜをひきましたか知ら。」

憐むべし・・・居候根性が早や交つて、故と晩食さへ半ばを減じて速かに昨夜とおなじ綴絲さへこぼれ松葉の美しい二つ並んだ衾に坐つた。

雪はまだ降留まない。

「悴と思ふぞ。――今夜は積る話か・・・」

悴と思ふぞ、悴やすめ。」

と納戸から白髪で覗いた。

其の姑も早く寝た。

富士の山が湧いたほどに、例のお銚子が出たのである。

密と居寄つて、襦袢の搦む白い手で、

「お酌をしませう。」

今夜は、いくらか利佐さんも、松本の料理屋の娘に成つた。

禮之助が飲むうちに、周藏への玉章をしたゝめた、が、誰にいつ習つたやら、机はなしに巻紙を筆で搦いてすら／＼と憎いくらゐの姿である。

肩に雪がしみさうで、小搔巻をだしぬけに、ふはりと掛けると、

「まあ。」

と筆を斜めに、慌てもしないで、

「こんな事を遊ばして……誰方かお迷はせなさいましたね。」

と莞爾。

禮之助は尻から半ば衾に潜つた。

とかくしてお蓑の事を聞かれたのである。

「何ですか、藝妓に對手があると言ふと、榮耀らしく聞えますが、其も、矢張り所帯の苦勞から起つた事です。——所帯のたしに茶屋酒を飲むと言つては太く矛盾して居るんですが、もと／＼其の榮耀や浮氣からはじまつた事でないのを貴女にも申譯をしますんですが——

一昨年の暮でした。……無理に無理をしい／＼遣繰つて居ましたのが、何うにも凌ぎがつかなく成つた處へ、……郷里の友だちで、工面のいゝ代議士が丁ど季節だから上京しました。恥もしみつたれもありません。此にいくらか頼まうと思つて築地の旅館へ出向いたんです。いくら友だちでも久しぶりで逢つたのに直ぐに無心を言はうとするのですから、心もさもしけりや、此の容子つたらお察し下さい。手取り早い話が、然まで大金でもないのですから早速承知をしてくれました。が、まあ晩飯に附合へ、と言ふので、自動車で同伴を仰せつかつたのが柳橋の或料理屋で……其處で七八人來

た中に蓑吉が居たんです、はじめて逢ひました。

酒ばかり發奮むけれど、内證で紙入を見せてくれないから終りが着かないでせう。氣が氣ぢやあないので、お酌の踊るのを視てあざやかだ。

と人間恚う成ると情ないものです。對手は踊らせて飲んでるのに、然うかと言つて催促も成らず、そこちちするうち十二時に成つて歸ると言ふと若い妓が二人で送つて、一所に又築地の旅館へ引上げたんです、此の時だつて一所に乗つた若い妓たちにも極りが悪い、……お先へと言つて潔く場が切れなかつたぢやありませんか。

次の室には、最う床が取つてある。上座敷の食卓臺で、ウイスキーを持つて來いで、酔ぱらひの政治家は、……其癖大機嫌で引掛けるうちに、女の膝を枕にしてぐう／＼と寝て了つた。私は泣きたく成つた。此奴、何をして居るんだ、と女は顔を見らるでせう。お剩に、女中頭が上つて來て、貴方お泊り、と藝妓の顔と見較べて言ふんだから、居堪れま

すまい・・・最うそちこち一時半。

本郷まで歸る車賃で、米が三升買へるのだと思ふ
と自棄に成つて、其の三ヶ一で大川を向岸へ渡つて、
――御存じないでせう――洲崎と言ふ妙な
處で・・・昔馴染の引手茶屋の大戸をトンと押
すと開いたから飛込んだんですが、遊ぶ金子はない
んだから、酔つた酔つたと狸々の憑ものがしたやう
な事を言つて、寝惚け顔をして、むつくり起上つた
女中の、堅い蒲團の藻脱けた中へ、のめずり込むと、
此の女が若い癖に、主婦には内證らしい懷爐を裾へ
ひそめて居たのが遊女よりは難有い。すつぱり入つ
て、長火鉢の前で裾を合せて、ぶつ擴面をして、鐵
瓶の下を搔廻して居る女中を招いて、後生だ入つて
くれ、なんのツてゝれかくしを言ふうちに、ぐつす
り寝込んで、枕頭の縁臺の外は早や人通りのカラノ
下駄の音に目を覺すと、女中は居ません。朝歸の
客を迎ひに行つたと見える。年よつた主婦がふつと
湯氣の立つ鐵瓶の向うに坐つて居ます。よくお氣味
が悪くなく、そんな中で寝られましたね、と言はれ
た時は、沁々と赤面しました。勿體ない、女中の寝

床に心ぢやあ、詫を言つて、禮を言つて出ましたが、

朝歸るのを見届けたのが、主婦だから此は膽が据つて居た。僥倖に、洲崎の引手茶屋へ河童が泊つたとも狸が寝たとも新聞に出ませんでした。――それなり女中で御覽なさい、旭に照して、屹と疊のあしあとを捜したに相違ないのです。

勿論、四谷の宅へは歸りません。すぐに築地の旅館へ出向いたんですが、かれこれ十時。

政治家はまだ寝て居ました。――襖を開けて、ふらりと緋縮緬の長襦袢のが、水から離れて錦に寝て居た金魚のやうにふら／＼と弱つて出て来て、大いが眠さうな目でお早う、と私に言ふから、昨夜はお樂み、とうつかり言つた白癡さが堪らない。此を聞くとつんとして、羽織を引ふるツて着たまんま、澄して廊下に出て行つたんです。

其つ切口を利かない。――風呂場へ行つたんです。もう一人の方は、一足さきへ湯に入つて居るの

です。

代議士はまだ起きません。

其處へ、中年増の容子のいゝのが二人、どつちも昨夜ので、一寸素人らしい外出の風俗で、階子段を上つて來ました。あとへついて上つたのが蓑吉です。風呂へ行くのが、此の寒い處を廊下の障子を開放しにして行つたから、よく見えました。

其の蓑吉が、壇を廊下へ上る時、ひたりと裾が返ると、淺葱の勝つた羽二重の蹴出しに搦んで、大島お召の裾が、切れて薄汚れた綿の出たのがちらりと視えた、爪足の白いだけ、貧乏の蛇が魅込んで居るやうだし、尾花にかゝる雪のやうで姿のいゝ細い腰は、枯野に消えさうに見えたんです。――洒落や風流ではありません。女のかうしたありさまは、萩に倒れて死ぬと言ふ俳諧師より尚ほ可哀です。

風呂に行つた緋縮緬は言ふまでもありません、昨夜の誰それ、いま來たつれも、兩手に五個ぐらゐづゝ、五色の玉を飾つて居る。――其の癖、裾綿

の切れたのは、三味線も唄も立派でした。

私は慄然したんです。四谷の内でも、おなじやうな裾綿のほつれたのを着て居たんぢありませんか……」

【完】